源隆国『安養集』の研究（四）

梯　信暁

安養集巻第四

35　仏迎来不来

(253) 群疑論六に云う（『大正蔵』四七、六七頁下～六八頁中）、「問う。『観無量寿経』の九品往生には、みな阿弥陀仏の本願による来迎があるのに、中品下生にだけ聖衆来迎が説かれていないのはなぜか。答え。下品人でも来迎を得るのだから、中品人もみな来迎を得られるはずである。述べられていないのは、訳者が書き落としたか、あるいは省略されたかである。ただし一説には、中品人は菩提心を発さないから、来迎が得られなくても本願には相違しないと言われる。本願には、菩提心を発した者を迎えると誓われているからである。『薬師経』（玄奘訳『薬師如来本願経』、『大正蔵』一四、四〇六頁中等）に、薬師仏が八菩薩を遣わして行者を極楽へと導くと説かれるのは、阿弥陀仏が来迎されないからである。それがこの中品人に当たる。また『菩薩処胎経』（巻三、『大正蔵』一二、一〇二八頁上）に説かれる懈慢国に生まれる者も、至心に発願しないために来迎を得られない。それに対して『無量寿経』の三輩は、みな無上菩提心を発すので、すべて来迎を得られるのである」（要約）と。

(254) 無量寿論釈第三に云ふ（智光『無量寿経論釈』巻三、古逸）、「また次に迎来多少を明かさば、上品上生は、無量寿仏および二菩薩と、無数の化仏、百千比丘、声聞大衆、無量諸天等来る。上品中生は、無量寿仏および二菩薩と、無量大衆眷属および千化仏等来る。仏の中に無数と言はず、大衆の中に称類を別せざるは、これはこれ上上に及ばざるゆゑんなり。上品下生は、無量寿仏および二菩薩、諸眷属と五百化仏等なり。化仏は五百を上中よりも減ず。中品上生は、無量寿仏、諸比丘とともに眷属等来る。化仏は来たりて衆生を引かず。……（ここで文章が途切れている。詳細は【現代語訳】で述べる。……筆者註）……真より化を十方世界に起こし、如来、三輩九品を引接す。化すなはち真なるをもって不来不去なるも、機に随ひ物に応じて往あり還あり。前経は化の体すなはち真なるによって、来去なしと説き、観経は真より化を流すによって、往還あることを現ず。人（人＝又？）西方のある釈に言ふ、〈実に仏ありて、彼の西方よりしてここに至り、手を授けて迎接し、また仏、彼の衆生を引いて浄土に往生せしむることあることなし。ただこれ如来の慈悲本願功徳種子の増上縁力をもって、諸の衆生をして仏と縁あらしめ、仏を念じ、福を修し、十六観を作し、諸功徳の力をもって因縁として、因（因＝自？）心に阿弥陀仏来迎し、行者、仏に随って往くことを変現せしむ〉と。彼仏遣来すと言ふは、これ実には遣せず。ただこれ功徳の種子と、所化の生と、時機正しく合して、仏の来迎を見せしむ。ゆゑに彼遣すと言ふも、実には遣せず。阿弥陀仏の悲願の功徳は、湛然常寂にして、無去無来なり。衆生の識心、諸仏の本願功徳の勝力にて、自心変化し、去（＋来？）あって行人を迎摂することを、往生することありと見る。これ自心の相（＋分？）にして、化（化＝他？）に開（開＝関？）って化するにあらざるなり。ゆゑに前経には不来不去と説くは、仏の功徳に約して説くなり。観経の有来有去は、衆生の心相に約して説くなり。またある釈に言ふ、〈如来は機に応じて、またまた変現し、諸の化身を十方に現化して、往生の衆生を迎接す〉と。彼の諸（＋化仏？）は鏡智の大悲より流現す。ゆゑに彼仏、化を遣して来迎すと言ふ。しかも化を遣して迎ふこと、摩尼珠・天鼓の思なくして事を成すがごとし。しかも所現の化に往来あれども、不来と言ふは、これ或は真に約してこの説を作さん。前にすでに釈しをはんぬ」と。

【現代語訳】智光『無量寿経論釈』巻三に云う、「また次に来迎の聖衆の多少を明かす。上品上生は、無量寿仏と二菩薩、無数の化仏・百千比丘・声聞大衆・無量諸天等が来迎する。上品中生は、無量寿仏と二菩薩、無量大衆眷属・千の化仏等が来迎する。仏は無数とは言はず、大衆の種類を別けていないが、そこが上品上生に及ばない所である。上品下生は、無量寿仏と二菩薩、諸眷属・五百化仏等が来迎する。化仏の数は上品中生よりも五百少ない。中品上生は、無量寿仏と諸比丘・眷属等が来迎する。化仏は来迎しない。（……ここで文章が断絶している。次の文は、本引文の末尾まで、懐感『群疑論』巻二（『大正蔵』四七、三七頁下～三八頁上）に一致する。智光が化仏不来迎の理由を求めて、『群疑論』を引用したのもしれないが、あるいはこの部分に欠落があって、実は『安養集』が『群疑論』を引用していた可能性もある。『群疑論』は、『金剛般若経』や『維摩経』には如来は不来不去であると説くのに、『観無量寿経』に仏の来迎を説くのはなぜかと問い、次のように答えている。……筆者註）

如来が真如より立ち上がって、十方世界に向かって化（教化の活動）を起こし、三輩九品人を救われる。その化は、真如の立場から見ると不来不去であるけれども、衆生の機根に応じて往還を現わされるのである。『金剛般若経』等は化の体が真であるという立場から不来不去と説き、『観無量寿経』は真より化を起こして、往還を現されるのである。

また西方の論師は次のように言う。〈仏が西方より娑婆に来て手を差し伸べて迎接すると説かれたり、あるいは仏は衆生の手を引いて浄土に往生させるなどということはないと説かれたりする。それは、如来が慈悲心より発された本願の功徳種子の増上縁の力によって、多くの衆生に、仏と縁を結ばせ、仏を念じさせ、福を修めさせ、十六観を行じさせて、それらの功徳の力を因縁として、行者の心に阿弥陀仏の来迎の相や、自身が仏に随って往生する姿を現出させることを言うのである〉と。阿弥陀仏が遣来すると説かれるが、実体として遣来するのではない。本願の功徳の種子と、それを修めた衆生の心とがぴったりと符合して、仏の来迎を見せてくださるのである。だから遣来すると説かれるけれども、実体としては遣来しないのである。阿弥陀仏の大悲の誓願の功徳は、寂滅不動であり、行ったり来たりするものではない。衆生の心が仏の本願の功徳の力によって動かされ、来迎や往生の相を見るのである。これは衆生の自分の心の相分（客観的側面）であり、他者に関わるものではない。だから『金剛般若経』等に不来不去と言うのは、仏の功徳の側から説くのである。『観無量寿経』に有来有去と言うのは、衆生の心の相の側から説くのである。

また一説には、〈如来は衆生の機根に応じて変現し、多くの化身を十方世界に現して、往生の衆生を迎接される〉と言う。その化身は、大円鏡智の大悲より現されたものである。だから阿弥陀仏が化仏を遣して来迎すると説かれるのである。しかもその来迎は、摩尼珠や天鼓と同様、意図せずにおのずからなされることである。往来するのに不来と言うのは、真如の側から説かれたためであろう。すでに述べた通りである」と。

(255) 群疑論第七に云う（『大正蔵』四七、七一頁上～中）、「問う。『観仏三昧海経』（巻五、『大正蔵』一五、六六九頁上～中）に、〈父を殺し、母を傷つけるなどした罪人は、臨終の時、地獄の犬が変化した黄金の車と、地獄の炎が変化した美女とに迎えられる。罪人はそれを見て嬉しくなり、喜んで乗り込むと、鉄斧を持った美女に身を切り刻まれる〉と言い、また、〈四波羅夷罪を犯し、仏法を謗るなどした者は、死の瞬間、痛みに狂い、汚物にまみれる。すると地獄の鬼が現れて、それを極楽の情景に変化させる。地獄の罪人のうめき声が讃歌のように聞こえ、その声に欺されて地獄からの迎えの蓮台に乗り込む〉と言う。今日私を迎えに来る蓮華が、地獄の火蓮でないかどうか、どうしたら分かるのか。答え。行・相・語・仏の四つのことによって地獄の火車でないと判断できる。第一の行、すなわち生前の行いとは、『観仏三昧海経』の罪人は、四波羅夷罪を犯し、懺悔することなく、善師にも遇わなかったので、地獄の火華を見る。『観無量寿経』の下品人も同じく罪人であるが、臨終に善師に遇い、至心に念仏することによって罪を滅し、極楽の蓮華に迎えられるのである。大いに異なる。第二に相、すなわち臨終の状態とは、『観仏三昧海経』の罪人は、死の瞬間、痛みに狂い、汚物にまみれる。『観無量寿経』の下品人は、念仏によって身心共に安らかで、悪想は消滅し、ただ浄土の菩薩を見て妙香を聞く。よって違いを見分けられよう。第三に語、すなわち呼びかけられる言葉とは、『観仏三昧海経』の罪人は、地獄の罪人のうめき声を讃歌のように聞く。『観無量寿経』の下品人は、称名によって罪が滅したから迎えに来たという声を聞く。第四に仏とは、『観仏三昧海経』の罪人は、地獄の炎が変化した美女に迎えられ、黄金の車に乗り込むと、鉄斧を持った美女に身を切り刻まれる。『観無量寿経』の下品人の前には、阿弥陀仏が遣わされた化仏・化観世音菩薩・化大勢至菩薩が現れる。以上四つのことによって、極楽からの蓮華が来迎が、『観仏三昧海経』に言う地獄の火車とは異なることが分かるだろう」（要約）と。

(256) 浄土五会讃法照に云う（『浄土五会念仏略法事儀讃』、『大正蔵』四七、四八〇頁下）、「浄土の池は平らかに　瑠璃の地面は輝いて　弥陀は念仏勧めらる　自ら必ず迎えると」（要約）と。

(257) 無量寿経上に云う（『大正蔵』一二、二六八頁上～中）、「もしも私が仏の悟りを完成することができたとしても、その時、あらゆる世界の人々の中に、菩提心を発し、諸の功徳を修めて、誠心誠意、私の世界に生まれたいと願う者がいて、その者が命終わろうとする時に、多くの菩薩たちを従えて彼の元に現れることができないならば、私は決して仏の位には就かない」（要約）と。

(258) 同経連義述文賛中に云う（憬興、『大正蔵』三七、一五二頁上）、「経の、〈設我得仏〉より〈不取正覚〉までは、中品人の救いを誓う。菩提心を発す者を迎えると誓われたのであるから、発心しない者を迎えなくとも、本願に違うことはない」（要約）と。

【考察】

『安養集』巻四の十三論題は、七門の第四「感果」に属し、すべての項目が『観無量寿経』九品往生段の教説に関連する。臨終来迎から往生極楽までの過程や、九品往生人の行位などを論ずる項目が集められている。

『観無量寿経』九品往生段は、十世紀の貴族社会に流布した臨終来迎信仰の拠り所であり、十世紀に興起する比叡山天台宗における浄土教教理研究は、臨終来迎信仰への対応を目的とするものであった。その先駆に位置する良源（九一二―九八五）『九品往生義』は、『観無量寿経』九品往生段を註釈して、臨終に聖衆来迎を感得するための方法を示した書であると言える。それに続く禅瑜（九一三―九九〇）『阿弥陀新十疑』や千観（九一八―九八三）『十願発心記』等、十世紀の著述にも同様の意図が看取される。彼らは、「臨終十念の称名念仏によって無始以来の罪業が滅せられ、来迎を得て極楽に往生することができる」という見解を提示している。

源信は、その見解に対する批判の意を込めて『往生要集』を著し、阿弥陀念仏を単なる滅罪法ではなく、大乗菩薩道の実践として意味づけるための教理を組織した。『往生要集』に提示された念仏の中心は、菩提心を発して阿弥陀仏の色身を観想することであり、それに堪えられない悪人に対しては称名念仏を勧めている。源信は、往生のためには臨終正念の現前による臨終来迎の感得が必須であると言い、行者をその境地に導く「臨終行儀」の実践として、五念門と自往生観からなる「十事勧念」の方法を提示している。臨終来迎信仰への対応は、『往生要集』においても主要な課題であったことが知られるのである。

『安養集』は当然それを踏まえているが、『往生要集』が論じ尽くした臨終行儀の諸問題などには触れていない。本巻に掲げられた十三論題の中、『往生要集』の論述を継承すると見られるのは、「39 華開遅速」「41 劫量」「43 往生多少」「45 三輩九品異同」「46 九品往生階級」「47 三輩九品階位」の六項目である。加えて本巻には、良源『九品往生義』の論述を承けたと思われる項目がいくつかある。「36 九品所乗異」「40 得道時異」「41 劫量」「45 三輩九品異同」「46 九品往生階級」「47 三輩九品階位」である。『観無量寿経』九品往生段を出拠とする本巻諸項目の編集にあたっては、『九品往生義』も参照されたことがうかがわれるのである。よってそれらの項目では、『往生要集』に加えて、『九品往生義』との関係についても検討したい。

本項「35 仏迎来不来」には、臨終来迎の有無に関連する要文が掲げられている。『往生要集』大文第二「欣求浄土」の第一「臨終来迎楽」の項には、聖衆来迎の様相を紹介しているが、来迎衆の九品による差異などの問題については議論されていない。『安養集』はここに六文を挙げて、『往生要集』が扱わなかった問題を提示しているのである。

その冒頭（253）『群疑論』は、『観無量寿経』中品下生段に臨終来迎が説かれていないことの理由を問い、答えて、略されているだけで本来はあるという説と、『観無量寿経』中品人は菩提心を発さなかったから来迎が得られなかったのであるという説とを挙げるものである。『往生要集』が扱わなかった問題であるが、ここに懐感が引用した『薬師経』の文は、迦才『浄土論』巻中（『大正蔵』四七、九四頁中）に、極楽への往生を勧める経論を列挙する中に引用され、そのことを源信は『往生要集』大文第三「極楽証拠」の第一「対十方」の項に取り上げている。源信はあくまでも『薬師経』の文を、往生極楽を勧める教説として紹介したのであり、阿弥陀仏の来迎を得られない中品人を救う教説であるとする『群疑論』の見解には言及していない。『安養集』は、『往生要集』の引文を手がかりとして、源信とは違った観点で『薬師経』の文を評価する見解をここに紹介しているのである。

（254）智光『無量寿経論釈』は、九品往生の各段における来迎衆の相違について述べた文である。やはり『往生要集』には論ぜられなかった問題である。上上品から順に述べて、中上品で終わっている。おそらくこれ以下にも文章が続いていたはずであり、筆写の段階で脱落があったものと思われる。その後に続く文は、『群疑論』巻二の文であり、智光が引用したものか、あるいは智光『無量寿経論釈』の文に続いて、『安養集』が掲げた要文であるのかはわからない。内容は、『般若経』の不来不去の立場と、『観無量寿経』の来迎の教説とを会通するもので、これも『往生要集』には論ぜられなかった問題である。

（255）『群疑論』は、『観仏三昧海経』に説く火車来迎と、『観無量寿経』の聖衆来迎とを区別する方法を示したもので、この文は、『往生要集』大文第六「別時念仏」の第二「臨終行儀」の末尾に依用されている。臨終行者の不安を取り除くことを目的として、源信が自ら問いを発し、『群疑論』を引いて答えとしている。ただし本引文によると、源信の問いを含む問答の全体が『群疑論』に依るものであることがわかる。それはともかく、『安養集』の編者が、『往生要集』の隅々までも精査して、関連資料の収集に当たったことをうかがわせる要文である。

（256）『浄土五会念仏略法事儀讃』は、念仏によって臨終来迎が得られることを説く文である。すでに巻二「18 念仏利益」の項に述べたが、『往生要集』には『浄土五会念仏略法事儀讃』が引用されていない。また源信は「念仏利益」の中に臨終来迎を挙げていない。それらのことを指摘する意図をもって、『安養集』はここに『浄土五会念仏略法事儀讃』の文を挙げたものと思われる。

（257）『無量寿経』は、臨終来迎を誓った第十九願の文、（258）憬興『無量寿経連義述文賛』はその釈文である。『往生要集』には、『無量寿経』第十九願への言及が二箇所に見られる。その一つは、大文第三「極楽証拠」の第二「対兜率」の項において、兜率よりも極楽を勧める理由の一つとして、阿弥陀仏の本願に来迎が誓われていることを挙げる所であり、もう一つは、大文第六「別時念仏」の第二「臨終行儀」に、臨終の十事勧念を説く中に、来迎を誓った本願を念ぜよと説く所である。（257）は、それらの論述の出拠として挙げられたものである。また（258）に提示された、中品人は発心しなかったから来迎が説かれないという見解は、（253）『群疑論』が挙げた一説に符合するもので、第十九願がその根拠となることを指摘する要文であると言える。

36　九品所乗異

（259）群疑論七に云う（『大正蔵』四七、七一頁中～下）、「問う。九品人には修行の優劣によって、来迎衆の数や蓮華開敷までの時間、蓮華台の荘厳などに差別がある。しかるに上品下生と下品下生の蓮台が、同じく〈金華〉であるのはなぜか。答え。三つの見解がある。

第一の説には、下品下生人が見るのは、自らが乗る花ではなく迎えの仏が乗る花であり、彼は罪障のために仏を見ることができず、仏座も明らかには見えず、それが日輪のように見えると説かれるのであると言う。第二の説には、下品下生人は罪障のために来迎を感見できず、ただ金蓮に引かれて往生するのであると言う。第三の説には、同じ金華ではあるが、大小勝劣麁妙の違いがあると言う」（要約）と。

(260) 無量寿論釈第三に云ふ（智光『無量寿経論釈』巻三、古逸）、「また次に所持の勝劣を明かさば、上品上生は、観音菩薩、金剛台を執る。上品中生は、紫金台を持つ。上品下生は、金蓮華を持つ。中品上生は、蓮華台に坐す。中品中生は、七宝の蓮華を持つ。中品下生は、経中には了せず。まさ有にして脱すべし。下品上生は、命終に宝蓮華に乗る。下品中生は、諸天の華に順ふ。下品下生は、命終に金華の日輪のごとくなるを見る」と。

【現代語訳】智光『無量寿経論釈』巻三に云う、「次に所持する蓮華の勝劣を明かす。上品上生では、観音菩薩が金剛台を手に持つ。上品中生では、紫金台を持つ。上品下生は、金蓮華を持つ。中品上生は、蓮華台に坐る。中品中生は、七宝の蓮華を持つ。中品下生は、経には書かれていない。脱落したのであろう。下品上生は、命終に宝蓮華に乗る。下品中生は、諸天の華のようである。下品下生は、命終に金華が日輪のように見える」と。

【考察】

本項「36 九品所乗異」には、来迎の蓮台の九品による差別について議論するための要文が集められている。『往生要集』には論ぜられなかった問題である。

一方『九品往生義』では、中品中生の釈（『仏全』二四、二四一頁下）に、上品と中品の蓮台の相違について問い、上品人は菩提心が熟したために金蓮台が迎え、中品上生人は持戒のゆえに一色の蓮台が、中品中生人は修因不定のために七宝の蓮台が迎えると答える記述が見え、これが「九品所乗異」という論題名の由来であると思われる。ただし本項には『九品往生義』の論述の出拠と目されるような要文は挙げられていない。

(259)『群疑論』は、上品上生人を迎える金蓮華と、下品下生人が見る金蓮華の違いについて論ぜられた文であり、そのような議論は『往生要集』にも『九品往生義』にも見られない。(260)『無量寿経論釈』は、九品蓮台の相違を挙げた文で、やはり『往生要集』にも『九品往生義』にも言及されていない。

本項は、『九品往生義』より抽出した問題によって設けられ、その論義に備えて、良源や源信が言及しなかった要文を集めた項目であると言える。

37 中陰有無

(261) 群疑論二に云う（『大正蔵』四七、四〇頁下～四一頁中）、「問う。穢土に受生する者には必ず中陰がある。娑婆から浄土への往生にも中陰があるのか。答え。二説ある。一説には、中陰はないと言う。此土で命終し、蓮華座の中に生まれるので、死と生陰とが連続するからであると言う。この説は正しくない。私見によると、蓮華に坐すのは娑婆でのことであり、それは浄土の生陰ではない。浄土の生は、彼の宝池に至ってはじめて得られるものである。浄土は有色の世界であるから、中陰の伝識があって後に浄土の生陰を得るのである。

問う。中陰があると言うならば、浄土の宝池に至ってはじめて華中に入ると考えるべきであろう。なぜ娑婆で華中に入るのか。答え。往生人は福徳が勝れているので、娑婆で中陰の華に入ることができるのである。浄土に趣く過程が中陰、宝池に至れば生陰である。

問う。浄土の中陰は着衣の状態であるのか。答え。経の文証はないが、着衣だと思われる。『倶舎論』（巻九、『大正蔵』二九、四六頁上）に、欲界の中陰は無衣だが色界の中陰は着衣であると言う。浄土は色界よりも勝れているので、着衣であろう。

問う。浄土の中陰ではどのような体勢をとるのか。答え。生天の中陰は頭が上で足が下、地獄は頭が下で足が上、人間・餓鬼・畜生は鳥が飛ぶように水平の体勢をとる。浄土の中陰は頭が上で足が下である。蓮華の中に坐るという形である。一説には、生天の際は立ち姿であり、浄土の中陰は坐っていると言う。

問う。浄土に趣く中陰の間、十万億の仏土において食事はどのようにするのか。答え。欲界の中陰では香を食する。浄土の受生まではあっという間なので、食事をする必要もないが、十万億の仏土を過ぎる間、空中で仏土の香気を食するのである」（要約）と。

(262) 無量寿経下（『大正蔵』一二、二七二頁中～下）に、中輩の者を説いて云う、「彼が命を終えようとする時、無量寿仏が聖衆と共に化身を現される。その姿は真実の仏そのものである。彼は化仏に随って極楽に往生する」（要約）と。

(263) 同経連義述文賛下に云う（憬興、『大正蔵』三七、一五九頁中～下）、「経の、〈其人臨終〉より〈現其人前〉までは、第二に死有の相が現れることを言う。経の、〈即随化仏往生其国〉は、これは第三に中有に浄土に趣くことを言う」（要約）と。

(264) 同経述義記中に云ふ寂法師（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「問ふ。見仏・来迎等は何の位にあるや。未だ死せざる時となすや、すでに死したる時となすや。答ふ。これまさに終はらんとして、未だすでに死せざる時にあり。命終の位に三種あり。一に明了心は、通じて善・悪・無記の心を起こす。二に自体愛はただ有覆無記心を起こす。三には最後不明了心は、ただ異熟無記心あるのみ。この中、見仏・来迎等のことは、すなはち第

一明了心の位にあり。或はこれすでに死して、中有に趣く時に、欲色の業を転じて、彼に往生する者は、まさに中有を受けて彼の処に住すべきがゆゑに。観経に了するがごときは、〈自らその身を見れば、金剛の台に乗り、仏の後に随従して、弾指の頃のごとくに、彼国に往生す〉と。台に乗りて彼に往くは中有にあらず。これ何ぞ中有たらん。行の疾く通ずるがゆゑに。彼此は十万億を隔つといへども、弾指の頃のごとくに、よく彼に至るなり」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「問う。見仏・来迎等は何の位であるか。死有の前か、死有の後か。答え。死有の直前である。命終の位に三種ある。一は明了心。これは善・悪・無記の心を起こす。二は自体愛。これは有覆無記心（煩悩を伴う無記の心）を起こす。三には最後不明了心。これは異熟無記心（善悪の業に報いて起こる無記の心）を起こす。この中、見仏来迎等のことは、第一の明了心の位で感得する。あるいは死有の後、中有に趣く時に、欲界・色界の業を転じて往生する者は、中有を受けてそこに住しなければならないだろう。ただし『観無量寿経』に、〈自分の身を見れば、金剛の台に乗り、仏の後に随従して、あっという間に極楽に往生する〉と説かれるように、蓮台に乗って極楽に往く間は中有ではない。これほど速疾に往生できるのだから、中有であるはずがない。娑婆と極楽とは十万億仏土の隔たりがあるが、あっという間に到着するのである」と。

(265) 観経疏閻下に云ふ（道鸞『観経疏』巻下、古逸）、「問ふ。この華台に乗りて往生する時、これ中蘊たるや、これ生蘊たるや。答ふ。これ生にして中にあらず。下の中品上生の中に説く、〈自ら己身を見れば、蓮華台に坐し、仏のために礼をなす。未だ頭を挙げざる頃に、すなはち極楽世界に往生することを得〉と。往生の身を捨てず、すなはち浄土の身なり」と。

【現代語訳】道鸞『観経疏』巻下に云う、「問う。蓮華台に乗って往生する時は、中有か生有か。答え。生有である。中有ではない。次の中品上生の文中に、〈自分の身を見れば、蓮華台に坐り、仏に礼拝している。その頭を挙げる前に、即座に極楽世界に往生することができる〉と言う。往生の身を捨てることなく、そのまま浄土の身となるのである」と。

【考察】

本項「37 中陰有無」には、娑婆から極楽への往生の過程に中陰（中有）があるのかどうかという議論に関連する要文が集められている。『往生要集』をはじめ、先行の比叡山の典籍中には取り上げられなかった問題である。

(261)『群疑論』は、中陰があるという立場である。(262)『無量寿経』(263)『無量寿経連義述文賛』は、下巻中輩の文とその釈文であるが、憬興も中有があると考えていることがわかる。

(264) 義寂『無量寿経述義記』は、自ら罪業を滅して往生する者には中有があるけれども、蓮台に乗って極楽に趣く間を中有とするのではないと言う。

(265) 道鸞『観経疏』も、蓮台に乗っている間は中有ではなく、生有であると言う。『安養集』は『往生要集』等が扱わなかった問題をここに提示したのである。所掲の要文を通観すると、唯識教学への言及が多く見受けられることから、本項は法相宗との対論を意識して設けられた論題であったことが推察される。

38 命終心三性五受分別

(266) 観経疏閻下に云ふ（道鸞『観経疏』巻下、古逸）、「問ふ。九品往生人の命終・受生は、これ何等の心なるや。答ふ。九品往生浄土の人の、受生命終は、みな悉くこれそれ方便善心なり。問ふ。いかんがこの命終心は、これ方便善心なるを知ることを得る。答ふ。中・上二輩は、みな終に臨む時、仏を見、僧を覩、および正法を聞きて命終す。ゆゑに知んぬ、これ方便善心にして命終する人なり。中品上生の人の往生の中に説くがごとし、〈蓮華台に坐し、長跪合掌し、仏のために礼を作す〉と。この心はこれ方便善心なり。類をもって知る、九品受生の心も、またこれ方便善心なることを。此土の受生命終の異熟無記心とは同じからず」と。

【現代語訳】道鸞『観経疏』巻下に云う、「問う。九品往生人の命終・受生は、どのような心の状態であるのか。答え。九品往生浄土人の受生・命終は、みな方便善心である。

問う。命終心が方便善心であることは、どうしてわかるのか。答え。中品・上品人は、みな臨終に仏や僧を見、正法を聞いて命終する。だから方便善心の状態で命終すると言える。中品上生の人の往生を説く中に、〈蓮華台に坐し、長跪合掌して、仏に礼拝する〉と説かれる通りである。この心は方便善心である。そこから類推して、九品往生人の受生の心も、みな方便善心であることが知られる。娑婆の受生・命終が、異熟無記心であるのとは異なる」と。

無量寿経述義記寂法師中に云ふ（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、中陰有無の中にこれを摂むるがごとし。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「37 中陰有無」の項（264）に掲げた通りである。

(267) 群疑論五に云う（『大正蔵』四七、五七頁下）、「問う。諸論に、命終・受生は捨受（憂受・喜受・苦受・楽受・捨受の五受の中、憂・喜・苦・楽のいずれでもない感受）であると言う。しかるに『観無量寿経』に、歓喜踊躍等と説かれるのは、喜受が強いと思われるが、いかがか。答え。一説には穢土の受生には聖衆来迎がないので捨受であるが、浄

土の受生は来迎があるので喜受であると言う。また一説には、往生浄土の際も捨受の状態で命終すると言う。喜受では命を捨てられない。歓喜踊躍は命終に臨む心であり、命終の瞬間ではないと言う」（要約）と。

(268) **無量寿経義疏法位下に云ふ（法位『無量寿経義疏』巻下、古逸）、「初は本有の修因、二に〈其人〉の下は、死有の善相、三に〈即随〉の下は、中有の所趣、四に〈住不退〉の下は、生有の獲益なり」と。**

【現代語訳】法位『無量寿経義疏』巻下に云う、「第一は本有の修因を明かす。第二に〈其人〉の下は、死有の善相を明かす。第三に〈即随〉の下は、中有の状態で極楽に趣くことを明かす。第四に〈住不退〉の下は、極楽での生有の得益である」と。

(269) **観経記下に云ふ龍興（龍興『観経記』巻下、古逸）、「得果を明かす中、命終の後、金蓮華を見、乃至すなはち往生す等とは、これ何時の中に、蓮華を見るものか。もし文相に着さば、命終すでにをはり、中有生の時、金蓮華を見、生有の時浄にして、すなはち極楽に生まる」と。**

【現代語訳】龍興『観経記』巻下に云う、「得果を明かす中、命終の後に金蓮華を見て、即座に往生すると説くが、これはいつ蓮華を見るものか。経文によるならば、命終の後、中有の時に金蓮華を見、生有の時に浄化されて極楽に生まれると言える」と。

【考察】

本項「38 命終心三性五受分別」には、九品往生人の命終心が、三性（善・悪・無記）五受（憂受・喜受・苦受・楽受・捨受）のどれに当たるかを論じた要文が集められている。前項同様『往生要集』等には取り上げられなかった問題である。

(266) 道闇『観経疏』は、方便善心の状態で命終・受生すると言う。

その文に続いて『安養集』は、義寂『無量寿経述義記』に触れ、前項「37 中陰有無」所引の文（264）の参照を求めている。そこには、命終の時に心が明了であれば善・悪・無記の心を起こすが、自体愛（有覆無記心）を起こしたり、心が不明了ならば異熟無記心を起こしたりすると述べられている。

(267)『群疑論』には、九品往生人の命終・受生の心は捨受か喜受かと問い、答えて、一説には喜受、一説には捨受であると言う。

(268) 法位『無量寿経義疏』には、「死有の善相」という言葉があるので、命終の心は善であると見ていたと考えられる。

(269) 龍興『観経記』には、命終の後、中有の時に金蓮華を見ると言い、また浄土での生有の時は浄心であると言うので、死有（命終）の心は無記、生有（受生）の心は善であると考えていたことが推察される。

(268)(269) の論述は、命終心の分別を問う論題の趣旨に必ずしも合致しないようにも見受けられるが、本項が、前項「37 中陰有無」と一連の問題を扱う項目であると考えれば、理解が可能である。『安養集』はここに源信等が扱わなかった問題として、臨終から往生までの心の状態を論ずる二つの論題を設けたのである。本項所掲の要文にも唯識教学への言及が目立つことから、やはり法相宗との対論が想定されていたと考えるべきであろう。

39 華開遅速

(270) 観経に云う（『大正蔵』一二、三四四頁下～三四六頁上略抄）、「上品上生人は、往生すると阿弥陀仏や諸菩薩の色身の完全な姿を見、光明宝林の説法を聞く。上品中生人の乗った蓮華のつぼみは、一夜を経て開く。上品下生人の蓮華は、一日一夜を経て開く。中品上生人の蓮華は、往生の後すみやかに開く。中品中生人の蓮華は、七日を経て開く。中品下生人は、七日を経て観音・勢至の説法に遇って喜ぶ。下品上生人の蓮華は、七七日を経て開く。下品中生人の蓮華は、六劫を経て開く。下品下生人は、蓮華の中で十二大劫を過ごして、はじめて花が開く」（要約）と。

(271) 観経義疏恵遠に云う（浄影『観経義疏』末、『大正蔵』三七、一八四頁上）、「上輩の三人は、往生の時が異なる。上上は浄土に至って日時を経ず即座に華が開く。上中は一夜を経て開く。上下は一日一夜を経て開く。中輩の三人も異なる。中上は浄土に至って即座に開く。上上と同じである。なぜかと言うと、中上は小乗の聖人であり、無漏の浄心を持つからである。中中は七日を経て開く。中下は経文に明記されないが、往生の後七日を経て菩薩に遇い法を聞く。下輩の三人も別々である。下上は七七日を経て開く。下中は罪業が重いので、六劫を経て開く。下下は罪障極めて重く、十二大劫を経て開く。蓮華の中に居る間に心を鍛え清めて、はじめて法を聞く資格が得られるのである」（要約）と。

(272) 観経正宗分散善義に上品上生を釈して云う（善導、『大正蔵』三七、二七四頁上）、「〈生彼国〉以下は、金蓮台が浄土に到着すると、華中に留められることがないということを明かす」（要約）と。

(273) 群疑論七に云う（『大正蔵』四七、七二頁上～中）、「問う。浄土において蓮華の中に留められるのは、罪障のためか、あるいは勝れた功徳によってか。答え。下品下生段には、十二大劫を経て蓮華が開き、観音勢至が諸法実相滅罪の法を説くと言う。これによって、罪障のために華開が遅れることがわかる。

問う。ではなぜ華中において罪障による苦報を感じないのか。答え。菩提心を発し念仏

して罪を滅したために、罪業は微細となり、苦の報を引かないのである。念仏の功徳によって浄土の身を感得し、苦果を感ずることがなくなり、また仏の本願力によって苦果が現れない。ただし少しの罪が残っているので、華開を妨げるのである。『無量寿経』には、仏の不思議智等を疑うことによって、胎宮に生まれ、苦はないけれども、五百年の間華中に幽閉されると言う。これも同様、華開を妨げるだけの罪であり、苦報を招くほどではないのである」（要約）と。

(274) 無量寿論釈第三に云ふ（智光『無量寿経論釈』巻三、古逸）、「また次に華開の遅速を明かさば、上品上生は、生じをはりてすなはち開く。上品中生は、宿を経てすなはち開く。上品下生は、一日一夜。中上は尋で開く。中中は七日、中下もまた七日。下上は七七日、下中は六劫、下下は十二大劫。〈尋開〉とは、二日三日尋ねをはりて開くを得。何をもってしかるを知るとならば、上下は日夜、中中は七日。ゆゑに知んぬ、中上はおのずから上下と中中との間にあることを。また中中と中下と、ともに七日と言ふは、これまたまさに遅速あるべし。或は第七日の朝と夕との異あり、或は八日九日なるも未だ二七に至らざるがゆゑに、大数をもって同じく七と言ふ。大経の中に言ふ、〈中下の二輩は並びに疑心生ずるによってのゆゑに、五百歳に至るまで見仏聞法等をせず〉と。この経の胎生と同じ。観門とは同じからず。乃至広説」と。

【現代語訳】智光『無量寿経論釈』巻三に云う、「次に蓮華開敷の遅速を明かす。上品上生は、往生してすぐに蓮華が開く。上品中生は、一夜を経て開く。上品下生は、一日一夜で開く。中上は間もなく開く。中中は七日、中下もまた七日で開く。下上は七七日、下中は六劫、下下は十二大劫で開く。〈尋開〉とは、二日三日してから開くことを言う。なぜかと言うと、上下が一日一夜、中中は七日だからである。よって中上がその中間であることが知られよう。また中中と中下と、ともに七日と言うが、これにも当然遅速がある。第七日の朝と夕の違いであるとか、あるいは八日・九日かかるけれでも二七日はかからないので、概略一七日と言ったなどと考えられる。『大阿弥陀経』には、〈中下二輩は疑心を生じたことによって五百年の間見仏聞法等ができない〉と説かれる。『無量寿経』の胎生と同じである。『観無量寿経』の教説とは異なる。以下略」と。

(275) 無量寿経述義記中に云う（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「中品下生中乃至華開遅速とは、生じて七日を経、観世音および大勢至に遇ふ。文中略するがゆゑに華開の言なし。理として現にこれあるべし。中中品と遅速同じなるは、経時は同じといへども、所見は異なるがゆゑに。謂く、彼は仏を見、此は菩薩を見る」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「中品下生…中略…華開の遅速を論ずると、ここには往生して七日を経た後、観世音と大勢至に遇うと言う。文に省略があるために華開の文言がないが、理として当然あるべきである。中中品と遅速が同じなのは、時間は同じでも、見るものが異なるからである。中中品は仏を見、中下品は菩薩を見ると説かれる」と。

(276) 浄土論中に十住毘婆沙を引いて云う（迦才『浄土論』巻中、『大正蔵』四七、九五頁下）、「善根植えた人でさえ　疑心起こせば華は閉ず　信心清浄なる人は　蓮華開いて仏を見る」（要約）と。

【考察】

本項「39 華開遅速」には、往生人を乗せた蓮華のつぼみが、極楽に到着してから華を開くまでの時間に、九品によって長短の差異があることを論ずるための要文が集められている。

『往生要集』では、大文第二「欣求浄土」の第二「蓮華初開」に、蓮華開敷の時に往生人が歓喜する様子が描かれているが、そこには華開までの時間の九品による差異についての議論はなされていない。

ただし大文第十「問答料簡」には、この問題に関連する議論が散見する。まず第一「極楽依正」の第八問答に、『観無量寿経』の九品往生人が華中で長い時間を過ごすことを問題視し、はたしてそれで極楽と呼べるのかと問う。答えとして『無量寿経』巻下所説の疑城の胎宮と同じく、その間に苦を受けることがないので、極楽と言うことに不都合はない等と言う。次に「問答料簡」の第五「臨終念相」の第十一問答に、堕地獄の罪が滅ぜられた例として、『無量寿経』所説の疑城の胎宮や、『観無量寿経』下品段所説の七七日・六劫・十二劫の胎生を挙げている。さらに「問答料簡」の第八「信毀因縁」の第四問答に、疑惑の者は往生できないのかと問い、答えて、『無量寿経』より疑城の胎宮を説く文を引用して、往生は可能であると言う。

本項「華開遅速」は、それらの論述を継承するものであるが、『無量寿経』所説の疑城の胎宮については、『安養集』は、別に巻四に「45 三輩九品異同」、巻七に「66 四生分別」の項を設けて、詳細な議論を展開するための要文を列挙している。本項「華開遅速」では、『観無量寿経』九品往生段の教説に限定して、関連の要文七文を挙げているのである。

その冒頭（270）『観無量寿経』は、本論題の出拠の経文で、華開までの時間を説く部分だけを抽出している。

（271）浄影『観経義疏』はその釈文で、上品下生よりも中品上生が速いこと、中品下生に時間が説かれていないこと、下品人が長く華中に留められる理由などについての見解が簡単に述べられている。本項における問題の所在を指摘する文であると言える。

(272) 善導『観経疏』散善義は、上品上生人が浄土において華中に留められることがないことを言う。上品上生人には罪がないからである。華中で過ごす時間の意味を示唆する文であると言える。

(273)『群疑論』には、華中に留められるのは罪障のためであるが、発心・念仏によって大方の罪は滅せられているので、残存する罪は微細であり、苦報を感ずるほどではないと言う。華開を妨げるだけで苦報を感じない点では、『無量寿経』所説の疑城の胎宮と同様であると述べている。この文は、『往生要集』「問答料簡」の第一「極楽依正」の第八問答において、源信が、「たとひ恒沙劫を経て蓮華開かずともすでに微苦なし。あに極楽にあらずや」と述べたことの拠り所の一つであると言える。

(274) 智光『無量寿経論釈』には、華開までの時間を説く『観無量寿経』の文を列挙して比較検討し、加えて、『大阿弥陀経』や『無量寿経』には疑心による胎生を説くのであり、『観無量寿経』九品段の教説とは意味が異なると述べている。その理由を詳細に議論する記述は見えないが、(273)『群疑論』とは異なる立場であることは確かである。

(275) 義寂『無量寿経述義記』には、華開までの時間が、中品中生・中品下生ともに七日であることを問題とし、時間は同じであるが、見仏に差異があると言う。(271) 浄影『観経義疏』が指摘した問題の一つに取り組んだものと言える。

(276) 迦才『浄土論』は、『十住毘婆沙論』の偈からの引文で、信・疑による華の開・不開を説く一節を挙げたものである。迦才は『十住毘婆沙論』から、阿弥陀仏の本願の意義を説く文とそれに続く六十四行百二十八句の偈文の全てを引用しているが、『安養集』はその中の二行四句のみを抽出して掲げている。その四句は、『往生要集』大文第二「欣求浄土」の第二「蓮華初開」の末尾に、「龍樹の偈に云ふ」として引用された四句の偈文に一致する。『安養集』は、ここに源信の論述の拠り所を示したことになろう。

本項は、あくまでも『観無量寿経』九品往生段の教説についての議論に主眼を置くものである。所々に散見する疑惑往生人の問題を論ずる要文は主として巻七「66四生分別」に集められ、また本巻の「45三輩九品異同」にも関連の要文が挙げられている。

40 得道時異

(277) 観経に云う(『大正蔵』一二、三四四頁下〜三四五頁中略抄)、「上品上生人は、往生して仏の色身を見、光明宝林の説法を聞いて、即座に無生法忍(一切法が空無生であることを知ること)を悟り、あっという間に諸仏のもとを巡って授記(やがて悟りを得ることの保証・予言を授けること)を得、もとの極楽に還って無数の陀羅尼門(法門を記憶するための呪文)を会得する。上品中生人は、七日を経て即座に無上の悟りを得、不退転に住して、一小劫を経て無生法忍を得る。上品下生人は、七日の間に仏を見、それが三七日の間に次第に明瞭となり、説法を聞いて、三小劫を経て百法明門(あらゆる法を知る智慧)を得、歓喜地(不退転)に至る。中品上生人は、即座に阿羅漢の悟りを得る。中品中生人は、以下略」(要約)と。(以下の文が欠落したものと思われるので、補っておきたい。……中品中生人は、法を聞いて須陀洹道を得、半劫を経て阿羅漢となる。中品下生人は、往生から七日を経て法を聞き、一小劫を経て阿羅漢となる。下品上生人は、十二部経を聞いて無上道心を発し、十小劫を経て百法明門を具して初地に入る。下品中生人は、大乗の法を聞いて無上道心を発す。下品下生人は、諸法実相・滅罪の法を聞いて菩提心を発す。……筆者註)

(278) 観経義疏恵遠に云う(浄影『観経義疏』末、『大正蔵』三七、一八二頁上〜下)、「上輩に三人ある。上上・上中・上下である。上品上生人は大乗の四地以上の菩薩である。往生して即座に無生忍を得るからである。上品中生人は初・二・三地の信忍の菩薩である。往生の後一小劫を経て無性を得ると説かれているからである。

問う。『菩薩地持経』(巻九、『大正蔵』三〇、九四五頁上)には、初地から八地に至るのに一大阿僧祇劫を要すると言う。『観無量寿経』に、わずか一小劫で無生を得ることができると説かれるのはなぜか。答え。三義を挙げる。第一に、世界によって時間の速度が異なるからである。『華厳経』(六十巻本巻二十九、『大正蔵』九、五八九頁下)には、娑婆の一劫は極楽の一日一夜に当たると言う。よって極楽の一劫は娑婆の無量阿僧祇劫に当たる。『菩薩地持経』は娑婆の時間で言い、『観無量寿経』は極楽の時間で言うのである。第二に、無生忍の行位が異なるからである。『菩薩地持経』が一大阿僧祇劫の後に八地に至ると説くのは、初地の菩薩のことである。『観無量寿経』が一小劫の後に無生忍を得ると説くのは、信忍の最終段階の菩薩のことである。信忍の最後は第三地に当たる。第三に、到達する行位が異なるからである。『菩薩地持経』は一大阿僧祇劫の後に八地に至ると説き、『観無量寿経』は一小劫の後に得ると説く無生は第七地である。

次に、上品下生人は種性解行(十住・十行)の菩薩である。三小劫を経て百法明門を得て初地に至ると説かれるからである。

問う。『菩薩地持経』では、種性位から初地まで一大阿僧祇劫かかると言う。『観無量寿経』が三小劫で初地に至ると説くのはなぜか。答え。やはり時間の速度の違いである。『菩薩地持経』は娑婆の時間、『観無量寿経』は極楽の時間で説かれるからである。

問う。『菩薩地持経』では種性位から初地までに一大阿僧祇劫かかり、初地から第八地までも同じく一大阿僧祇劫かかると言う。『観無量寿経』では上品中生人が一小劫で無生を得、上品下生人は三小劫で初地に至ると説かれるのは矛盾ではないか。答え。道理は通っ

ている。上品中生人は、信忍の最終段階から一小劫をかけて七地の無生忍を得るのであり、上品下生人は、伏忍の初めから三小劫をかけて初地に至るのである。

中輩にも三人がある。中上・中中・中下である。中品上生人は、小乗の前三果（預流果・一来果・不還果）である。往生して即座に阿羅漢を得ると説かれるからである。中品中生人は、見道以前の内外の凡夫で、浄戒を保って悟りを求める者である。往生の後七日で須陀洹を得、半劫で阿羅漢を得ると説かれるからである。中品下生人は、見道以前の世俗の凡夫で、世間の福徳によって悟りを求める者である。往生の後一小劫を経て阿羅漢を得ると説かれるからである。下輩の三人は大乗始学の者の中、罪の軽重によって三品に分かれる。行位を当てて階級を論ずるのは困難である」（要約）と。

【考察】

本項「40 得道時異」には、『観無量寿経』の九品往生人が往生した後、悟りを得るまでの時間に差異があることを論ずるための要文が挙げられている。

得益の時期に注目して九品の差異を比較検討するような議論は、『往生要集』には見えない。ところが良源『九品往生義』の下品中生釈（『仏全』二四、二五五頁下）には、この問題が取り上げられている。そこには、下品上生人は往生の後十劫を経て百法明門を得て初地に至ると説かれ、下品中生人は六劫を経て初地に至ると説かれるのは矛盾ではないかと問いが発せられ、答えて、上生人は十小劫であり、下生人は六大劫であるから矛盾はないと述べられている。『安養集』がここに「得道時異」の項を設けたのは、『九品往生義』の論述を継承するものと思われる。

本項には二文が掲げられている。(277)『観無量寿経』は、九品往生人の得益を説く経文を抽出したものであり、(278) 浄影『観経義疏』は、その釈文である。浄影は、九品往生人の行位に注目して、経文の意味を検討している。その浄影の論述により、この問題が、九品往生人の行位に関する議論に集約されることが判明したと言える。『往生要集』では、この問題は大文第十「問答料簡」の第二「往生階位」の項に取り上げられている。

そのことを確認したところで、この項目の編集は打ち切られたように思われる。そして本巻末尾に改めて「46 九品往生階級」「47 三輩九品階位」の二論題を設けて、九品往生人の行位を論ずるための要文を集めているのである。

ちなみに本項所掲の (277)『観無量寿経』の文は、末尾の二論題には挙げられず、(278) 浄影『観経義疏』の文に相当する箇所は、「47 三輩九品階位」の (303) に、要点のみを抽出する形で略抄されている。このことからも、本項と本巻末尾の二論題とが一連の論題であることがうかがい知られよう。

41 劫量

(279) 群疑論七に云う（『大正蔵』四七、七一頁下～七二頁上）、「問う。下品中生は六劫で花が開き、下品下生は十二劫かかると言う。その劫は、娑婆の時間か、浄土の時間か。答え。一説には、釈尊は娑婆の衆生のために説法されたのだから、娑婆の時間が示されていると言う。私見は異なる。浄土の時間である。例・教・理の三義を挙げて説明しよう。一に例とは、六欲天の寿命は、天の時間で示されている。四天王天の寿命が五百年であると説かれるのは、天の時間である。娑婆の時間に換算すると何百万年にもなる。二に教とは、上品中生には、一夜にして華が開くと説かれる。これは浄土の一夜である。浄土において夜は華を閉じ、昼に華が開く。それを娑婆の時間に換算すると昼・夜各半劫に当たる。三に理とは、日月のみが浄土の時間で示され、劫量は娑婆の時間で示されているとするならば、中品中生の七日の華開は娑婆の七劫に当たり、下品中生の六劫は浄土の六日に当たることになり、矛盾を生ずる。下品上生の七七日は娑婆の四十九劫に当たり、下品中生の六劫よりも四十三劫も長くかかることになってしまう。以上のことから、劫量も浄土の時間で示されていると見るべきである」（要約）と。

観無量寿経義疏に云ふ 恵遠（書名のみで引文がない。おそらく前項所掲の (278) の参照を求める註記が脱落したものと思われる。……筆者註）

(280) 法聴（ママ）記に云う（法聡『釈観経記』、『浄土宗全書』五、二三六頁上）、「浄土では華の開閉によって昼夜を分けている。その一日一夜である。『華厳経』には、娑婆の一劫が極楽の一日一夜に当たると言う」（要約）と。

(281) 観経に上品中生を説く中に云う（『大正蔵』一二、三四五頁上）、「七日を経て即座に不退転を得る」（要約）と。

(282) 観経正宗分散善義に云う 善導（『大正蔵』三七、二七四頁中～下）、「七日で無生を得ると言うのは、娑婆の七日であろう。娑婆の七日は、浄土ではあっという間である」（要約）と。

(283) 九品往生経（ママ）に云う 大僧正（良源『九品往生義』、『仏全』二四、二五七頁下）、「問う。蓮華中で過ごす劫量は、浄土の時間か娑婆の時間か。答え。諸師の説によると浄土の時間である」（要約）と。

【考察】

本項「41 劫量」には、『観無量寿経』に説く「劫」が、浄土の時間で示されているのか、あるいは娑婆の時間かということを論ずるための要文が集められている。

この問題は『往生要集』では、大文第十「問答料簡」第一「極楽依正」の第八問答に取り上げられている。そこに源信はまず『観無量寿経』九品往生段の、往生人が蓮華内に留め置かれる云々の教説を挙げて発問し、それと『無量寿経』所説の疑城の胎宮とを対比して、共に苦を受けないので極楽に往生することを得たと見てよいと言う。続いて、経に説かれる日時・劫数に関する議論を展開する。源信は、経には浄土における時間が説かれているという説を批判する。それは懐感・智憬の説であると言う。智憬については不詳であるが、懐感『群疑論』巻七（『大正蔵』四七、七一頁下～七二頁上）には、娑婆の衆生に説くのだから娑婆の時間で劫量を示しているという説を否定し、浄土の劫量が示されていることを主張している。源信は、その懐感が否定した説が逆に正しいと言い、四つの証拠を挙げている。その第一に、『観無量寿経』に説く阿弥陀仏の身長、六十万億恒河沙由旬は、娑婆の長さの単位で示されたと考えなければ矛盾を生ずると言う。第二に、『尊勝陀羅尼経』に説く、釈尊が忉利天善住天子の寿命を延ばした話の中に、七日間の修行をさせたと言う、その七日は娑婆の七日でなければならないと言う。もし忉利天の七日であれば、娑婆の七百年に当たり、釈尊の八十年の寿命を越えてしまうからである。第三に、『無量寿経』所説の疑城の胎宮に留め置かれる五百年は、娑婆の時間で示されていると考えざるを得ないと言う。第四に、『観無量寿経』上品中生・下生に示された華開までに要する一夜・一日一夜が、もし浄土の時間であるならば、娑婆の半劫・一劫に当たることになり、上品人の華開までの時間とは到底考えられないと言う。

その論述を受けて、『安養集』はここに「41 劫量」という論題を設け、五文を挙げている。

(279)『群疑論』は、源信が指摘のみした文の全容を掲げたものである。例・教・理の三義を挙げて、経説の劫が浄土の時間であることを述べている。それに続き『安養集』は、「観無量寿経義疏に云ふ恵遠」と、書名だけを掲げて、引用文を挙げていない。おそらく前項「40 得道時異」に挙げた(278)浄影『観経義疏』の文の参照を求めているのであろう。書名に続いて、「得道時異の中にこれを摂むるがごとし」というような註記が脱落したものと思われる。前項に掲げた通り、浄影は『観無量寿経』は極楽の時間によって説かれていると主張している。懐感の立場と同じである。

(280) 法聡『釈観経記』にも、極楽の時間によって説かれているという見解が示されている。

(281)『観無量寿経』は、上品中生の文で、往生の後七日を経て不退転を得ると説かれた箇所である。これは、(278)の浄影の見解に順うならば、浄土の時間で示されているということになる。

ところが(282)善導「散善義」は、その七日は娑婆の時間であると言う。極めて簡略な記述であるが、善導は浄影以来の定説を否定したと言える。

さらに『安養集』は、本項末尾に(283)良源『九品往生義』の文を挙げている。良源は通説に順って、経所説の時間は極楽の時間であると述べている。(282)(283)によると、源信が、師の良源が支持した隋唐以来の定説を否定したこと、そしてその見解が善導の説に符合することが知られるのである。

『安養集』全巻を通して『九品往生義』の引用はこの一箇所のみである。経所説の「劫量」について、良源と源信とが立場を異にしていることは、当時論義の場で問題となっていたのであろう。そのことを検討するために、『安養集』はここに「劫量」という論題を設け、関連の要文を集めたものと思われる。

42 往生相貌

(284) 群疑論二に云う（『大正蔵』四七、四二頁中～下）、「問う。往生行を修する者に、どのような相貌が現れたならば、往生が定まったと判断することができるのか。聖教の文証を示してほしい。答え。三つの聖教に次のような教えが説かれている。第一に、『称讃浄土経』に、娑婆五濁の中で世間難信の法を聞いて信解し、教えの通りに修行する者は、かつて無数の仏のもとで善根を植えた、希有の者であり、そのような者は命終わって必ず極楽に生まれるであろうと説かれる。第二に、『平等覚経』に、浄土の教えを聞いて、身の毛が抜けるほどに弥立つ者は、必ず解脱を得るであろうと説かれる。第三に、『大集賢護経』第一（『大正蔵』一三、八六七頁上～中）に、〈阿弥陀如来の名号を聞いて一心に阿弥陀仏を観じ、明瞭に仏を見ることができれば、それを諸仏現前三昧（般舟三昧）の成就と言う。そこで仏に、どうすれば仏国に生まれることができるのかと問うと、阿弥陀仏は、発心して往生を願い、心を込めて仏を正しく念じ続けるならば、必ず往生することができるだろうと答えられた〉と言う。以上三つの中の一つでも現れたならば、往生できると考えよ」（要約）と。

【考察】

本項「42 往生相貌」には、(284)『群疑論』一文のみを掲げる。修行者の相貌から往生の可非を知ることができるような指標を、聖教に求めたものである。

平安時代の貴族社会には、死者が往生できたか否かを、後にのこされた者が知りたいという願望が存在していた。十世紀末、慶滋保胤が著した『日本往生極楽記』は、往生の奇瑞を収集列挙した文学作品である。命終の前後に現れた不可思議な現象を書き綴って、それが死者の往生を示す証拠であると主張している。圧倒的に多いのは、臨終に際して紫雲・光明・音楽・芳香などが確認されたという記述であり、それらはみな聖衆来迎がおとずれたことを示唆する情景であると言える。そのほかにも、死後に親しい人の夢に現れて往生できたことを告げたとか、命終の日時をあらかじめ認識して修行に邁進したなどという記述もある。それらを往生の奇瑞とすることは、中国唐代以来の定説であり、迦才『浄土論』や文諗・少康『往生西方浄土瑞応删伝』に提示されたことである。保胤もその見解を継承したことを、自ら序文に明言している。以来日本でも承認され、十二世紀に盛んに著される「往生伝」と呼ばれる一連の文学作品は、その合意の上に成立している。ところがどの奇瑞にも聖教の文証が得られていないという弱点を抱えていたのである。

往生の奇瑞を聖教の文によって立証するというような問題意識は、『往生要集』には見られない。しかるに十一世紀後期の論義の場では問題となっていたのであろう。『安養集』は、いち早くそれを取り上げ、『群疑論』の中から関連の文を見出して掲げたのである。

ただし（284）『群疑論』の文は、死者の往生の可非を後にのこされた第三者が判断するための指標を示したものではない。聞信修行を説く『称讃浄土経』、聞法歓喜を説く『平等覚経』、般舟三昧による願生念仏を説く『大集賢護経』の文は、いずれも臨終の行者が、あらかじめ自ら感得する境地について述べられたものである。往生の可非は第三者が判断すべきものではないことが知られよう。本項は、そのことを示すために設けられた論題であると言える。

43　往生多少

（285）無量寿経下に云う（『大正蔵』一二、二七八頁中～下）、「弥勒菩薩が仏に、この娑婆世界から極楽に往生する不退転の菩薩はどれくらいいるのかと尋ねると、仏はお答えになった。〈娑婆世界からは六十七億の不退転の菩薩が往生するだろう。あなたと同じように無数の仏を供養した者から、ほんの少しの功徳を修めた小菩薩まで、数えきれない。また娑婆世界からだけではなく、他の仏の国からも数多くの菩薩が往生する。第一に遠照仏の国からは百八十億の菩薩が往生し、第二に宝蔵仏の国からは九十億、第三に無量音仏の国からは二百二十億、第四に甘露味仏の国からは二百五十億、第五に龍勝仏の国からは十四億、第六に勝力仏の国からは一万四千、第七に師子仏の国からは五百億、第八に離垢光仏の国からは八十億、第九に徳首仏の国からは六十億、第十に妙徳山仏の国からは六十億、第十一に人王仏の国からは十億、第十二に無上華仏の国からは無数の菩薩が往生するだろう。第十三に無畏仏の国からは七百九十億の大菩薩に加えて、小菩薩や修行僧も往生するだろう。これら十四の仏の国のからだけではなく、十方の数限りない仏の国からも無数の菩薩が極楽に往生する。その仏の名や、往生する菩薩や比丘の数を挙げようとすると、一劫をかけても説き尽くせない。今はあなたのためにほんの少し説き示しただけである〉」（要約）と。

（286）平等覚経下に云う（巻四、『大正蔵』一二、二九九頁上～中）、「阿逸菩薩が仏に、娑婆から無量清浄仏の国に往生する阿惟越致の菩薩はどれくらいいるのかと尋ねると、仏はお答えになった。〈娑婆には七百二十億の阿惟越致の菩薩がいて、みな無量清浄仏の国に往生するだろう。あなたと同じように無数の仏を供養した者から小菩薩まで、数えきれない。また娑婆世界からだけではなく、他の仏の国からも数多くの菩薩が往生する。第一に光遠炤仏の国からは百八十億の菩薩が往生し、第二に宝積仏の国からは九十億、第三に儒無垢仏の国からは二百二十億、第四に無極光明仏の国からは二百五十億、第五に於世無上仏の国からは六百億、第六に勇光仏の国からは一万四千、第七に具足交絡仏の国からは十四億、第八に雄恵王仏の国からは八、第九に多力無過者仏の国からは八百一十億、第十に吉良仏の国からは万億、第十一に恵辯仏の国からは一万二千、第十二に無上華仏の国からは無数の菩薩が往生するだろう。第十三に楽大妙音仏の国からは七百九十億の菩薩が往生するだろう。彼らはみな阿惟越致の菩薩であり、無数の比丘僧や小菩薩もみな往生するだろう。これら十四の仏の国からだけではなく、八方上下の数限りない仏の国からも無数の菩薩が無量清浄仏の国に往生する。その仏の名や往生する人の数を挙げようとすると、昼夜一劫をかけても説き尽くせない。今はあなたのためにほんの少し説き示しただけである〉」（要約）と。

（287）大阿弥陀経下に云う（『大正蔵』一二、三一七頁上～中）、「阿逸菩薩が仏に、娑婆から阿弥陀仏の国に往生する阿惟越致の菩薩はどれくらいいるのかと尋ねると、仏はお答えになった。〈娑婆には七百二十億の阿惟越致の菩薩がいて、みな阿弥陀仏の国に往生するだろう。あなたと同じように無数の仏を供養した者から小菩薩まで、数えきれない。また娑婆世界からだけではなく、他の仏の国からも数多くの菩薩が往生する。第一に頭楼和斯仏の国からは百八十億の菩薩が往生し、第二に羅隣那阿竭仏の国からは九十億、第三に朱蹄彼会蔡仏の国からは二百二十億、第四に阿蜜蔡羅薩仏の国からは二百五十億、第五に樓波黎波蔡蹉仏の国からは六百億、第六に那惟于蔡仏の国からは一万四千、第七に維黎波羅潘蔡蹉仏の国からは十五、第八に和阿蔡仏の国からは八、第九に尸利群蔡仏の国から

は八百一十億、第十に那他蔡仏の国からは万億、第十一に和羅那惟于蔡蹧仏の国からは一万二千、第十二に沸覇図耶蔡仏の国からは無数の菩薩が往生するだろう。第十三に隨呵閲祇波多蔡仏の国からは七百九十億の菩薩が往生するだろう。彼らはみな阿惟越致の菩薩であり、無数の比丘僧や小菩薩もみな往生するだろう。これら十四の仏の国からだけではなく、八方上下の数限りない仏の国からも無数の菩薩が阿弥陀仏の国に往生する。その仏の名や往生する人の数を挙げようとすると、昼夜一劫をかけても説き尽くせない。今はあなたのためにほんの少し説き示しただけである〉」（要約）と。

(288) 無量寿経述義記下に云ふ（義寂『無量寿経述義記』巻下、古逸）、「経の、〈弥勒菩薩白仏言〉より〈我今為汝略説之〉に至る。述して曰く、これすなはち諸方の往生を顕示す。中において先づ此方の往生を明かす。六十億の不退の菩薩とは、これはこれ厭響（ママ）のゆゑに往く。未だ必ずしも三輩九品に入らず。称計すべからざる小行の菩薩および小功徳を修する者は、彼に生まれんと欲せんがために勝行を進む。ゆゑにまさにこれ三輩九品生なり。小行の菩薩は、すでに十信に入る、熙連以上にして、上輩生にあり。小功徳を修する者は、未だ熙連を満たさざる以下にして、中下輩にあり。余方の往生は、文のごとく知るべし」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻下に云う、「経の、〈弥勒菩薩白仏言〉より〈我今為汝略説之〉までは、諸方仏国からの往生人を明かす。その中、まず此方娑婆世界からの往生人を明かす。六十億の不退の菩薩とは、穢土を厭って往生する者を言う。彼らは必ずしも三輩九品には含まれない。無数の小行の菩薩や小功徳を修する者とは、極楽に生まれたいと思って修行に励む者を言う。よって彼らこそが三輩九品の往生人である。小行の菩薩とは、十信に入った菩薩であり、すでに熙連河沙ほどの無数の仏を供養した上輩人である。小功徳を修する者とは、未だ熙連河沙ほどの仏への供養を達成していない中・下輩人である。その他の国からの往生人については、経文の通りである」と。

(289) 安楽集上に云う（『大正蔵』四七、六頁中～下）、「第八に、阿弥陀仏の浄土は、凡夫も聖者も共に往生できることを明かす。阿弥陀仏の浄土は報土であり、仏願によって上根・下根を共に救う。凡夫の善でみな往生させ、また天親・龍樹等の地上の菩薩も往生する。『無量寿経』に、仏は弥勒菩薩の問いに答えて、〈この娑婆世界からは、六十七億の不退の菩薩が往生する〉と説かれる。その他の国々からも同様に、多くの菩薩が往生するのである」（要約）と。

(290) 大宝積経十八に云う（無量寿如来会、『大正蔵』一一、一〇〇頁中～下）、「弥勒菩薩が仏に、この娑婆世界から極楽に往生する不退転の菩薩はどれくらいいるのかと尋ねると、仏はお答えになった。〈娑婆世界からは七十二億の不退転の菩薩が往生するだろう。ほんの少しの功徳を修めて往生する者は数えきれないほどいる。また難忍如来の国からは十八億の不退の菩薩が往生し、東北の宝蔵仏の国からは九十億の不退の菩薩が、無量声如来の国からは二十二億の不退の菩薩が、光明如来の国からは三十二億の不退の菩薩が、龍天如来の国からは十四億の不退の菩薩が、勝天力如来の国からは十二千の不退の菩薩が、師子如来の国からは五百の不退の菩薩が、離塵如来の国からは八十一億の不退の菩薩が、世天如来の国からは六十億の不退の菩薩が、勝積如来の国からは六十億の不退の菩薩が、人王如来の国からは十倶胝の不退の菩薩が往生する。勝華如来の国からは五百の菩薩が、大いに精進して一乗の修行をこころざし、七日間に百千億那由他の衆生を救って、共に往生する。発起精進如来の国からは、六十九億の不退の菩薩が往生し、無量寿如来や菩薩衆に供養礼拝を捧げる。そのすべてを説こうとすると、一劫をかけても説き尽くせない〉」（要約）と。

【考察】

本項「43 往生多少」には、娑婆をはじめとする諸仏国から極楽に往生する人の数を示した『無量寿経』巻下の教説に関連する要文が集められている。『往生要集』大文第十「問答料簡」の第三「往生多少」の論述を継承するものである。

『往生要集』「往生多少」において、源信は上掲『無量寿経』巻下の文によって、娑婆の衆生が少善往生の縁を得ていることを主張して、行者を勧励する。加えて『阿弥陀経』に見える、少善根では往生できないという教説との会通を行い、多・少は相対的な言葉なので矛盾はないと述べている。

それを承けて『安養集』「43 往生多少」では、冒頭に(285)『無量寿経』の文を掲げるが、それは『往生要集』に引用されたのと全く同一の文である。また(286)『平等覚経』(287)『大阿弥陀経』(290)『大宝積経』無量寿如来会の文は、異訳の同一箇所である。諸本を比較すると、訳語や数字に少しの差異があるが、『安養集』には、そのことを問題にした釈文などは見られない。

本項には、(288) 義寂『無量寿経述義記』より、「不退の菩薩・小行の菩薩・小功徳の者」という三者の行位を論じた文、および(289)『安楽集』より、極楽は凡・聖共に往生する世界であることを述べた文が掲げられている。往生人の行位に注目しているように見受けられる。

『安養集』は、『往生要集』に扱われた経文について、源信とは違った観点から論ずるための要文を掲げているのである。

44　往生難易

(291) 無量寿経下に云う（『大正蔵』一二、二七四頁中）、「仏は弥勒菩薩と神々や人々におっしゃった。〈無量寿仏国の声聞・菩薩の功徳や智慧がすぐれ、国土が清らかなことはすでに述べた通りである。それなのになぜ人々は、善を行い悟りを得ようとしないのだろうか。どうか努め求めてほしい。そうすれば必ず、生死を超え、極楽に往生して、悪道の縁を断ち切り、悟りを得ることができるだろう。極楽への往生は容易なのに、往生できる者は少ない。極楽は間違いなく仏力に引かれて、みな往生できる所である。どうして世俗を捨てて、悟りを求めないのか。求めれば必ず、無量の寿命が得られるだろう」〈要約〉と。

(292) 同経連義述文賛下に云う（憬興、『大正蔵』三七、一六三頁中～下）、「経の、〈仏告弥勒〉より〈不可称説〉までは、第二に人に往生を勧める教説である。二節よりなる。初めに浄土の勝れていることを述べ、後に往生を勧める。初節はまた二段よりなり、初段には声聞菩薩の徳が勝れていることを述べている。経の、〈又其国土〉より〈清浄若此〉までは、後段であり、国土の勝れていることを述べている。経の、〈何不力為〉より〈昇道無窮極〉までは、第二節の、往生を勧める教説である。また二段よりなる。初段には直接的に往生を勧めている。〈なぜつとめて善をなさないのか〉とは、往生の因行を勧める教説である。力を尽くして善を為せと言うのである。〈道の自然〉とは、善を行うことによっておのずから得られる果徳を言う。貴賤の隔てなく往生できるので、〈着すること上下なし〉と言うのである。一説には、〈洞達無辺際〉とは実相を領解することであると言う。実相は浄土の本であり、往生者は必ずそれを窮めなければならないと言うのである。この説は間違いである。実相を窮めることは凡夫には不可能である。ただ仏の教えに応えれば、往生することができ、智慧は得られるのである。〈去る〉とは穢土を捨て去ることである。また一説には、〈五悪道〉とは三途・非天・女人を指す。女人は悪趣の本であると言う。また五悪とは五道であると言うが、いずれの説も誤りである。女人趣などという処はない。五悪は悪道の因を言うのであり、悪趣そのものを言うのではない。人道・天道は善趣ではあるが、浄土に対しては悪道であるので五悪道と言う。この穢土にあっては、まず見道の惑を断じて三途の因果を離れ、後に修道の惑を断じて人天の果を断つのである。ところが浄土に生まれると、即座に五道の果が遮断されるので、「横に截る」と言い、おのずからその因を閉じて悟りを得るので、「窮極なし」と言うのである。経の、〈易往而無人〉より〈寿楽無窮極〉までは、重ねて悲嘆を述べる。因を修せば容易に往生できるのに、修する者がないから往生人は少ないと言うのである。因を修して生を求めれば、往生は間違いないので、「国は違逆せず」と言う。だから「易往」なのである。ところが衆生が妄執のために往生できないので、「自然の牽くところ」によって「人なし」であると言うのである。一説には、因を満たせば必ず果が成就することを、「自然の牽くところ」と説くとも言う。これも正しい。道徳は因、寿楽は果である。寿とは受の意である」〈要約〉と。

(293) 同経述義記下に云ふ（義寂『無量寿経述義記』巻下、古逸）、「経の、〈何不力為善〉より〈寿楽無有極〉に至る。述して曰く、この下、勧めて回向を修せしむ。論に云ふ、〈何者か菩薩の巧方便回向。礼拝等の集むる所の一切の功徳善根をもって、自身住持の楽を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲するがゆゑに、一切衆生を摂取して共に同じく彼の安楽仏国に生ぜんと作願す。これを菩薩の巧方便回向成就すと名づく。かくのごとく善く回向成就を知りて、三種の菩提門相違の法を遠離す。なんらか三種。一には智恵によりて楽を求めず。我心に自身に貪着することを遠離するがゆゑに。二には慈悲門によりて一切衆生の苦を抜く。無安衆生心を遠離するがゆゑに。三には方便門によりて一切衆生を憐愍す。自身を供養恭敬する心を遠離するがゆゑに。菩薩は、かくの如き三種の菩提門相違の法を遠離して、三種の随順菩提門の法を満足することを得るがゆゑに。なんらか三種。一には無染清浄心。自身のために諸の楽を求めざるをもってのゆゑに。二には安清浄心。一切衆生の苦を抜くをもってのゆゑに。三には楽清浄心。一切衆生をして大菩提を得しむるをもってのゆゑに。衆生を摂取して彼の国に生ぜしむるをもってのゆゑに〉と。今この文中に、先づ回向を勧めて、穢を棄て浄を取らしめ、後に違を顕はして、回向に順ずるを得しむ。中に十八句あり。二・二対をなす。〈何ぞ力めて善をなし道の自然を念ぜざらん〉とは、謂く、何ぞ勤め力めて善をなし、その道の自然を念ぜざらんと。善をなして楽を得るは、道の自然なり。別の主ありてこれを然らしむるにはあらざるなり。これ因果の法爾道理を顕はす。外道の計るところの自然のごときにはあらず。彼は無因の自然の有を説くがゆゑに。また道の自然を念ずべしとは、謂く、彼の国の道の自然たるを念ずと。ゆゑに下の文に云ふ、〈彼の仏の国土は無為自然にして、みな衆善を積んで毛髪の悪もなし〉と。〈上下なく洞達して辺際なきことを着す〉とは、謂く、自然の道は、その理顕着にして、上下あることなく、これを得れば洞達して辺際あることなしと。よろしくおのおの勤めて精進し、努めて自らこれを求むべし。道を求むるは己にあり、進むるにはあらず。五善を持てば、すなはちよく必ず五悪を超え、五痛・五焼を絶ちて、安身養神の国に往生することを得。〈横に五趣を截り自然に閉づ〉とは、もし穢土に就かば、下三を悪となし、人を善となすも、今浄土に対すれば、五みな悪と名づく。ひとたび往を得れば、五道頓に去るがゆゑに横截なり。往生は斯れ去らず、悪を去りて生まるれば、悪自然に杜づるがゆゑに、〈悪自然に閉ぢ、道を昇ること窮極なし〉と言ふ。十念志を専らにすれば、必ず往生を得るがゆゑに、〈易往〉なり。百千人の中、それ一もなきゆゑに、〈無人〉なり。〈その国は逆違せず自然の牽

くところなり〉とは、その国逆違して人をして往かざらしむるにはあらず、ただ自然の業牽きて往くことを得ざるのみ。〈何不〉已下は、重ねて事を棄て、回向求道することを勧む。文のごとく知るべし」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻下に云う、「経の、〈何不力為善〉より〈寿楽無有極〉までは、以下に勧めて回向を修させることを説く。世親『浄土論』（『大正蔵』二六、二三二頁下）に云う、〈巧方便回向とは何か。それは、礼拝等の修行によって積んだすべての善根功徳をもって、自分の楽しみを求めず、一切衆生の苦しみを救うことを求めて、一切衆生と共に極楽に生まれることを願うことである。これを菩薩の巧方便回向成就と名づける。このように完全に回向が成就すれば、悟りを妨げる三つのことを捨てることができる。その三つのこととは、第一に、智恵によって自分の楽しみを求めない。自分の都合に固執する心を捨てるからである。第二に、慈悲の教えによって一切衆生の苦を除く。他人を不安に陥れるような心を捨てるからでる。第三に、方便の教えによって一切衆生をあわれむ。自分を尊ぶような心を捨てるからである。菩薩はこのように、悟りを妨げる三つのことを捨てて、悟りに向かう三つのことを成就してゆくことができる。三つのことは、第一に、染れなき清浄心。自分の楽しみを求めないからである。第二に、人を安らかにする清浄心。一切衆生の苦を除くからである。第三に、人に楽しみを与える清浄心。一切衆生に悟りを得させるからである。また衆生を救って極楽に往生させるからである〉と。本文中では、まず回向を勧めて、穢土を捨てて浄土に向かわせ、後に悟りに背く事項を提示して、正しい回向の修行をさせようとしている。文中に十八句あり、二句ずつの対句になっている。〈何ぞ力めて善をなし道の自然を念ぜざらん〉とは、なぜ努力して善を行い、悟りに向かう自然の道理に心を傾けようとしないのかという意味である。善を行って楽を得るのは自然の道理である。誰かがそうし向けるわけではない。これは因果の道理を明かすのである。外道の言う自然とは異なる。外道は無因つまり偶然の自然を実体的に説くからである。また悟りに向かう自然の道理に心を傾けよとは、極楽世界が持つ自然の道理に心を傾けよという意味である。だから次下の文に、〈彼の仏の国土は無為自然にして、みな衆善を積んで毛髪の悪もなし〉と言うのである。〈上下なく洞達して辺際なきことを着す〉とは、自然の道理は明らかであり、機根の区別なく、みな悟りを得ることができるという意味である。だから各自精進して、悟りを求めよと言うのである。悟りを求めるのは自分自身であり、だれかのすすめによるのではない。五善を行えば必ず五悪道を超え、五痛・五焼を絶って、極楽に往生することができるのである。〈横に五趣を截り自然に閉づ〉の〈五趣〉とは五道の意である。穢土では地獄・餓鬼・畜生を悪道とし、人を善道と言うけれども、浄土に対比すれば、五道のすべてが悪道である。ところが往生すれば、五道に趣く可能性が即座になくなるので、横に截ると言うのである。往生とはここから立ち去ることではなく、悪を捨てて生まれることである。悪趣への道が自然に閉鎖されるので、〈悪自然に閉ぢ、道を昇ること窮極なし〉と言うのである。十念の間ひたすら念ずれば、必ず往生できるので〈易往〉と言い、実際は百千人に一人も往生できないので〈無人〉と言う。〈その国は逆違せず自然の牽くところなり〉とは、浄土が道理に背いて人々の往生を妨げるのではなく、ただ罪業のために往生できないという意味である。〈何不〉以下は、重ねて世事を棄て回向求道することを勧めている。経文の通りに理解せよ」と。

【考察】

本項「44 往生難易」には、『無量寿経』巻下に見える「易往而無人」の教説に関連する要文が集められている。

『往生要集』では、大文第三「極楽証拠」の第二「対兜率」の項に、兜率・極楽の往生難易を比較する『群疑論』巻四（『大正蔵』四七、五四頁上～下）の文が引用され、その中に当該『無量寿経』の文が挙げられている。その記述を承けて、『安養集』が本項を設けたことが推察されるが、『往生要集』所引の『群疑論』では、兜率よりも極楽のほうが「易往」であることを主張する八つの根拠の一つとして当該『無量寿経』の文に言及されるのみであり、「無人」の語についての議論はなされていない。

それに対して『安養集』「往生難易」には、まず出拠の経文として（291）『無量寿経』の文を掲げ、次いでそれに対する二つの釈文を列挙する。（292）憬興『無量寿経連義述文賛』には、極楽は修行すれば必ず往生できる「易往」の世界であるのに、妄執のために修行を怠る者が多いから「無人」であると言い、（293）義寂『無量寿経述義記』には、十念専志すれば必ず往生できる「易往」の処であるのに、罪業のために往生できない者が多いから「無人」であると述べている。

本項でも『安養集』は、『往生要集』に扱われた経文について、源信とは異なった観点から議論を深めるための要文を挙げているのである。

45 三輩九品異同

（294）双観（ママ）経連義述文賛下に云う（憬興『無量寿経連義述文賛』巻下、『大正蔵』三七、一五八頁中～下）、「一説には、『無量寿経』の三輩はみな他受用土に生まれるので、変化土に生まれる『観無量寿経』の九品とは異なる。『無量寿経』下輩の、〈たとひ諸功徳をなすことあたはざれども〉という文言によって、下輩人が発す十念は、『弥勒問経』に

説く慈等の十念であると考えられるからであると言う。この説は間違いである。〈たとひ〉という言葉は、他の功徳がなくてもせめて菩提心だけは発せという意味である。また凡夫の念とは言えない十念であるならば、なぜ上・中輩には説かれず、ただ下輩にのみ説かれたのであろうか。よって『観無量寿経』九品と『無量寿経』三輩は異なることがない。『観無量寿経』の中上・中中二品が出家して、真仏を見、菩提心を発さず、中下品は出家せず、仏を見られず、菩提心を発さないのに対し、『無量寿経』の中輩は、出家せず、化仏を見、菩提心を発す者であるが、それは種々の機類の一端を説き示したために生じた相違にすぎない。〈まさに菩提心を発すべし〉と説くのは、浄土に生まれる者は必ず菩提心を発すということを言うのであり、定性二乗が往生できないことを言わんとするものではない。その他の相違もみなこれと同じである」（要約）と。

(295) 同経述義記中に云ふ（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「或は云ふ、三輩はすなはちこれ九品なり、此の三輩を開いて、九品と成すがゆゑにと。今両経に准ずるに、義すなはちしからず。ゆゑはいかんとなれば、文義に違ふがゆゑに。此の中の上輩（十下輩？）は、彼の上下各三品人を摂すとは、義しばらくしかるべし。此の中輩をもって、彼の中三を摂すとは、理定めてしからず。此経の中輩を説いて、菩提心を発し、彼国に生ずる時、すなはち不退転に住すといふ。彼経の中輩の三は、菩提心を発すと云はず、彼国に生ずる時、ただ小果を証するのみ。此にもってすでに発心し、彼に生じて小を証せん。いずくんぞ不退の大心に住して、また小果を証すと説くべきことを得んや。これ理なきがゆゑに。今存するところは、その義いかん。法中、まづ彼経の九品を叙し、しかるのちに此の三輩と相摂せん 乃至 此中の三輩は、正に九品の上輩三品を摂し、兼ねてまた彼の下輩三品を摂す。中輩三品は一向に摂せず。所修の行業、大小異なるがゆゑに。此経の上輩は、九品の中、初の二品の全と、第三品の一分とを摂す。謂く一恒に発心して、すでによく大乗経典を愛楽するがゆゑに、仏智等に疑惑を生ぜず。此経の中輩は、疑惑を生ずることあるがゆゑに。此経の中輩は、九品の第三品の一分を摂す。熙連に発心し、誹謗を生ぜずといへども、未だよく愛楽せず、仏智等に疑あるを容するがゆゑに。此経の下輩は、九品の中、下品の三生を摂す。しかるに此経の中には、ただ発心して悪を作らざる者を説く。彼経にはだた悪業を作る者を説く。互に一辺を挙ぐるも、理として互に根位分同じなるべきがゆゑに。また此経の中に、発心して不退なる者を説き、彼経の中に、曽て発して退転する者を説く。退・不退の異ありといへども、その位分同じなるがゆゑに、相摂なることを得るなり」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「一説には、『無量寿経』の三輩と『観無量寿経』の九品とは同じであると言う。三輩を開いて九品とするからであると言う。しかるに今、両経を見比べると、この説は間違いだと言える。経文の意と異なるからである。『無量寿経』の上輩と下輩とが、『観無量寿経』の上品と下品とに相当するとするという点は、一往妥当であるが、『無量寿経』中輩が『観無量寿経』中品に相当するという点は、道理に反する。『無量寿経』中輩には、菩提心を発し、極楽に生まれる時に、ただちに不退転に住すと説く。『観無量寿経』の中品三人は、菩提心を発すとは説かれない。極楽に生まれる時には、ただ小乗の果を得るだけである。此土ですでに菩提心を発した者が、極楽に生まれて小乗の果を得ることになろう。不退転の菩提心を発して、小乗の果を得ることなどありえない。それは道理に背くことであろう。そこで、私見を述べたい。まず『観無量寿経』九品について述べ、その後『無量寿経』三輩との関係を述べよう。…中略…『無量寿経』の三輩は、『観無量寿経』の上品三生を摂め、また下品三生を摂める。『無量寿経』中輩は、『観無量寿経』には相当するものがない。修める行に、大乗と小乗の違いがあるからである。『無量寿経』の上輩は、『観無量寿経』の上品上生・中生と、下品の一部を摂める。一恒河沙仏のもとで発心し、すでに大乗経典を受容し、よって仏智を疑うことがないからである。『無量寿経』の中輩は、疑惑を生ずることもあるからである。『無量寿経』の中輩は、『観無量寿経』下品の一部を摂める。熙連河沙仏のもとで発心し、仏法を誹謗することはないけれども、十分には受容できず、仏智等を疑うこともあるからである。『無量寿経』の下輩は、『観無量寿経』の下品三生を摂める。ただし『無量寿経』には、発心して悪を作らない者が説かれ、『観無量寿経』には、悪業を作る者だけが説かれる。しかし各々一端を挙げたと見るべきであり、道理として同等の機根の者が挙げられていると考えてよかろう。また『無量寿経』には発心して不退転を得た者を説き、『観無量寿経』には過去に発心しながら退転した者を説く。退と不退の相違があるけれども、その機根は同等なので、相当すると言えるのである」と。

(296) 同経義疏法位下に云ふ（法位『無量寿経義疏』巻下、古逸）、「〈仏号阿難十方世界〉の下は、第二に、十方の三輩往生の相を明かす。乃至 もし観経上輩生に依らば、それ三品あり。謂はく上中下なり。その行相は各各同じからず 乃至 此の中、三品を一品となすも、その行相を論ずれば、大相大同なり。乃至 もし観経に依らば、中品を分かちて三品となす 乃至 観経下輩の中を安（＝案？）ずるに、三品を分かつ。謂はく上中下なり云々」と。

【現代語訳】法位『無量寿経義疏』巻下に云う、「〈仏号阿難十方世界〉の下は、第二に、十方世界の三輩往生人の相を明かす。…中略…『観無量寿経』の上輩生には上・中・下の三品があり、その修行の状況はそれぞれ異なる。…中略…『無量寿経』は三品を一品に摂めるが、修行の状況はほぼ同じである。…中略…『観無量寿経』では、中品を三品に分ける。…中略…『観無量寿経』の下輩生は、上中下の三品に分けられる云々」と。

(297) 観経記興下に云ふ（龍興『観経記』巻下、古逸）、「もし両巻に依らば、略惣して三となす」と。

【現代語訳】龍興『観経記』巻下に云う、「『無量寿経』では、省略総括して三輩とする」と。

【考察】

本項「45 三輩九品異同」には、『無量寿経』三輩と『観無量寿経』九品の相摂関係について論じた要文が集められている。

この問題は、『往生要集』では大文第九「往生諸行」に扱われる。その第一「別明諸経文」の項には、念仏以外の往生行を説く経文が列挙されている。源信はその中に、『観無量寿経』九品往生段の文を略抄し、続いて『無量寿経』に言及して、「『双巻経』の三輩の業もまたこれを出でず」と述べている。

ただしこの問題は、すでに良源『九品往生義』（『仏全』二四、二二五頁下～二二六頁上）に、大きく取り上げられている。良源は『九品往生義』の末尾近く、下品下生段の註釈を終えた後に、『無量寿経』三輩段の文を引用し、次いで三輩・九品の相摂関係は如何かと問いを発し、答えて、まず義寂『無量寿経述義記』の説を挙げてその見解を否定し、次いで憬興『無量寿経連義述文賛』の説を掲げてそれを承認している。その義寂の文は、『安養集』が本項に挙げた（295）にほぼ一致し、憬興の文は（294）の略抄である。良源は、三輩と九品とは異なるとする義寂の説を否定し、三輩・九品はともに全ての往生人を摂めるとする憬興の説を承認するのである。源信もそれと同じ立場であったと言えよう。

『安養集』は、それらの論述を継承してここに「三輩九品異同」という論題を設け、良源が挙げた義寂・憬興の説に加えて、憬興の説に近い（296）法位『無量寿経義疏』と、（297）龍興『観経記』の文とを挙げて、この問題の議論に備えているのである。

46 九品往生階級

(298) 無量寿論釈第三に云ふ（智光『無量寿経論釈』巻三、古逸）、「然るに九品生は、この教の宗なり。直に須く委しく釈すべし。先づ異計を叙べ、後に正義を示さん。異計を叙ぶとは、また三あり。一に云ふ、上品の中に就いて、上生人は謂く三・四地の菩薩、転じて七地無生を得。中生人は謂く三十心の菩薩、転じて初地無生を得。下生人は謂く十信位の菩薩、転じて初地無生を得。中品に就いて、上生人は初果以上、中生人は煖頂二位、下生人は念処以下。下品の中に就いて、ただそれ罪の軽重をもって自ずから分別して三人となす。罪の薄少なる者は上生等を得、中下はこれに准ず。前三果の人、回心向大するがゆゑに彼に生ずるを得、四住の惑を断じをはるも、しかもなほ前三果の次第をもって名をなすがゆゑに、阿羅漢を得と言ふ。彼土に生じをはって、さらに二乗の聖果を取ると謂ふにあらず。また羅漢を得をはって彼土に生ずるにはあらず。彼土の如来は小乗を説かず。最（十後？）音声に四諦法を讃ふるを聞き、宿習によるがゆゑに、失念により、解の劣なるによるがゆゑに、小果を得と謂ふも、必ず大心を発し、不退転を得。上生すでにしかり。中下もまた同じ。二に云ふ、上品の三人は謂く三十心および十信中の第七心以上の菩薩なり。中品の三人は謂く十信の第六心より以下乃至初心なり。下品の三人は謂く十信前の具縛の凡夫なり。乃至三に云ふ、上品の中に就いて、上生人は、三種の心を発してすなはち往生を得。馬鳴の説に依るに、この三心は十解の初心にあり。彼に直心と言ふは、すなはち今の至誠心これなり。深心はこれと同じ。彼に大悲心と言ふは、すなはち今の回向発願心これなり。その三心のごときは、すでに十信の終にあって発す。まさに知るべし、上生はすなはち十解の初心にあり。彼に至りて無生忍を得るは、これはこれ観を縁じて無生忍を得。法忍におよそ四種あり。一には教を縁じて無生忍を得。謂く凡夫および十信位にして、大乗経論を受持・読誦して無生の解を作す。すなはちこれ聞恵なり。二には観を縁じて無生忍を得。謂く十解以上乃至十回向にして、三無性観を作し、万法の無生を解す。すなはちこれ思恵なり。三には理を証して無生忍を得。謂く初地以上にして、遍満法界・二空真如を証するによる。すなはちこれ修恵なり。四には位に就いて無生忍を得。謂く八地以上にして、真俗双行・無功用智を得るによる。またこれ修恵なり。中生人は謂く十信の初心にあり。深く因果を信じ、大乗を謗らざるがゆゑに。もし未だ十信に至らざれば、邪定聚の中にあり。信決定せざるがゆゑに。或は大乗を謗るがゆゑに。彼土の中に生じて一小劫を経て無生忍を得るとは、これはこれ理を証して無生忍を得。彼の日月、長きによるがゆゑに。極楽世界の一日一夜は、娑婆国の一劫なりと説くがごとし。下生人は謂く總じてこれ十信前の一切の善に趣く凡夫なり。ただよく三宝に帰依して菩薩戒を受けをはるがゆゑに、また因果を信じ、大乗を謗らず、ただ無上道心を発すと言ふ。謂く十信の初の菩提心を発し、不定位に入る。生じて彼土に到り、三小劫を経て初地に至るを得るとは、謂く彼処の劫を数ふ。此間の劫を数へず。中品の中に就いて、上生人は謂く小乗人の四善根位なり。五戒を受持し乃至諸の過悪なしと言ふがごとし。この人、四善根を得、および未だ定に至らざるも、欲界の惑を伏するがゆゑに、破戒の煩悩および悪業を起こさず。生じて彼土に到り、すなはち羅漢を得るは、一身に四沙門果を獲得す。中生人は謂く五停心観以上、三方便の中にあり。一日一夜、八戒斎を持ち、乃至威儀に缺なしと言ふがごとし。この人、散心の位にあり、未だ定を得ざるがゆゑに、長時に持戒することあたはず、缺な

きこと極小にして、すべからく一日一夜を経るべくんば、後の時にたとひ犯するも、また往生を得。彼土に到り、半劫を経て羅漢を得。これまた一身に四道の果を得。彼の寿命長きにゆるがゆゑに。下生人は謂く七方便前の五戒を受くる以去の一切の善に趣く凡夫なり。父母に孝養し、世の仁慈を行すべし。下品の中に就いて、上生人は謂く十信の第七心以上なり。すでに十小劫を経て初地に入るを得と言ふ。彼の国中の劫数長きによるがゆゑに。中生人は謂く十信の六心より以下、第二心に至る。下生人は謂く十信の初心および前の凡夫これなり。正義を示すに就いて、階位差別を明かさば、上は回向を願ひ、下は罪人を總ず。上品上生は謂く十回向なり。生じをはりてすなはち無生忍を悟るは、すなはち謂く初地の始めにして、遍満法界を証す。真如は遍満して、法として通ぜざるはなきがゆゑに、遍満と言ふ。この遍満は、本より自ら生ぜず、今また滅することなきがゆゑに無生と言ふ。如実の義は、また遅疾あり。今は勝者に就くがゆゑに即悟と言ふ。問ふて曰く、前の所説のごときは、四地の菩薩、これ上上人にして、無生法忍は七地にありと。今すはなち何のゆゑに、これ回向と言ふや。答へて曰く、上品下人は、三小劫にして百法明門を得るがゆゑに、上品上生は理としてこれ回向なり。無生法忍は正しく初地にあり。もし無生をして七地にあらしむれば、何ぞ上品中人、一劫をもって七地に至り、上品下人、三劫をもって初地に登らん。すなはち知んぬ、中人の一劫、上人の即悟は、みなこれ初地所見の遍満法界なり。問ふて曰く、仏、阿難に告ぐ、彼の国土に生ずる、その鈍根の者は、二忍を成就す。謂く信と順となり。その利根の者は、不可計の無生法忍を得と。ゆゑに知んぬ、理として七地にあり。今何ぞ初地にありと言ふや。答へて曰く、もし彼の文を将ひ、来たりてこの事を難ずれば、たとひ七地といへどもまた難あり。詳しくは彼の経に言ふがごとし。行は弥勒のごとき諸大菩薩、彼国に往生すと。もししからば、行、弥勒のごとくならば、すなはちこれ一生補処なり。かくのごとくんば、何ぞ彼国に生ずるを得をはりて、はじめて無生を悟るや。また解す、十回向の中、第四の至一切処回向は、義に云ふ、大願力をもって神通自在にして、遍く他土に到り、諸仏を供養すと。この中の上品上生は、彼に生ずる利益として、よく諸仏に歴事して次第に授記せらることを論ず。もし四地ならしめんとすれば、幾ばくか久しくして得ん。あに彼に生ずるの利となすことを得べけんや。上品中生は謂く十解十行なり。一小劫をもって無生忍を悟るは、謂く十行終はりて初地に入るなり。如実の義は、また二の劫あり。今は最軽に就くがゆゑに一劫と言ふ。これは西方の劫なり。彼の一小劫は、この国土の一僧祇劫に当たる。上品下生は謂く十信の菩薩なり。三小劫は、地前の三劫にして、初地に至る。地前の三僧祇とは謂く信行・精進行・趣向行の建立に就いて、一には不定僧祇にして、黒白あひ雑するをもって、凡夫と異ならざるがゆゑに。二には定僧祇にして、すでに無漏法を得るがゆゑに、定なるもなほあひ雑するがゆゑに、未だ授記せらるべからず。三には授記僧祇にして、ただ無漏なるがゆゑに、定にして余法を雑せざるがゆゑに、授記せらるべし。問ふて曰く、前の所説のごときは、十信の菩薩は下品にありと。何ぞ上品と言ふや。答へて曰く、経の中に言ふがごとし。深く諸仏および正法を信じ、また菩薩所行の道を信ずと。これは有信を明かす。もし信じて一切仏を恭敬すれば、すはなち浄戒を持ち正教に順ずと。これは有戒を明かす。もしよく方便を具足すれば、すなはちよく無上道に安住すと。これは有恵を明かす。仏法の滅せんとするによく護持し、これによって勝光明の成ずるを得と。これは護法を明かす。乃至広説す。善趣の徳行はすでにそれかくのごとし。何ぞこれを抑へて判じて下品となすことを得ん。下品の三人は本善あることなく、ただ現縁によって、彼に生ず。ゆゑに知んぬ、十信はこれ下品にあらず。中品上生は謂く前三果なり。経のごときには聖果の言なしといへども、彼に生じて羅漢を得るがゆゑに。中品中生は謂く七方便人なり。彼に生じをはって、はじめて初果を得るをもってのゆゑに。中品下生は謂く凡夫中の世間の善あるものなり。問ふて曰く、中品三人は、いくばくの劫量にして初地に至るを得るや。答へて曰く、文には言はずといへども、或は四五六乃至七八九劫にして、初地に至るを得。下品生人、十小劫を経て初地を得るをもってのゆゑに。例に准じてまさに知るべし。しかるに人、迷謬して、小乗三果および七方便人をもって十信の上にありとす。如実の義は、十信の下にあり。二乗の聖人は、八万劫等にして発心の処に到る。この義によるがゆゑに、漸悟の菩薩はまづ直ちには往かず。また十信の人は三小劫をもって初地に至るを得。三果の聖人および七方便はかくのごとくなることを得ず。ゆゑに知んぬ、漸悟の菩薩は、十信の上なることを得ず。十信より前の凡夫人の中、純ら諸過あり、善法なき中、過の軽重に随って、分かちて下品三生の人となす。かくのごとき等の人、本善なしといへども、善友によって、命終に発心す。これを因として、無量寿仏の本願を縁となし、また安楽浄土に往生することを得」と。

【現代語訳】智光『無量寿経論釈』巻三に云う、「しかし九品往生の教説は浄土教の宗要である。詳細に解釈しなければならない。はじめに異説を述べ、後に正しい見解を示そう。

異説として三つの見解がある。第一に、上品上生人は三・四地の菩薩で、往生して七地無生を悟る。中生人は地前三十心の菩薩で、往生して初地の無生を悟る。下生人は十信位の菩薩で、往生して初地の無生を悟る。中品上生人は初果以上、中生人は煖・頂二位、下生人は念処以下である。下品人は、罪の軽重によって三人に分かれる。罪の少ない者が上生で、中下は次第に罪が重くなる。小乗の前三果（預流果・一来果・不還果）の人は、心を翻して大乗に趣くことによって極楽に生まれることができ、四住地の惑を断じてしまうのであるが、昔の小乗の行位の名目を用いて、阿羅漢の悟りを得ると説かれるのである。

極楽に生まれてから小乗の聖果を得るわけではなく、また阿羅漢の悟りを得てから極楽に生まれるわけでもない。極楽の如来は小乗を説かれない。小乗の修行をしていた頃、最後に聞いた四諦の教えを讃える説法が耳に残り、あるいは聞いたことを忘れてしまったり、理解力が及ばなかったりして、小乗の悟りを得ると言われるけれども、やがて必ず大乗の心を発して、不退転の菩薩となるのである。中品上生人は、そのような人である。中生・下生も同様である、と言う。

第二の異説には、上品の三人は地前三十心と十信の第七心以上の菩薩、中品の三人は十信の第六心以下初心まで、下品の三人は十信以前の具縛の凡夫であると言う。…中略…

第三の異説は次の通りである。上品上生人は、三種の心（至誠心・深心・回向発願心）を発して即座に往生する。馬鳴の『起信論』によると、この三種心は十住の初心で発すものである。『起信論』の直心は『観無量寿経』の至誠心に当たる。深心は共通である。『起信論』の大悲心は『観無量寿経』の回向発願心である。三心は十信の終わりに発す。よって、上品上生は十住の初心に当たる。極楽に生まれて無生忍を得ると言うが、これは観によって得る無生忍である。法忍に四種ある。第一は教によって得る無生忍で、十信以前および十信位において、大乗経論を受持・読誦して無自性・空を理解することを言う。これは三恵の中の聞恵である。第二には観によって得る無生忍で、十住から十回向位において、三無性観を修して、あらゆるものが無自性・空であることを理解することを言う。これは思恵である。第三には真理を悟って得る無生忍で、初地以上の菩薩が、遍満法界・二空真如を悟ることによって得る。これは修恵である。第四は行位に就いて得る無生忍で、八地以上の菩薩が、真俗双行・無功用智を悟ることによって得る。これも修恵である。上品中生人は、十信の初心に当たる。深く因果の道理を信じて、大乗を謗らないからである。十信に入る以前の者は、邪定聚すなわち外道である。信心が定まらず、大乗仏教を謗るような者だからである。極楽に生まれて一小劫を経て無生忍を得ると言うのは、これは真理を悟って得る無生忍である。極楽における時間は、極めて大きな数字で表される。極楽の一昼夜は娑婆の一劫に当たると説かれるようなことである。上品下生人は、十信に入る以前の善を目指す凡夫である。ただ三宝に帰依して菩薩戒を受け、また因果を信じて大乗を謗らず、ただ無上の菩提心を発すと説かれる。この菩提心は、十信の初位で発し、それによって不定聚の位に入るというものである。極楽に生まれて、三小劫を経て初地に至ると説かれるが、これは極楽での劫数で示されている。娑婆の劫数ではない。中品上生人は、小乗人の四善根位に当たる。五戒を受持して悪事を作らないと説かれる。この人は、四善根（煖・頂・忍・世第一法）を修めて、未だ聖位に至らない段階であるが、欲界の惑を伏しているので、破戒の煩悩や悪業は起こさない。極楽に生まれて即座に阿羅漢果を得ると説かれるが、これは四沙門果（預流・一来・不還・阿羅漢の四果）をすべて獲得することを言う。中品中生人は五停心観（不浄観・慈悲観・因縁観・界分別観・数息観）を修めた三賢位の行者である。一昼夜八戒斎を守って威儀を正しく保っていると説かれる。この人は散心の位にあり、未だ定心を得ていないので、長時間持戒することができない。威儀を保つことも最少時間である。それでも一昼夜持戒すれば、後に違犯しても、往生することができる。極楽に生まれて半劫を経て阿羅漢果を得る。これもまた四沙門果をすべて獲得することを言う。極楽の寿命は長久だからである。中品下生人は、七方便位（三賢＝五停心観・別相念住・総相念住、四善根＝煖・頂・忍・世第一法）以前の五戒を受けた後の善を目指す凡夫に当たる。父母に孝養し、世間の仁慈を行うと説かれる。未だ出家することなく、修行することもなく、世間の仁慈を行うのみである。下品上生人は、十信の第七心以上の菩薩である。十小劫を経て初地に入ると説かれる。極楽の劫数は長久の数字で表されるからである。下品中生人は、十信の第六心以下第二心までに当たる。下品下生人は、十信の初心およびそれ以前の凡夫に当たる、と言われる。

それでは次に、九品往生人の階位差別について、正しい見解を示そう。上位は十回向位から、下位は罪人までを包括する。上品上生人は、十回向に当たる。往生して即座に得る無生忍は、初地の始めにおいて遍満法界を悟ることを言う。真如はあらゆるものに偏在するので遍満と言うのである。この遍満は、生ずることも滅することもないので、無生と言う。正義を示すならば、これにまた遅速がある。今は勝れた者について即悟と言うのである。

問う。異説の第一によると、四地の菩薩が上品上生人であり、往生の後に七地無生法忍を得ると言う。今、十回向位と言うのはなぜか。答え。上品下生人は、三小劫を経て百法明門すなわち初地に至ると説かれるのであるから、上品上生人は道理として十回向位である。その無生法忍は初地の位である。もしその無生法忍が七地であるとするならば、上品中生人が一劫を経て七地に至り、上品下生人が三劫を経て初地に至るということになってしまうが、それはあり得ない。よって、上品中生人が一劫を経て至る、また上品上生人が往生の後に即座に悟るのは、どちらも初地で得られる遍満法界の境地であることは明白である。

問う。仏が阿難に告げられた所によると、極楽往生人の中、鈍根の者は、二忍すなわち信忍と順忍とを成就し、また利根の者は、計り知れないほど高度な無生法忍を悟るということである。よってその無生法忍は道理として七地の無生忍であることは明白である。なぜ初地だと言うのか。答え。もしその『無量寿経』の文を挙げて論難するというのならば、七地でもまだ理解しがたい点がある。詳細は経文に説かれる通りであるが、弥勒と同等の修行をする大菩薩が極楽に往生すると説かれている。弥勒と同等であるとするならば、そ

れは等覚すなわち一生補処の菩薩である。だとすれば極楽に生まれてはじめて無生を悟るということはなかろう。さらに解釈するならば、十回向の第四、至一切処回向とは、経の義によれば、大願力によって神通自在にあらゆる他方仏国に到り、諸仏を供養する位である。『観無量寿経』の上品上生人は、極楽に生まれた利益として、諸仏に奉仕してやがて成仏の印可を受けると説かれる。四地の境地を得るまでには、どれほどの時間がかかることだろうか。とても往生の利益とは言えないだろう。

上品中生人は、十解（十住）・十行の菩薩である。一小劫を経て無生忍を得るとは、十行が終わり初地に入るということである。正義を示すならば、その劫にはまた二種ある。今は最短を説いて一劫と言うが、これは極楽の一劫である。極楽の一小劫は娑婆の一僧祇劫に当たる。

上品下生人は、十信の菩薩である。三小劫とは、地前の三劫を経て初地に至ることを言う。地前の三僧祇とは、信行・精進行・趣向行の建立の過程を言う。第一は不定僧祇と言う。善悪が入りまじっていて凡夫と変わらないからである。第二は定僧祇と言う。無漏の法を得ているから定と言うが、なお有漏の法がまじわっているので、未だ成仏の印可は得られない。第三は授記僧祇と言う。もっぱら無漏法を得て、有漏法が全くまじわらないので、成仏の印可を得ることができるのである。

問う。前の異説によると、十信の菩薩は下品であると言われていた。今なぜ上品だと言うのか。答え。『観無量寿経』上品下生段に、深く諸仏および正法を信じ、また菩薩の行ずる道を信じると言う。これは信を得ていることを示している。また、信をもって一切仏を恭敬すれば、浄戒を保ち正教に順ずることになる。これは戒を得ていることを示している。また、方便を成就すれば、無上の悟りに安住することになる。これは智慧を得ていることを示している。また、仏法が滅びようとする時にこれを護持し、それによって勝れた光明を得ることになる。これは護法を示している。以下詳説される。善に趣く徳行はこれほどの功徳がある。どうして下品と判ずることができよう。下品の三人はもとより善なく、たまたま善師の縁を得たことによって極楽に生まれる者を言うのである。よって十信は下品ではないということは明白である。

中品上生人は、前三果すなわち預流・一来・不還の聖果を得た行者である。『観無量寿経』には聖果について明記されていないが、極楽に生れて阿羅漢果を得ると説かれていることによってわかる。

中品中生人は七方便人の行者である。極楽に生まれてはじめて預流果を得るからである。中品下生人は凡夫の中の世間の善を行う者である。

問う。中品三人は、どれほどの劫を経て初地に至るのか。答え。経文には見えないが、四五六から七八九劫を経て初地に至る。下品生人が十小劫を経て初地を得ると説かれるからである。それに准じて知られよう。ところが真理に迷う者は、小乗の前三果や七方便の人は、十信よりも上位であると言う。正義を示すならば、それは十信の下位に当たる。小乗の聖者は、八万劫等を経て菩提心を発すと言われるからである。彼ら漸悟の菩薩は、まずもって即座に往生するすることはできない。十信の菩薩は、三小劫を経て初地に至ることができるが、三果の聖者や七方便の行者はそのようなわけにはいかない。よって漸悟の菩薩が十信の菩薩よりも上位であるなどということはあり得ない。

十信に入る以前の凡夫人の中、ただ罪ばかりを作って善を行うことがない者を、罪の軽重によって三つに分けて、下品三生人とする。彼らは本より善のない者であるが、善師のおかげで命終の時に菩提心を発し、それによって無量寿仏の本願を縁として、安楽浄土に往生することができるのである」と。

(299) 群疑論六に云う（『大正蔵』四七、六七頁中～下）、「問う。九品往生人の地位は、何によって分けられているのか。答え。九品人を大まかに分ける見解として二説、詳細に分ける見解は多数ある。大まかに分ける二説の第一は、九品人はみな十信の菩薩で、善悪によって九品に分かれるという見解である。上品人は十信を退くことはない。中品人は大乗から退いて小乗の修行をする。下品人は大乗を退いて罪を造ると言う。第二説には、大菩提心を発して菩薩の修行をする者が上品、小菩提心を発して声聞の修行をする者が中品、大乗・小乗の修行をせず、生死の罪を造る者が下品であると言う。

詳細に分ける見解としては、まず上品人の行位について多くの説がある。第一に、上品上生は四・五・六地の菩薩、上品中生は初・二・三地、上品下生は地前三十心（十住・十行・十回向）の菩薩であると言う。第二に、上品上生は十回向、上品中生は十行、上品下生は十住であると言う。第三に、上品上生は地前三十心、上品中生は十住の末心、上品下生は十信の初心であると言う。第四に、上品上生は十行・十回向、上品中生は十住、上品下生は十信であると言う。第五に、上品上生は十住の初心、上品中生は十信の後位、上品下生は十信の初位であると言う。第六に、上品上生は十信およびそれ以前に三心を発して三行を修める者、上品中生・下生は十信以前に菩提心を発して善を修める凡夫であると言う。これら諸説の相違は、経説の無生法忍の行位に上下の差異があることによって生じたものである。『仁王般若経』には無生法忍は七・八・九地であると説かれ、また初地であるとか忍位（四善根の第三位）であるなどと説く論もある。『菩薩瓔珞本業経』には十住であると説き、『華厳経』には十信、『占察経』では十信以前の凡夫位であると言う。

次に中品人の行位について、第一に、中品上生は前三果、中品中生は七方便（三賢＝五停心観・別相念住・総相念住、四善根＝煖・頂・忍・世第一法）、中品下生は解脱分（三賢

位）の善根を植えた人であると言う。第二に、中品上生は忍位、中品中生は頂位、中品下生は煖位であるという。第三に、中品上生は煖・頂・忍位、中品中生は前三の解脱分の善根の人、中品下生は過去に解脱分の善根を植えた人であると言う。持戒の浅深、あるいは世善のみの人について三分されるのである。

下品人は、罪の軽重によって三分される。行位を論ずることはない。

無生法忍には六つの地位がある。第一に聞恵で、これは十信の前に位置する。第二は勝解を生ずる、十信の後である。第三は思恵で、十住の後である。第四は修恵で、煖の後に位置する。第五は証得で、初地である。第六は相続で、八地に位置する。これらは因位における差別であり、仏果を得ればすべてを成就する」（要約）と。

【考察】

本項「46 九品往生階級」には、往生人の行位を論ずるための要文が集められている。次項「47 三輩九品階位」と同一の議論であり、なぜ二項に分けられたのか判然としない。『安養集』には、そのような事例が複数ある。その因由については、「5兜率極楽相対」の項に私見を述べた。本項の引文の意義については、次項にまとめて論じたい。

47 三輩九品階位

（300）浄土論上加才に云う（迦才『浄土論』巻上、『大正蔵』四七、八七頁上～下）、「問う。『観無量寿経』によると、上品上生人は極楽に往生して即座に無生法忍を悟る。その行位は八地であると言われる。よって下品（品―？）生人は十住以上であり、十住以前でも聖教の教えには違わないと言う。それでは行位があまりに懸け離れていることになるが、いかがか。答え。そうではない。無生法忍には四種ある。第一は、教を縁として得る無生法忍で、これは凡夫あるいは十信の菩薩が大乗経論を読んで理解することによって生ずる。これは三恵の中の聞恵に当たる。第二は、観を縁として得る無生法忍で、十住以上十回向までの菩薩が三無性観によって万法の無生を理解することによって生ずる。これは思恵に当たる。第三は真理を悟って得る無生法忍で、初地以上の菩薩が遍満法界・二空真如を証して生ずる。これは修恵に当たる。第四は行位を極めて得る無生法忍で、八地以上の菩薩が真俗双行を成就して生ずる。これは無功用智であり、修恵に当たる。一つに執着してはならない。浄影寺慧遠は、上品上生を四地から八地に至ると判ずる。しかし『摂大乗論』によると、四地の菩薩は変易生死の境地を得ているということである。極楽は分段生死の世界なので道理に合わない。『観音授記経』には、阿弥陀仏は寿命長久であるが、般涅槃すると説かれる。よって往生人にも死があることになろう。『観無量寿経』九品往生人の行位に関して、慧遠等の判定は高すぎる。それは往生の果から見て行位を判じたためである。因に着眼して、行位を見れば、もう少し低く判定できよう。

上品上生人は、至誠心・深心・回向発願心の三種心を発して即座に往生する。この三心は『起信論』によれば、十住の初心で発すものである。『起信論』に、信成就発心を説いて、十信の終わりに三種心を発して十住に入ると言う。三心の第一は直心すなわち真如を念ずる心である。これは『観無量寿経』の至誠心と同じである。『維摩経』の直心も同じである。これらは万行の始めに発す心である。往生して即座に八地に到るなどということはあり得ない。『起信論』三心の第二は深心であり、『観無量寿経』と同じである。第三は大悲心で、これは『観無量寿経』の回向発願心と同じである。『起信論』の三心は十信の終わりに発するのであるから、『観無量寿経』上品上生人は十住の初心に当たり、したがって往生して得る無生法忍は、観を縁として得る無生法忍である。慧遠の説によると、四地の菩薩が往生して即座に八地に至るということになるが、四地から八地までは半阿僧祇劫を要するので、道理に合わない。

上品中生人は、十信の初心に当たる。『観無量寿経』に、深く因果を信じ、大乗を謗らずと説かれるからである。十信に至るまでは邪定聚であり、因果を信ずることができず、大乗を謗ることもある。往生の後一小劫を経て無生法忍を得ると説かれるが、それは真理を縁として得る初地の無生法忍である。極楽の一日は娑婆の一劫に当たると言われるように、極楽では時間が速く過ぎるからである。慧遠の説によると、上品中生人は初地に当たるということだが、初地から八地は一大阿僧祇劫を要するので、道理に合わない。

上品下生人は、十信に至る以前の善に趣く凡夫である。不定聚の者が、極楽に生まれて三小劫を経て初地に至るのである。これは極楽での劫量である。慧遠の説によると、上品下生人は十住に当たるということだが、十住から初地は一阿僧祇劫を要するので道理に合わない。以上、上品三生人はみな大乗人である。

中輩の多くは小乗人である。中品上生は小乗の七方便の中、後の四方便すなわち煖・頂・忍・世第一法に当たる。『観無量寿経』に、五戒を受けて悪をつくらないと説かれるからである。この人は欲界の惑を伏して破戒・煩悩・悪業を起こさず、（……ここで文章が断絶している。下輩人までの文を掲げるべきところ、何らかの理由で欠落したものと思われる。以下小字で簡単に補っておきたい。……筆者註）往生して阿羅漢となる者である。中品中生は、五停心観等の七方便の中の前の三方便に当たる。煩悩のために長時の持戒ができず、一昼夜だけ威儀を全うし、後に小戒を犯すけれども、往生を得て、半劫を経て阿羅漢となる者である。中品下生は、五停心観以前の五戒を受けた善に趣く凡夫である。世間の善を修めるだけのものである。下輩の三人は、悪を起こす凡夫である。臨終に善師に遇うことができれば往生できる

が、遇えなければ地獄に堕ちる」（要約）と。

（301）観経玄義に云う善道（ママ）、（善導『観経疏』巻一、『大正蔵』三七、二四七頁下～二四九頁中）、「第一に、諸師の見解を挙げる。上品上生は四・五・六地の菩薩であり、往生してすぐに七地無生忍を得る。上品中生は初・二・三地に菩薩であり、往生して一小劫を経て無生忍を得る。上品下生は種性以上初地未満（十住・十行・十回向）の菩薩で、往生して三小劫を経て初地に至る。これらはみな大乗の聖者である。中品上生は小乗の前三果（須陀洹果＝預流果・斯陀含果＝一来果・阿那含果＝不還果）で、往生してすぐに阿羅漢を得る。中品中生は内凡の位で、往生して須陀洹を得る。中品下生は世間の善を修める凡夫で、苦を厭い往生を願い、往生して一小劫を経て阿羅漢を得る。これらは小乗の聖者である。下品の三人は、はじめて大乗を学ぶ凡夫で、罪の軽重によって三つに分けると言う。以上のような見解は誤りである。

第二に、正しい見地から諸師の説を論破する。十地の菩薩については『華厳経』に説かれている。それによると、初地から七地の菩薩は、法性生身・変易生死の境地を得ているので、分段生死の苦を離れている。すでに二大阿僧祇劫の修行を終え、自利利他の行を修めて空の悟りを得ている。神通力を得て報土に身を置き、報身仏の説法を聞いて、十方世界を教化するほどの菩薩である。すでに何の憂いもない菩薩のために、韋提希が仏に請うて往生極楽の教えを求めるはずがなかろう。よって上品上生・上品中生の行位に関する諸師の見解は誤りである。

上品下生は十住・十行・十回向であるとする見解も誤りである。経には、この位の菩薩は、生死の世界にいても生死のために汚されることがないと言われる。『大品般若経』（巻二十七、『大正蔵』八、四一八頁中）には、〈この位の菩薩は、諸仏・諸菩薩に守護されているので、不退の菩薩と呼ばれる。八相成道して衆生を教化することもできる。すでに一大阿僧祇劫をかけて智慧・慈悲の修行をしてきた菩薩である〉と説かれる。すでに何の憂いもない菩薩である。韋提希の請いによって往生を求める必要などなかろう。以上上輩について論じ終わった。

中品上生は、諸師によると前三果の人とされるが、これらの人は三途・四悪趣の縁を断ち切っている。そのような人が往生を求める必要はなかろう。仏の大悲は苦に沈む者に向けられている。溺れる者は救わねばならないが、岸上の者は救う必要がない。よって上輩と同じく諸師の見解は誤りである。中品中生以下も同様である。

第三に、重ねて九品の教説を挙げて諸師の説を論破する。諸師は、上品上生人を四地から七地の菩薩であると言うが、それではなぜ『観無量寿経』に、〈第一に戒を守り慈悲を修める者、第二に大乗の経典を読む者、第三に仏法僧の三宝を念ずる者が、一日乃至七日の間精進して往生を願えば、命終の時、阿弥陀仏が聖衆と共に光明を放ち、手を差し伸べて、即座に往生を得る〉と説かれるのか。経文によるならば、この人は、大乗を修める極善の凡夫である。地上聖者ではない。

上品中生について、諸師は初地から四地の菩薩であると言うが、それではなぜ『観無量寿経』に、〈必ずしも大乗を受持しない〉と説かれるのか。また、〈深く因果を信じて大乗を謗らず、往生を願う者は、命終に阿弥陀仏が聖衆と共に手を差し伸べ、即座に往生を得る〉という教説によるならば、この人は、釈尊滅後の大乗心を発す衆生で、その行業が上品上人よりも少し弱い者だと言える。

上品下生について、諸師は十住・十行・十回向の菩薩であると言うが、それではなぜ『観無量寿経』に、〈また因果を信ずる〉と説かれるのか。〈また〉と言うのは、信じたり信じなかったりということである。また、〈大乗を謗らず、ただ無上菩提心を発すだけで他の善はないが、その一行によって往生を願い、命終に阿弥陀仏が聖衆と共に手を差し伸べ、即座に往生を得る〉という教説によると、この人は、釈尊滅後の大乗心を発す衆生で、行業の弱い者である。

上輩の三人は往生の様相が異なる。上品上生人が往生する時には、仏が無数の化仏と共に手を差し伸べ、上品中生人には、仏が千の化仏と共に手を差し伸べ、上品下生人には、仏が五百の化仏と共に手を差し伸べる。これは行業に強弱があるからである。

中輩の三人について、諸師は、中品上生は小乗の前三果人であると言うが、それではなぜ『観無量寿経』に、〈五戒・八戒等の戒を守り、五逆等の罪を造らない者には、命終に阿弥陀仏が諸比丘と共に現れるのを見て往生を得る〉と説かれるのか。この文によるならば、この人は、釈尊滅後の小乗の戒を守る凡夫である。小乗の聖者ではない。

中品中生について、諸師は、見道以前の内凡（四善根位）であると言うが、それでなぜ『観無量寿経』に、〈一日一夜の間戒を守って往生を願う者が、命終の時に仏を見て往生を得る〉と説かれるのか。この文によるならば、この人は、釈尊滅後の善根のない凡夫であり、寿命があったために一昼夜だけ小乗の縁に遇って戒を授かり、それによって往生を願い、仏願力によって往生を得たのである。小乗の聖者も往生できるけれども、この『観無量寿経』は、仏が凡夫のために説かれた経であり、聖者のために説かれたものではない。

中品下生について、諸師は、小乗の内凡以前の世俗の凡夫で、ただ世間の善根を修めて出離を求める者であると言うが、それではなぜ『観無量寿経』に、〈父母に孝養し、世間の慈を行う者が、命終の時に浄土や四十八願の教えに遇い、それを聞いて往生する〉と説かれるのか。この文によるならば、この人は、まだ仏法に遇わず、父母に孝養するけれども、悟りを求めたことのない者で、臨終に初めて善師の教えに遇って浄土を願うことがで

きたために往生を得たのである。悟りのために孝養したのではない。

下輩の三人について、諸師は、大乗をはじめて学ぶ十信位の凡夫であり、罪の軽重によって三品に分けるが、行位を判ずることはできないと言う。それは誤りである。下輩人には全く善根はなく、ただ悪を作るだけである。『観無量寿経』下品上生の文に、〈ただ五逆と謗法の罪を作らないだけで、その他の悪は全て造り、慚愧の心が少しもない。そんな者が命終の時、善師に遇って大乗を聞き、一声だけ仏を称する。すると阿弥陀仏が聖衆と共に来迎し往生を得る〉と説かれる通りである。善師に遇えば往生できるが、遇えなければ必ず悪道に堕ちる者である。

下品中生の文には、〈戒を受けてもすぐに破り、僧物を盗み、不浄説法して、慚愧の心が少しもない。命終には地獄の猛火が現れる。その時善師に遇って教えを聞き、仏を見、化仏に随って往生する〉と説かれる。善師に遇わなければ地獄の火が迎え、善師に遇えば化仏が迎える。これは阿弥陀仏の願力による救いである。

下品下生の文には、〈五逆・十悪を造り、あらゆる悪を犯して、必ず地獄に堕ちて多劫の苦を受ける者であるが、命終に善知識に遇って、阿弥陀仏と称えることを教えられ、往生を勧められる。その教にしたがって仏を称し、念に乗じて往生する〉と説かれる。やはり善師に遇わなければ地獄に堕ちるところを、臨終に善師に遇ったことによって蓮台に迎えられたのである。

また、『観無量寿経』定善・九品の文意によるならば、その教えの対象は釈尊滅後の五濁の凡夫である。縁に遇うことの違いによって九品の別があるだけである。上品人は大乗の縁に遇った凡夫、中品人は小乗の縁に遇った凡夫、下品人は悪縁に遇った凡夫である。悪業のために臨終に善を借り、仏の願力に救われて往生し、極楽に至ってはじめて菩提心を発すのである。そのような者を、大乗をはじめて学ぶ凡夫とは言えない。そのような見解は自身を迷わせ、他者を害すること甚だしい。以上、九品の一々の経文を文証として、現在のすべての善悪の凡夫を九品に配当した。信じて疑わなければ、みな必ず仏願力に乗じて往生することができる」（要約）と。

(302) 観経疏天台に云う（『大正蔵』三七、一九三頁中～下）、「三輩を九品に開く。その上品は習種から解行（十住・十行）の菩薩、中品は十信以下、下品は末世の凡夫である。上品は見仏聞法して即座に無生を悟る。それは道種位（十回向）に当たるからである。下品は四重の罪を造りながらも往生を得る。あるいは上品は道種位（十回向）、中品は性種位（十行）、下品は習種位（十住）であると言う」（要約）と。

(303) 観経義疏恵遠に云う（『大正蔵』三七、一八二頁上～下）、「はじめに往生人について、三分あるいは九分する。三分すると、大乗人の種性（十住）以上が上品、小乗人の凡夫位から聖位に至る持戒の者が中品、大乗人の外凡の罪人が下品である。九分の場合は、三輩をそれぞれ上・中・下の三つに開く。大乗人の四地以上が上品上生である。往生して即座に無生忍を得るからである。初・二・三地の信忍の菩薩が上品中生である。往生して一小劫を経て無生を得るからである。…中略…（以下の文は略するべきではないと思われるので、小字で書き加えておく。……筆者註）種性解行（十住・十行）が上品下生である。三小劫を経て百法明門を得るからである。小乗人の前三果が中品上生である。往生して即座に阿羅漢を得るからである。…中略…見道以前の内外二凡で、持戒の者が中品中生である。往生の後七日間聞法して須陀洹（預流）を得、半劫を経て阿羅漢を得るからである。見道以前の世俗の凡夫が中品下生である。往生の後一小劫を経て阿羅漢を得るからである。下輩ははじめて大乗を学ぶ人で、罪の軽重によって三品に分かれる。行位を論ずる所にまで至らない者である」（要約）と。

(304) 観経疏正宗分散善義に（善導『観経疏』巻四、『大正蔵』三七、二七〇頁下）、上品上生位を明かして云う、「これは大乗を学ぶ上善の凡夫である」と。上品中生位を明かして云う、「これは大乗の次善の凡夫である」と。上品下生位を明かして云う、「これは大乗の下善の凡夫である」と。中品上生位を明かして云う、「これは小乗の上善の凡夫である」と。中品中生位を明かして云う、「これは小乗の下善の凡夫である」と。中品下生位を明かして云う、「これは世間の善を行う上福の凡夫である」と。下品上生位を明かして云う、「これは十悪を作る罪の軽い凡夫である」と。下品中生位を明かして云う、「これは破戒の罪を造る次に罪の重い凡夫である」と。下品下生位を明かして云う、「これは五逆等のあらゆる罪を作る重罪の凡夫である」と。

(305) 観経疏同下に云ふ（道綽『観経疏』巻下、古逸）、「まさに文を釈さんとするに、先づ文首に略して四門の分別を作す。一に往生因縁の同異を弁じ、二に往生人を明かし、三に分位差別し、四に問答分別す。一に往生因縁の同異を弁ずとは、上品上生人は、本識の内に過去に久しく修せる十解・十行・十回向および煖等の三心、この三十三心の中に修するところの六度、および大乗の多聞薫習の種子をもって因縁となす。この臨終の世第一念の意識をもって次第縁となす。現在所願の誠心をもって増上縁となす。臨終所現の阿弥陀仏および二菩薩・金剛台等をもって縁縁となす。これ託生の境界なるをもってのゆゑに。上品中生人は、本識の内の過去の十解・十行・十回向の三十心の中に修するところの六度、多聞薫習の種子等をもって因縁となす。次第縁は前のごとし。現在所起の信楽因果、発願回向等の心をもって増上縁となす。紫金台等をもって縁縁となす。上品下生人は、本識の内の過去の十解・十行の心の中に修するところの六度、多聞薫種子をもって因縁となす。次第縁は前のごとし。現在所発の無上道心所（所ー？）をもって増上縁となす。臨終所見

の金蓮花をもって縁縁となす。中品上生人は、本識の内の煖法・頂法、過去に修するところの有漏の戒・定・恵等薫習の種子をもって因縁となす。無漏を取らず。もし忍位に至らば、小乗の根性すでに定まり、および悪道を得、数滅にあらず、さらに大乗を求めず。今求むるところはみなこれ分段生なり。次第縁は前のごとし。現在に修するところの戒・定・恵所および回願求心等をもって増上縁となす。臨終所見の金色光蓮花台等を縁縁となす。中品中生人は、本識の内の過去の惣別念処に修するところの戒・定・恵等薫習の種子をもって因縁となす。次第は前のごとし。現在起の回向願求心等をもって増上縁となす。宝蓮華等をもって縁縁となす。中品下生人は、本識の内の過去の五停心位に修するところの戒・定・恵等薫習の種子をもって因縁となす。次第縁は前のごとし。現在所起の遇善知識聞法願求心をもって増上縁となす。また蓮華相来迎あるを縁縁となす。文中に略天（ママ）（天―？）せるも、惣じて西方所求の境界をもって縁縁となす。下品上生人は、本識の内の十信位中の十千劫に修するところの戒・定・恵、多聞薫習の種子のまさに満てんとするをもって因縁となす。次第縁は前のごとし。命終に臨んで遇ふところの善知識および念仏願求心をもって増上縁となす。仏光明七宝蓮華をもって縁縁となす。下品中生人は、本識の内の十信中品（ママ）（品―？）に修するところの施・戒等薫習の種子をもって因縁となす。次第縁は前のごとし。臨終所遇の善知識および聞法仏等をもって増上縁となす。蓮華仏等をもって縁縁となして、すなはち往生を得。阿毘跋位を去ること遠からざるをもってのゆゑに。下品下生人は、本識の内の十信初心および十信外の軽毛の凡夫の修するところの施・戒・恵等薫習の種子をもって因縁となす。この臨終の意識をもって次第縁となす。臨終所遇の善知識および仏等をもって増上縁となす。金蓮華をもって縁縁となす。惣じてこの四縁を往生の因となして、すなはち往生を得。乃至もし華厳経によらば、定をもって因となす。彼の経に説くがごとし、〈この仏国土の体性三昧〉と。もし維摩経の説によらば、布施・重心・深心・菩提心・十善道はならびにこれ浄土の因なり。涅槃経によらば十六種あり。〈像および仏塔を造ること　なほし大母指のごとくし　常に歓喜心を生ずれば　すなはち不動国に生まれん〉、〈もし仏法僧において　一香灯を供養し　乃至一偈（ママ）（偈＝華？）まで　すなはち不動国に生まれん〉と。広くは彼の説のごとし。もし弥勒問経によらば、おほよそ十念ありて彼国に生ずるを得。二に往生人を弁ずとは、はじめ十解より、世第一法・三賢・四心の菩薩に至るまで、これ上輩生の三人なり。これ九品往生人を処するに初地已上の菩薩をもってするにあらず。もし初地已上の菩薩ならば、正体智に拠って、すなはち一味真如法性の土を証せん。謂く加行後得智をもって、すなはち恒に七宝荘厳の事浄土を見るなり。ゆゑに九品往生人を処するにあらざるなり。五停心位より頂法已還に至るまで、これ中輩生の三人なり。小乗の根性、未だ決定せざるがゆゑに、忽ち善知識に遇ひて発心回向し、浄土に生ずるを得。もし忍位に至れば、小乗の根性決定し、転じて大乗を求むるべからざるなり。三の分位差別は、文中に至って解す」と。

【現代語訳】道闇『観経疏』巻下に云う、「経文を釈するに当たり、まずはじめにおおよそ四門に分ける。第一に往生因縁の同異を論じ、第二に往生人を明かし、第三に行位の差別を述べ、第四に問答を設けて検討する。

第一に往生因縁の同異を論ずる。上品上生人は、十解（十住）・十行・十回向および煖・頂・忍の三十三心の中で、長らく修してきた六波羅蜜や、大乗の聞法によって、阿頼耶識に薫ぜられた種子を因縁とする。臨終に発する世第一法の意識を次第縁とする。現在往生を願っている誠の心を増上縁とする。臨終に現れる阿弥陀仏・二菩薩と金剛の蓮台等を縁縁とする。これは自身が往生してゆく情景だからである。

上品中生人は、十解・十行・十回向の三十心の中で、修してきた六波羅蜜や聞法によって阿頼耶識に薫ぜられた種子を因縁とする。次第縁は右と同じである。現在起こっている信楽や発願、回向の心を増上縁とする。紫金台等を縁縁とする。

上品下生人は、十解・十行の心の中で修した六波羅蜜や聞法によって阿頼耶識に薫ぜられた種子を因縁とする。次第縁は右と同じである。現在発した無上菩提心を増上縁とする。臨終に現れる金蓮花を縁縁とする。

中品上生人は、煖法・頂法の中で修した有漏の戒・定・恵等によって阿頼耶識に薫ぜられた種子を因縁とする。無漏の行はない。また忍法の位に到達すると、小乗の根性が決定して、悪道に堕ちることもある。択滅無為に至ることも、大乗に回入することもない。ただ分段生死の世界を求めるのみである。次第縁は右と同じである。現在修する戒・定・恵と回向・願生の心等を増上縁とする。臨終に現れる金色光の蓮花台等を縁縁とする。

中品中生人は、総相念住・別相念住の中で修した戒・定・恵等によって阿頼耶識に薫ぜられた種子を因縁とする。次第縁は右と同じである。現在起こってくる回向・願生の心を増上縁とする。宝蓮華等を縁縁とする。

中品下生人は、五停心位の中で修した戒・定・恵等によって阿頼耶識に薫ぜられた種子を因縁とする。次第縁は右と同じである。現在、善師に出遇って教えを聞いて起こした願生心を増上縁とする。蓮華が来迎する情景を縁縁とする。経文では略されているが、極楽を願う心の情景が縁縁である。

下品上生人は、十信位の十千劫の間に修した戒・定・恵や聞法によって阿頼耶識に薫ぜられた種子を因縁とする。次第縁は右と同じである。臨終に出遇う善師および念仏・願生心とを増上縁とする。仏の光明や七宝の蓮華を縁縁とする。

下品中生人は、十信位で修した施・戒等によって阿頼耶識に薫ぜられた種子を因縁とす

る。次第縁は右と同じである。臨終に出遇う善師および聞法・仏等を増上縁とする。蓮華・仏等をもって縁縁として、即座に往生を得る。不退転位に近いからである。

下品下生人は、十信の初心と十信未満の愚かな凡夫が修した施・戒・恵等によって阿頼耶識に薫ぜられた種子を因縁とする。臨終の意識を次第縁とする。臨終に出遇う善師および仏等を増上縁とする。金蓮華を縁縁とする。すべて因縁・次第縁・増上縁・縁縁の四縁を往生の因として、往生を得るのである。…中略…

『華厳経』では三昧が浄土の因であると言う。『華厳経』（六十巻本巻二十七、『大正蔵』九、五七四頁上）に、〈この仏国土の体性三昧〉とある。『維摩経』（巻上、『大正蔵』十四、五三八頁中）には、布施・重心・深心・菩提心・十善道はみな浄土の因であると言う。『涅槃経』には十六種の因を説く（北本巻二十一、『大正蔵』一二、四九一頁中・上）。〈仏像・仏塔つくる人　ほんの親指程度でも　常に歓喜を生ずれば　不動国に往生す〉、〈仏・法・僧を敬って　香・花を供養する人は　花一輪に至るまで　不動国に往生す〉等と、経には詳説されている。『弥勒問経』には、十種の念によって往生することができると説かれている。

第二に往生人について述べる。十解（十住）から世第一法・三賢・四心の菩薩までが上輩生の三人である。九品往生人を初地以上の菩薩と考えてはならない。初地以上の菩薩ならば、正体智（根本無分別智）によって一味真如法性の土を証することができるだろう。また加行後得智によって、即座に常に七宝荘厳の事浄土を見ることになろう。これは九品往生人の境地ではない。五停心位から頂法までが中輩生の三人である。小乗の根性がまだ決定していないから、善知識に遇えば発心回向して浄土に生まれることが出来るのである。もし忍位に到達すれば、小乗の根性が決定し、大乗に回入することができない。

第三の行位の差別は、本文中に解説する」と。

(306) 無量寿経連義述文賛下（憬興、『大正蔵』三七、一五九頁中）、「一説に、『無量寿経』の三輩は、上から順に、『観無量寿経』九品の上品中生・中品上生・下品下生に当たると言う。だから『観無量寿経』上品中生に、七日を経て不退転を得ると言うのである。この説は誤りである。また一説に、『無量寿経』に言う不退転は初地であり、『観無量寿経』の無生忍・得百法明門も初地であると言う。この説も誤りである。『観無量寿経』には、往生して不退を得、その後一小劫を経て無生忍を得ると説かれているので、不退転は初地ではない。正しくは、上品三生は、得果までの遅速はあるが、みな十信に入って、無生忍を得、百法明門を悟るから、住不退と言うのである」（要約）と。

(307) 無量寿述義記中に云ふ（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「経の〈仏告阿難十方世界〉より〈凡有三輩〉に至る。述して曰く、この下は第二に、別して三輩を開く。中に於いて先づ開き、後に釈す。これはすなはち開くなり。謂く至心願生の者、行業の優劣の位分、上（ママ）（上＝亦？）一にあらず。ゆゑに三輩あるなり。この中、先づまさに三輩の相を弁ずべし。略して三門あり。一に三輩の位分を定め、二に九品の相と与（くみ）し、三に受用胎生は何品の中にあるかを顕す。初めに位を定むとは、この中、上輩は位に約さば十解已上にあり、行に約さばまた十信位中の信成就の者を取る。未だ信成就位に入るを得ずといへども、その中においてまた定信あり、仏智等に疑惑せざるがゆゑに。すなはち熙連河の仏の所において菩提心を発し、等しく大乗の法を聞き、よく謗らざるがゆゑに。中輩人は、すなはち十信の中、信未だ成就せず、未だ熙連を満てざる已前の人なり。下輩人は、十信位の中、最初発心なり。菩提心を発するを得といへども、未だよく施等の功徳をせず、ただしかれども十念念仏乃至一念を成就す。旧本の中、後の二輩人は、みな疑心あるをもってのゆゑに知んぬ、彼はこれ未だ熙連を満てず、信決定せざることを。経文によって位分することほぼしかり。論には決判なければ、敢へてすなはち定めず。（十二に九品の相と与（くみ）すとは？）また云ふ、上品の三の位分は云何と。あるが云ふ、〈四地已去を上上品と名づく。彼に生じてすなはち無生忍を得るがゆゑに。初二三地を上中品と名づく。生彼已国（ママ）（已国＝国已？…彼国に生じをはりて）、一小劫にして無生忍を得。生（ママ）（生＝？）彼国の日、長ければなり。信忍より無生忍に至るまで、ただ所（ママ）（所＝一小？）劫を経るのみ。もし此方の時に約さば、実に無量劫を経。種性解行を上下品と名づく。彼国に生じをはりて三小劫を過ぎて百法明門を得、歓喜地に住す。また彼国の劫、長ければなり。種性より初地に至るまで、ただ三小劫を住するのみ。もし此方の時に約さば、また無量劫を経。信忍より無生忍に至るまで、第二の阿僧祇を経、種性より初地に至るまで、第一の阿僧祇を経。何のゆゑに上中品、ただ一小劫等を経るのみかとなれば、彼の劫量に約せばなり。下品生の中の十小劫等も、例してまたまさにしかるべし〉と。もししからば、穢土にて十信を経ることただ万劫を経るのみにして、如何が彼に生じて、それ大いに稽遅ならん。彼の十小劫は、此の無量大劫に当たる。たとへば六十大劫を経と説くなり。このゆゑにこの説は理としておそらく然らず。あるがいふ、〈上品上生は十回向にあり。彼に生じてすなはち無生忍を得るとは、謂く初地中の無生忍なり。初地位の中に、始めて大乗の正性離生に入る。このゆゑに得無生忍と名づく。上品中生は十解行にあり。一小劫を経て無生を得るとは、謂く地前三祇中に第三劫を経て初地に入るなり。上品下生は十信位にあり。三小劫を経て百法明門を得るとは、謂く地前三阿僧祇を経て、初地中に百法明門を得。一・三小劫の差降しかるべし〉と。十（ママ）（十＝一？）小劫等は、前と同じくまた難ず。もし此方の劫に約さば、一・三ははなはだ短し。もし彼土の劫に就かば、十六（ママ）また大長なるところなるがゆゑに、これまた釈義また未だ顕かならず。ある義に、〈上輩三品生の者はみなこれ信位初業の菩薩に就

き、彼の根行に随って、分かちて三品となす〉と。涅槃経に依らば、五恒已前に六品人あり。一に熙連河の仏の所において菩提心を発し、よく悪世においてこの経を受持し、誹謗を生ぜず。二に一恒河沙の仏の所において菩提心を発し、謗せず愛楽するも、人のために分別広説することあたはず。三に二恒河沙の仏の所において菩提心を発し、すなはちよく誹謗せず、正解信楽し、受持読誦するも、またまた人のために広説することあたはず。四に三恒河沙の仏の所において発心し、すなはちよく謗せず、受持読誦し、経巻を書写し、他のために説くも、未だ深義を解せず。五に四恒河沙の仏の所において菩提心を発し、すなはちよく謗せず、受持読誦して、経巻を書写し、他のために広く十六分の中一分の義を説く。また演説すといへども、また具足せず。六に五恒河沙の仏の所において菩提心を発し、すなはちよく謗せず、受持読誦して経巻を書写し、広く人のために十六分の中八分の義を説く。諸師は多く、前の五は十信位の中にありと判じ、第六は十解以上、自余の六・七・八恒は、その住、地上に属すと判ず。今この上輩の三品人は、熙連河より五恒に至る。その中の六人を摂して三品となす。上上品の中に、三種の心を発し、乃至大乗を読誦し、六念を修行す。ゆゑに知んぬ、彼の第五・第六を摂すと。上中品の中、必ずしも方等を受持・読誦せず、乃至深く因果を信じ、大乗を謗せず。（ここに脱文あり。意を汲んで小字で補う。……筆者註）ゆゑに知んぬ、彼の第三・第四を摂すと。上下品の中、また因果を信じ大乗を謗せず、ただ無上道心を発す。ゆゑに知んぬ、彼の第一・第二を摂す。十住以上はすでに位退するを免れ、十方国において分に随って成仏す。此にありて行において退転することを懼れず。このゆゑに必ずしも浄土に生ずるを求めず。彼の観経によれば、十六観を説く。初業のまさに退転すべき者を摂して、彼国に生じて退転せざらしめんと欲す。しかるに十住の中、前の六心は、二乗等の地に退堕せずといへども、未だ十不退転を得ることあたはず。このゆゑにまた彼国に生ずるを求むることあり。無生歓（歓＝観？）速やかに現前すること得しめんと欲するがゆゑに。すなはち上輩の中、上品生はこれ十住の中の前六住の人なり。彼に生じてすなはち無生忍を得るとは、謂くすなはち七住の無上（上＝生）忍なり。第七住には、多分に彼の第七地所修の法門を習ふによる。このゆゑにこの住はまた相似の無生法忍を得。ゆゑに華厳経第六住の中に十法を学ぶに、云はく、〈一切法無相乃至無虚を学ぶ。何をもってのゆゑに。不退転無生法忍を得しめんと欲するがゆゑに〉と。謂く六住にありて十種の法を学ぶは、第七住の不退転無生忍を得しめんと欲するなり。上中品生は、七日を経をはりて、阿耨菩提において不退転を（十得？）とは、十信にあるを得。すでに二恒・三恒（十仏？）を経れば、彼国に生じて十住に入り、初めて位不退を得るによる。彼土の七日は此の七劫に当たる。一小劫を経て無生忍を得るとは、謂く受（＝更？）進修して第七住に入るなり。上下生の中、三小劫を経て百法明門を得、歓喜地に住すとは、謂く十信にあり。すでに熙連或は一恒の仏を経て、彼の浄土に生まれ、更に進修するがゆゑに。初住位の中に、百法明門を得るは、初住に多く初地の行法を習ふ。このゆゑにこの住に百法明門を得。本業経の中に、またこの説をなす。〈十住位の中に百法門を得。謂く信等の十法の一一に各十あるがゆゑに〉と。住歓喜と言ふは、謂く歓喜地の行に住するを得。すなはちこの中に歓喜地を証するにはあらず。これすなはち因中に果の名を説くなり。上輩三品の位類しかり。論の文を更（更＝見？）るも未だ専定を取らず。また云ふ、この中輩の三の判位はいかん。謂く、前三果を中上生と名づく。彼に生じてすなはち阿羅漢を得るがゆゑに。順決択分を中中生と名づく。彼に生じて法を聞き、預流を得るがゆゑに。解脱分を中下生と名づく。彼に生じて小劫を経てはじめて応果を得るがゆゑに。また云ふ、この下三品は、或はあるもの昔時に菩提心を発すといへども、未だ熙連河を満てることあたはざるに、中間に退心し、諸悪業を作る。所作の悪業の軽重に随って三を分かつ。この人すでに退して諸悪を作るがゆゑに、位分の上下を分別すべからず。問ふ。未だ熙連を満てざるも、退して悪を作らざれば、何品の摂にあるや。答ふ。この三にあひ従ひて、下品の中に入る。今退せずといへども、位分は同じなるがゆゑに。退して大乗を謗するを起こすことあるを容るるがゆゑに。しかれども彼に生ずる時、未だ必ずしも十小劫等を経ず。この人、重悪業を作らざるがゆゑに」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「経の、〈仏告阿難十方世界〉より〈凡有三輩〉まで。これ以降は、第二に往生人を三輩に開き分ける。まず三輩に開くことを言い、後に三輩のそれぞれを説明する。ここではまず三輩に開く。誠の心を傾けて往生を願う者も、修行の優劣によって行位はまちまちである。だから三輩に分かれると言うのである。

そこでまず三輩の様相を述べよう。およそ三つの観点から論じてゆく。第一に三輩人の行位を定め、第二に『観無量寿経』九品人との対比、第三に胎生の者はどこに位置付けられるかを解明する。

第一に三輩人の行位を定める。上輩人は、階位から見ると十解（十住）以上である。修行の階梯から見ると、十信位の中で信心を成就するための修行をする者を含む。信成就位には至らないが、一定の信心があり、仏智等を疑惑しないからである。彼らは熙連河沙ほどの数の仏の所で菩提心を発し、大乗の法を聞き、誹謗しない者だからである。

中輩人の位は十信の中で、信心が成就していない状態である。熙連河沙ほどの数の仏に出遇う以前の者である。

下輩人の位は十信の中で、初めて発心したばかりのところである。菩提心を発すことができたとは言っても、未だ布施等の功徳はない。ただし十念乃至一念の念仏を成就している。旧訳では、中・下二輩の人は疑心があると説かれる。よって彼らは、熙連河沙ほどの

数の仏に出遇う以前の者であり、信心が決定していないことがわかる。経文によって行位を分けると、だいたいこのようになる。論の文には決判がないので、敢えて言及しない。

第二に、『観無量寿経』九品との対比について論ずる。まず上品の三人の行位について諸説を挙げる。

その第一の説には、〈四地以上を上品上生人とする。極楽に生じてすぐに無生忍を得るからである。初・二・三地を上品中生人とする。極楽に生じて一小劫を経て無生忍を得るからである。極楽の時間は速く過ぎるので、信忍から無生忍まで一小劫を要するのみである。娑婆の時間に換算すると無量劫を要することになる。種性解行（十住・十行）を上品下生人とする。極楽に生じて三小劫を過ぎて百法明門を得て歓喜地（初地）に住する。これも極楽の時間が速く過ぎるからである。よって種性（十住）から初地に至るまで三小劫を要するのみである。娑婆の時間に換算すると、これまた無量劫を要する。穢土では、信忍から無生忍に至るまでに第二の阿僧祇劫を要し、種性から初地に至るまでに第一の阿僧祇劫を要するのである。なぜ上品中生人が一小劫等を要するだけなのかと言うと、経には極楽における劫量が説かれているからである。下品に説かれる十小劫等も同様である〉と言う。

だとすると、穢土においてさえ十信を成就するのに一万劫を要するだけなのに、どうして極楽に生まれてそれほどの長い時間を要すると言うのか。極楽の十小劫は娑婆の無量大劫に当たる。六十大劫を要するなどと説かれているではないか。よってこの説は道理として成り立たない。

第二の説には、〈上品上生人は十回向位である。極楽に生じてすぐに無生忍を得ると言うのは、これは初地の無生忍である。初地の位で初めて大乗の正性離生（凡夫の生を離れて無漏の聖道すなわち見道に入ること）に至るので、無生忍を得ると言うのである。上品中生人は十解行位（十住・十行位）である。一小劫を経て無生を得るとは、地前の第三阿僧祇劫を経て初地に入るということである。上品下生人は十信位である。三小劫を経て百法明門を得るとは、地前の三大阿僧祇劫を経て、初地に至って百法明門を得るということである。一小劫・三小劫の違いはそういうことである〉と言う。

一小劫等の解釈については、前説と同じく難点がある。もし娑婆の劫が示されているとするならば、一小劫・三小劫では短かずぎる。もし浄土の劫だとすると、長すぎるので、やはりこの説は明解ではない。

第三の説には、〈上品の三人はみな十信位の初めの菩薩であり、その機根と修行の優劣によって三つに分けられる〉と言う。

『涅槃経』（北本巻六、『大正蔵』一二、三九八頁下～三九九頁上）によると、五恒河沙ほどの仏の所で発心修行するに至るまでの菩薩の階位に六段階あるとされる。その第一は、熙連河沙ほどの仏の所で菩提心を発し、悪世でこの経を受持（心に保つこと）し、誹謗を生じない者。第二は、一恒河沙ほどの仏の所で菩提心を発し、正法を誹謗せず愛楽するけれども、人に対して正しく説法することはできない者。第三は、二恒河沙ほどの仏の所で菩提心を発し、正法を誹謗せず、正しく理解して信じ、受持し読誦するけれども、やはり人に対して説法できない者。第四は、三恒河沙ほどの仏の所で発心し、正法を誹謗せず、受持・読誦し、経巻を書写し、人に説法するけれども、深いところの意義を理解できない者。第五は、四恒河沙ほどの仏の所で菩提心を発し、正法を誹謗せず、受持・読誦し、経巻を書写し、多くの人に向かって十六分の一ほどの真実を説くけれども、また不十分な者。第六は、五恒河沙ほどの仏の所で菩提心を発し、正法を誹謗せず、受持・読誦し、経巻を書写し、多くの人に向かって十六分の八ほどの真実の義を説く者である。諸師の多くは、前の五段階は十信位の中にあると判じ、第六は十解（十住）以上、それ以降の六恒河沙・七恒河沙・八恒河沙は地上の菩薩であると判定する。

『涅槃経』の説によると、上品の三人は、熙連河沙から五恒河沙までということになる。その六段階を上品三生人に配当することができる。上品上生人は、三種の心を発し、大乗経典を読誦し、六念を修行する。よって第五の四恒河沙と第六の五恒河沙とに当たる。上品中生人は、必ずしも方等経典を受持・読誦しないけれども、深く因果を信じ、大乗を誹謗しない。よって第三の二恒河沙と第四の三恒河沙とに当たる。上品下生人は、因果を信じて大乗を誹謗せず、ただ無上道心を発す。よって第一の熙連河沙と第二の一恒河沙とに当たる。十住以上の菩薩は行位を退くことがなく、十方諸仏の国において力量に応じて成仏する。娑婆に居ても行位を退く心配がない菩薩が、わざわざ浄土に生まれることを願う必要はなかろう。『観無量寿経』には十六観の法が説かれる。その最初の修行さえも退転してしまいそうな者を救って、極楽に生れさせ、退転しないようにしてやろうというのが、この経の本意であろう。とすると、十住の初めの六心は、小乗の位に退堕することはないけれども、十不退転（第七不退転住で得る十種法。六十巻本『華厳経』巻八、『大正蔵』九、四四五頁下）を得るには至っていない。だからそのような者に、極楽に往生することを願わせ、無生忍の悟りを早く得させようとしてくださっていると理解できよう。

よって私見によると、上品上生人は十住の前六住の人である。極楽に生じてすぐに無生忍を得るとは、七住の無生忍を言う。第七住では、第七地の法門を多く修習するから、無生法忍に似た境地を得るのである。だから『華厳経』第六住（正心住、六十巻本巻八、『大正蔵』九、四四五頁下）に、十法を学ぶことを説く中に、〈一切法無相より無虚に至る十法を学ばせる。それはなぜかというと、不退転の無生法忍を得させようとするからであ

る〉と言うのである。第六住で十種の法を学ぶのは、第七住の不退転の無生忍を得させようとしてくださっているからなのである。

上品中生人は、七日を経て悟りに向かって不退転を得る。それは十信位にあると言える。すでに二恒河沙・三恒河沙の仏に出遇っているので、極楽に生じて十住位に入り、初めて行位の不退を得るからである。極楽の七日は娑婆の七劫に当たる。一小劫を経て無生忍を得るとは、修行を進めて第七住に入ることを言うのである。

上品下生人は、三小劫を経て百法明門を得て歓喜地に住すると言う。それは十信位にあると言える。すでに熙連河沙あるいは一恒河沙の仏に出遇い、極楽に生まれて、さらに修行を進めるからである。初住位で百法明門を得るというのは、初住では初地の修行の多くを修習するから、ここで百法明門を得ると言うのである。『菩薩瓔珞本業経』（巻上、『大正蔵』二四、一〇一一頁下）にもそのように説かれている。〈十住位の中で百法門を得るとは、信等の十法の一つひとつに各々十法が備わるからである〉と。住歓喜とは、歓喜地の行に住することができるという意味である。ここで歓喜地を証するのではない。これは因の中に、果の名を用いて説いているのである。上品三生人の行位は以上である。また、論の文からは確定が得られない。

次に中品の三人を行位を論ずる。前三果（預流果・一来果・不還果）を中品上生人とする。極楽に生じてすぐに阿羅漢果を得るからである。順決択分（四善根位）を中品中生人とする。極楽に生じて法を聞き、預流果を得るからである。順解脱分（三賢位）を中品下生人とする。極楽に生じて一小劫を経てはじめて阿羅漢果を得るからである。

次に下品の三人の行位を論ずる。下品の三人は、昔、菩提心を発しながら、熙連河沙の仏に出遇う前に退転し、多くの悪業を作った者である。その悪業の軽重によって三つに分けられる。この人はすでに退転して諸悪を作った者であるから、菩薩の行位をもってその位を判別することはできない。

問う。熙連河沙の仏に出遇うことがなくても、退転して悪を作るとことがなかった者は、どの品位に配当されるのか。答え。やはり下品である。此度は退転して悪を作ることがなかったとはいえ、下品人であることには変わりないので、退転して大乘を誹謗することもあり得るからである。しかしながら極楽に生まれるまでに十小劫等の時間を要することはない。それは重悪業を作らなかったからである」と。

(308) 観経記興下に云ふ（龍興『観経記』巻下、古逸）、「しかるに今、文に当たって次第に分別せん。麁に分かちて三となす。謂く三輩観なり。細に分別して九となす。三三に開くがゆゑに。しかるにこの位を判ずるに、略して八説を出す。初めに遠法師説く、〈上輩三品は、四地已上の順忍の三地を名づけて上上となす。彼に生じてすなはち無生忍を得るがゆゑに。理として実にはまた多時に得る者あるも、経に即得と言ふは、勝に就いて論をなせばなり。初・二・三地の信忍の三地を説いて上中となす。経に、彼に生じて一小劫を過ぎて無生を得と言ふがゆゑに。理として実には二・三劫にして得るも、経に一劫と言ふは、近に就いて語をなせばなり。問ふ。地持諸（ママ）（諸―?）に説く、初地已上に、かならず一大阿僧祇劫を過ぎてはじめて八地に至ると。この経は何のゆゑに一小劫を過ぐとするや。答ふ。それ三義あり。一には時劫同じからず。華厳に説くがごときは、娑婆の一劫は無量寿の一日一夜に当たると。地持は此に就くがゆゑに、一大阿僧祇と説く。この経は彼に就くがゆゑに、一小劫と説く。二には去処の異なり。地持は信忍の初より去るに就き、この経は信忍の終、第三地より去るに就く。三には所到の処の異なり。地持に言ふところは八地の無生、この経に言ふところは七地の無生なり。種性解行を名づけて上下となす。経に、この人、三小劫を過ぎて百法明を得、初地に到ると説くがゆゑに。問ふ。地持論に説く、種性より一大阿僧祇を過ぎてはじめて初地に到ると。この経は何のゆゑに三小劫と説くや。答ふ。時、同じからざればなり。上に説くところのごとし。問ふ。地持にすでに種性より去るに、一大劫を過ぐと説く。地より去るに一大劫を過ぐ。この経は、何のゆゑに、上中は一を過ぎ、上下は三を過ぐとするや。答ふ。理として実には斉しきも、左右を挙ぐるのみ。前の上中の中には信忍の終に就き、後の上下の中には伏忍の始に就く。かくのごとき等の異なり。前の分別のごとし。中輩にまた三あり。小乘人の中、下の三果の人を説いて中上となす。彼に生じてすなはち阿羅漢を得るがゆゑに。理として実にはまた多時に得る者あるも、経に即得と言ふは、勝に就いて語をなせばなり。乃至見道已前の内外二凡の、精（つと）めて浄戒を持ち、出離を求むる者を説いて中中となす。彼に生じて七日にして須陀洹を得、半劫を過ぎをはりて羅漢を得るがゆゑに。理として実にはまた多時に得る者あるも、七日・半劫とは、勝に就いて論をなせばなり。見道已前の世俗の凡夫の、余の世福を修し、出離を求むる者を説いて中下となす。経に、彼に生じて一小劫を過ぎて羅漢を得と説くがゆゑに。理として実にはまた多劫に得る者あるも、一小劫と説くは、勝に就いて語をなせばなり。下輩にまた三あり。大乘人の中、過の軽重に随って、分かちて三品となす。未だ道位あらざれば、階降を弁じがたし。その過の軽重は、文のごとく知るべし〉と。力法師云ふ、〈上輩三品は、位地前にあり。地上に通ぜず。ゆゑはいかんとなれば、すでに三界を出で、随意自在に見仏・聞法するもの、なんぞすべからく因を修してはじめて浄土に生ずべけん。ただ十行・十回向をもって上上とし、十解を上中とし、十信を上下とす。中下二輩は大（おほよ）そ遠光と同じ〉と。この後の諸法師は、多く地前と云ふも、その間の取捨、少しく不同あり。基法師云ふ、〈十回を上上とし、行解を上中とし、十信を上下とす。中輩の三人は、位小乘の見道已前にあり。謂く四善根を中上品となし、五停心観・惣

別念処を中中品となし、七方便の前の正法の外の人を中下品となす。下輩の三人は、これ大乗の中の十信已前の正法の外の人にして、業の優劣を詳らかにし、過の軽重を観じて、分かちて三品となす。経文に説くがごとし〉と。あるもの言ふ、〈十回を上上、十行を上中、十解を上下とす〉と。あるもの言ふ、〈地前の三十心を上上、十信の末心を上中、十信の初心を上下とす〉と。あるもの言ふ、〈十解の初心を上上、十信の後心を上中、十信の初心を上下とす〉と。この上の三師、中下二輩は大そ基師と同じ。あるもの言ふ、〈十信および信前にして、よく三種の心を発し、三種の行を修する者を上上品となす。すなはちこれ起信論の三心これなり。上中・上下の二品は、ただ十信已前にして、菩提心を発し、善を修する凡夫を取り、起行の深浅をもってこれに分かつ。何をもってか知るとなれば、この経の文に、未来世の一切衆生のために、煩悩の賊に苦しめらるる者のために、諸の浄業を説くと云へばなり。問ふ。もししからば、何のゆゑにこの経の文に、彼に生じてすなはち無生法忍を得、および三劫を経て百法明門を得と云ふや。答ふ。瓔珞経のごときは、十解の初発心住の中に、すでに無生忍を得と。また云ふ、十信に十心あり。いはゆる十信・十精進・十念・十定・十恵・十願・十戒・十護法・十不退・十回向なり。この十十の百法明門を得るなりと。また大集経に云ふ、その時衆の中の諸の十住に住する菩薩等、かくのごとき言をなす、世尊よ、我らすでに無生法忍を得をはりて、よく如来の十八不共の法を行ずと。問ふ。なんぞ彼に生じて七日にして不退を得るや。答ふ。不退に多種あり。謂く念・行・位・根・地等の十種なり。ゆゑに一准すべからず。煖・頂・忍の三を中上品となす。七方便をもって中中品となす。七方便の前を中下品となす〉と。あるもの説く、〈十信の末心を上上品となし、十信の初・中を上中品となし、十信の前の凡夫の、ただ菩提心を発し、深く因果を信ずる等をもって上下品となす。何をもってか知るを得る、十信の末心を上上となすことを。瓔珞にすでに云ふ、十住の初心に無生忍を得と。この経には、彼に生じてすなはち無生を得と。このゆゑに明らかに知んぬ、十信の末心なることを。何をもってか知るを得る、初・中の二位はこれ上中なることを。この経の文に説く、第一義において心驚動せずと。十信の前の凡夫は、よくかくのごとくならざるがゆゑに。経に、七日を経て不退を得と言ふは、多種の不退あればなり。前師の説のごとし。十信已前を上下となすは、その義、解すべし。もしすなはち十信已前の、菩提心を発し、諸悪を造らざる凡夫人を取らざれば、かくのごとき凡夫人は、九品の中、何品の摂なるや。もし中三品の摂ならば、この人すでに大心を発せば、なんぞ中品の中の摂ならんや。もし下三品の摂ならば、彼はすでに大乗心を発して、戒を持ち諸悪を造らざれば、なんぞ下品の中の摂ならんや。もし九品に摂せざれば、なんの義ありてか摂せざる。かくのごときがゆゑに知んぬ、上下の中の摂なることを。この義をもってのゆゑに、諸徳みな、十行已上を分かちて三品となすと言ふは、依用すべからず。問ふ。もししからば、何のゆゑに、この経の文に、百法明門を得て歓喜地に住すと説くや。答ふ。これは十住の初心に百法門を得る時に、不退位に入り、人空観を作し、心に歓喜を生ずるものなり。このゆゑに、まさに歓喜位に住すと言ふべし。しかるに地と言ふは、位と地と、義通ずるがゆゑに。余処の中にみな通じて用ゐるなり。中輩の三人は、みな種解脱分の善根の人なり。位をもってその上下を分かたず。ただ持戒の日に長短あり、もし戒なくば、ただ世の善を修することを明かして、もって三品を分かつ。彼に至って果を得るに、遅疾同じからず〉と。上の二師は、下輩同じ。経文に説くがごとし。これ後の二師の義を案ずるに、まさに末世の至あるべし」と。

【現代語訳】龍興『観経記』巻下に云う、「以下、経文に則して解説してゆこう。大ざっぱには三つに分けられる。いわゆる三輩観である。詳細には九つに分けられる。三輩をそれぞれ三つに開くからである。三輩九品往生人の行位を判定した先学の主な見解として、八説を挙げることができる。

第一に浄影寺慧遠師は次のように言う（『観経義疏』、『大正蔵』三七、一八二頁上～下）。〈上輩三品について。四地已上の順忍の三地（四・五・六地）を上品上生人とする。極楽に生まれてすぐに無生忍を得るからである。道理として実際には無生忍を得るまでの時間には長短があるだろうけれども、経に即得と言うのは、勝れた者について言うからである。初・二・三地の信忍の三地を上品中生人とする。経に、極楽に生まれて一小劫を過ぎて無生忍を得ると言うからである。道理として実際には二劫・三劫を経て得る者もあろうが、経に一劫と言うのは、最短を言うからである。問う。『菩薩地持経』（巻九、『大正蔵』三〇、九四五頁上）には、初地から八地に至るには一大阿僧祇劫を要すると説かれる。なぜこの『観無量寿経』には、一小劫を経ると説かれるのか。答え。それには三つの理由がある。第一に時間の長さが異なるからである。『華厳経』（六十巻本巻二十九、『大正蔵』九、五八九頁下）には、娑婆の一劫は無量寿国の一日一夜に当たると説かれる。『菩薩地持経』は、此土の時間によって説かれるので、一大阿僧祇劫と言い、『観無量寿経』は極楽に時間によって説かれるので、一小劫と言うのである。第二には出発点の行位が異なるからである。『菩薩地持経』は信忍の初め（初地）からの時間を言い、『観無量寿経』は信忍の終わり、第三地からの時間を言うのである。第三には到達点の行位が異なるからである。『菩薩地持経』は八地の無生忍、『観無量寿経』は七地の無生忍を言うのである。種性解行（十住・十行）を上品下生人とする。経に、三小劫を経て百法明門を得、初地に到達すると説かれるからである。問う。『菩薩地持経』には、種性（十住）から初地までは一大阿僧祇を要すると言う。『観無量寿経』にはなぜ三小劫と説かれるのか。答え。時間の観念が異なるからでる。すでに述べた通りである。問う。『菩薩地持経』には、種性から初地

に至るのに一大劫を要し、初地より八地に至るのに一大劫を要すると言う。『観無量寿経』ではなぜ、上品中生人は一小劫、上品下生人は三小劫を要すると言うのか。答え。道理として同じであるはずだが、様々な場合を挙げているだけである。上品中生では信忍の終わり（初地）からの時間を言い、上品下生では伏忍の初め（初住）からの時間を言う、などという違いである。前に述べたようなことである。中輩もまた三に分かれる。小乗人の中、下の三果の人（預流果・一来果・不還果）を中品上生人とする。極楽に生まれてすぐに阿羅漢の悟りを得るからである。道理として実際には時間の長短があるだろうけれども、経に即得と言うのは、勝れた者について言うからである。…中略…見道已前の内凡・外凡の人で、勤勉に浄戒を持ち、悟りを求める者を中品中生人とする。極楽に生まれて七日を経て須陀洹の果を得、半劫を経て阿羅漢の果を得るからである。道理として実際には時間の長短があるだろうけれども、七日・半劫と説かれるのは、勝れた者について言うからである。見道に入る以前の世俗の凡夫で、様々な世間の善を行い、悟りを求める者を中品下生人とする。経に、極楽に生まれて一小劫を経て阿羅漢の果を得ると説かれるからである。道理として実際には時間の長短があるだろうけれども、一小劫と説かれるのは、勝れた者について言うからである。下輩もまた三に分かれる。大乗人の中、罪の軽重によって三つに分けるが、修行する段階に至っていないので、行位を判定することはできない。罪の軽重は経文によって理解せよ〉と。

第二に力法師は次のように言う。〈上輩の三人はみな地前の位にある。地上ではない。なぜかというと、地上の菩薩は、すでに三界の苦界を脱し、思いのままに見仏・聞法できるのであるから、わざわざ修行して浄土に生まれる必要がないからである。十行・十回向を上品上生人とし、十解（十住）を上品中生人とし、十信を上品下生人とする。中下二輩は慧遠師とほぼ同じである〉と。以下の諸師はみな九品を地前と判定しているが、細部の相違がある。

第三に基法師は次のように言う。〈十回向を上品上生人とし、行解（十行・十住）を上品中生人とし、十信を上品下生人とする。中輩の三人は、小乗の見道已前の人である。四善根を中品上生人とし、五停心観・総別念処を中品中生人とし、七方便（三賢＝五停心観・別相念住・総相念住、四善根＝煖・頂・忍・世第一法）の前の仏道修行に入る以前の人を中品下生人とする。下輩の三人は、大乗の中の十信以前の仏道修行に入る以前の人であり、その行いの優劣や、罪の軽重を見て三つに分ける。経文に説かれる通りである〉と。

第四にある師が言う。〈十回向を上品上生人、十行を上品中生人、十解（十住）を上品下生人とする〉と。

第五にある師が言う。〈地前の三十心を上品上生人、十信の末心を上品中生人、十信の初心を上品下生人とする〉と。

第六にある師言う、〈十解（十住）の初心を上品上生人、十信の後心を上品中生人、十信の初心を上品下生人とする〉と。第四・第五・第六の三師は、中下二輩についてはほぼ基師と同じである。

第七にある師が言う。〈十信および信に入る前で、至誠心・深心・回向発願心の三種心を発し、具諸戒行・読誦大乗経典・修行六念の三種行を修する者を上品上生人とする。この三種心は『起信論』所説の三種心（直心・深心・大悲心）に当たる。上品中生・上品下生の二人は、十信に入る前で、菩提心を発し、善を修する凡夫である。善行の深浅によって二つに分かれる。『観無量寿経』に、未来の世の一切衆生のために、煩悩に苦しめられている者のために、諸の浄業を説くと言われていることから知られよう。問う。それならばなぜ『観無量寿経』に、極楽に生まれてすぐに無生法忍を得るとか、三劫を経て百法明門を得るなどと言われるのか。答え。『菩薩瓔珞本業経』（巻下、『大正蔵』二四、一〇一三頁下）には、十解の初発心住で無生忍を得ると説かれる。また（同巻下、『大正蔵』二四、一〇一一頁下）、初発心住に得る十信にそれぞれ十心が備わる。いはゆる十信・十精進・十念・十定・十恵・十願・十戒・十護法・十不退・十回向である。よって十十の百法明門を得るのであると言う。また『大集経』（巻三十一、『大正蔵』一三、二一四頁上）には、その時、大衆中の十住の菩薩等が釈尊に対して、我らはすでに無生法忍を得、如来の十八不共の法を行ずることができますと言ったと説かれている。問う。上品中生人が極楽に生まれて、わずか七日で不退を得ると説かれるのはなぜか。答え。一口に不退と言っても、念不退・行不退・位不退・根不退・地不退等の十種がある。よって一様ではない。煖・頂・忍の三を中品上生人とする。七方便の中の三賢位（五停心観・別相念住・総相念住）を中品中生人とする。七方便に入る前を中品下生人とする〉と。

第八にある師が言う。〈十信の末心を上品上生人とし、十信の初・中を上品中生人とし、十信に入る前の凡夫で、ただ菩提心を発して、深く因果を信ずる等の者を上品下生人とする。十信の末心を上品上生人とする理由は、『菩薩瓔珞本業経』に、十住の初心に無生忍を得ると説かれるからである。『観無量寿経』上品上生段には、極楽に生まれてすぐに無生忍を得ると言う。よって彼が十信の末心であることは明白である。また、十信の初・中の二位を上品中生人とする理由は、『観無量寿経』上品中生段に、第一義に心が定まり動ずることがないと説かれるからである。十信に入る前の凡夫は、そのような心の状態になることは不可能だからである。また経に、七日を経て不退を得ると言うのは、やはり不退に多種あるからである。第七師の説と同様である。十信に入る前を上品下生とする。その理由は理解できよう。もし十信に入る前の、菩提心を発して、諸悪を造らない凡夫人をこ

こに摂めなければ、このような凡夫人は、九品の中のどこに摂まると言うのか。中輩はどうかというと、この人はすでに菩提心を発しているので、中輩には摂まらない。下輩はどうかというと、この人はすでに大乗心を発して、戒を持ち諸悪を造らないのであるから、下輩にも摂まらない。もし九品のどこにも摂まらないと言うのならば、一体どういう理由で摂まらないのか。よって上品下生に摂めるしかないのである。以上のようなことから、十行以上を三輩に配当するという諸先学の説には賛同できない。問う。それならばなぜ、『観無量寿経』に、百法明門を得て歓喜地に住すと説かれるのか。答え。これは十住の初心に百法門を得た時に、不退位に入り、人空観をなして心に歓喜を生ずることを言うのである。だから歓喜位に住すと言えるのである。地と言うのは、位と地とを同じ意味で用いるからである。ほかの所でも同意に用いられている。中輩の三人は、みな種解脱分（三賢位）の善根を行う人である。三品人の行位を判別することはできない。戒を保つ日時の長短によって中品上生・中生を分け、戒を保つことなくただ世間の善を修する者を中品下生とするのみである。極楽に生まれた後、果を得るまでの時間に、遅疾の差別がある）と。第七・第八の二師の説が、末世に相応しい教説だと言えよう」と。

(309) 平等覚経下に云う（巻三、『大正蔵』一二、二九一頁下～二九二頁下）、「仏が阿逸菩薩に告げられた。〈世間の善男善女で、無量清浄仏国に往生を願う者に、三輩の差別がある。その最上の第一輩とは、出家して沙門となり、菩薩道を修し、経・戒を保ち、慈心をもって精進し、女人と交わらず、斎戒清浄にして、ひたすら無量清浄仏国への往生を願い続ける人である。そのような人は、今生において睡眠の中で無量清浄仏および諸菩薩・阿羅漢を見、命終の時には無量清浄仏および諸菩薩・阿羅漢に迎えられて、即座に無量清浄仏国に往生し、七宝池の蓮華中に化生する。やがて不退転の菩薩となって、諸菩薩と共に八方上下の無数の仏を供養し、教えを聞いて歓喜する。常に無量清浄仏の側近くに住することができる。

第二の中輩とは、出家はしないが、経・戒を保ち、布施を行い、仏の教えを信受し、沙門を供養し、寺・塔を造り、焼香・散華し、灯明や荘厳具を捧げる人である。そのような人が、斎戒清浄を保ち、我欲を断って、一日一夜の間、無量清浄仏国への往生を願い続けるならば、今生において睡眠の中で無量清浄仏を見、命終の時には仏が化仏および国土を見せてくださり、無量清浄仏国に往生して、智慧を得ることができる。

ところが、そのような行いをしながら、途中で心に疑惑を生じて、善によって福徳を得られることが信じられず、無量清浄仏国のあることが信じられず、そこに往生することが信じられなくなる者がいる。信と不信とが入り交じって専一の心がない。それでも往生を願う心が実を結べば、やがて往生することができるだろう。そのような者が命終わる時には、無量清浄仏が化身を示現する。彼は心に歓喜を生じて、非を悔いて往生を願うだろう。悔過によって罪は少しだけ減ぜられるが、未だ不十分であるために、命終わって往生を得ても、無量清浄仏の所に至ることはできない。仏国の辺地に建つ七宝の城を見て歓喜し、五百年の間そこに留まるのである。極めて快適な場所ではあるが、そこから出ることはできず、仏に遇うこともできない。ただ仏の光明を見て、心に歓喜を得るのみである。また経を聞くことも、聖衆を見ることもできない。仏がそうし向けたのではない。彼が自ら陥ったのである。仏の教えを疑ったのであるから、本来は悪道に堕ちるべきところを、仏が哀れんでこの城を用意してくださったのである。五百年間滞在して、その城を出、無量清浄仏の所に往き、教えを聞いても理解できず、またその城に戻る。そのようなことを繰り返し、長い時間を経て智慧を得、ようやく第一輩の人と同じようになるのである。それはみな疑惑の心を起こしたことによるのである。

第三輩とは、布施を行なったり、焼香・散華したり、灯明や荘厳具を捧げたり、仏寺を造ったり、沙門を供養するなどのことはできないような人である。それでも愛欲を断じ、斎戒清浄を保ち、十日の間、一心に無量清浄仏国に生まれたいと願い続ければ、命終の後即座に無量清浄仏国に往生して、智慧を得ることができる。

ところが、そのような行いをしながら、途中で心に疑惑を生じて、善によって福徳を得られることが信じられず、無量清浄仏国に往生することが信じられなくなる者がいる。それでもやがては往生することができるだろう。そのような者が命終わる時には、無量清浄仏が夢の中で無量清浄仏国を示現してくださる。彼は心に歓喜を生じて、非を悔いて往生を願うだろう。悔過によって罪は少しだけ減ぜられるが、未だ不十分であるために、命終わって往生を得ても、無量清浄仏の所に至ることはできない。途中に建つ二千里の七宝の城を見て歓喜し、五百年の間そこに留まるのである。五百年間の後その城を出、無量清浄仏の所に往き、教えを聞いてもなかなか理解できない。第二輩の疑惑人と同様である。その後長い時間を経て智慧を得、ようやく第一輩の人と同じようになるのである。それはみな疑惑の心を起こしたことによるのである」（要約）と。

(310) 無量寿論釈第三に云ふ（智光『無量寿経論釈』巻三、古逸）、「また次に彼に生ずる利益を明かさば、上品上生は、すなはち彼に生じをはりて、仏を見、法を聞き、無生忍を悟り、諸仏を歴事し、次第に授記せられ、百千陀羅尼を得。上品中生は、七日を経をはりて、不退転を得、一小劫を経て、無生忍を得。上品下生は、三七日の後、仏の説法を聞き、三小劫を経て、歓喜地に住す。中品上生は、彼土に生じをはりて、蓮華尋いで開き、四諦を讃ずるを聞き、すなはち羅漢を得。中品中生は、法を聞いて歓喜し、須陀洹を得、半劫

を経をはりて阿羅漢を成ず。中品下生は、七日を経て、法を聞いて歓喜し、一小劫を経て、阿羅漢道を成ず。下品上生は、法を聞いて信解し、無上心を発し、十小劫を経て、初地に入るを得。下品中生は、甚深の経典を説くを聞き、すなはち無上道心を発す。下品下生は、実相、滅罪の法を説くを聞きをはりて歓喜し、菩提の心を発す。阿羅漢の功は初地と斉しきをもって、同体異名なり。義に准じてまさに知るべし、それ発心は、十信の初心の時にあることを。必ずしも彼の種性発心位の中にあらず。自余の諸義も思に准じてまさに解すべし」と。

【現代語訳】智光『無量寿経論釈』巻三に云う、「次に往生極楽の利益を明かそう。上品上生人は、即座に往生して仏を見、法を聞き、無生忍を悟り、諸仏を巡拝して、それぞれに成仏の印可を授けられ、百千の陀羅尼の教えを得る。上品中生人は、往生から七日を経て不退転を得、さらに一小劫を経て無生忍を悟る。上品下生人は、往生から三七日の後、仏の説法を聞き、さらに三小劫を経て、歓喜地に至る。中品上生人は、往生とともに蓮華が開き、四諦を讃嘆する説法を聞いて即座に阿羅漢の悟りを得る。中品中生人は、法を聞いて歓喜し、須陀洹の悟りを得、さらに半劫を経て阿羅漢の悟りを得る。中品下生人は、往生から七日を経て、法を聞いて歓喜し、さらに一小劫を経て阿羅漢の悟りを得る。下品上生は、法を聞いて信解して無上菩提心を発し、さらに十小劫を経て初地に至る。下品中生人は、大乗経典の教えを聞き、即座に無上菩提心を発す。下品下生人は、諸法実相、滅罪法を聞いて歓喜し、菩提心を発す。阿羅漢の功徳は初地の菩薩のそれと斉しいので、悟りの程度は同じと考えてよい。ここに説かれる発菩提心が、十信の初心におけるものであることは、道理として明白である。菩提心は初住位で発すものとは限らない。そのほかのことも同じように理解せよ」と。

安養集巻第四

右は宝園院本をもってこれを書写せしむるものなり

明暦二丙申歳八月吉日　　江州栗太郡芦浦観音寺舜興蔵　印

【考察】

前項「46 九品往生階級」と本項「47 三輩九品階位」には、『無量寿経』三輩往生段、『観無量寿経』三輩九品往生段に登場する往生人の行位を論じた要文が集められている。前項に述べたように、なぜ二項に分けられたのか判然としない。巻一の「4 率極楽優劣難易」「5 兜率極楽相対」と同様、編集の最終段階で一項目にまとめられるべきところ、その作業が完了しなかったためと思われる。以下、前項所掲の二文と、本項所掲の十一文の意義について、まとめて考察したい。

比叡山において、三輩九品往生人の行位を論じた最初の文献は良源の『九品往生義』である。『観無量寿経』九品往生段を註釈した書なので、九品の行位に関する議論は随所に見えるが、特筆すべき記述を二点紹介したい。

第一に、上品上生釈（『仏全』二四、二三〇頁下、二三六頁上）に、上品上生人は三心を具足するので、道種姓すなわち十回向の菩薩であると言い、往生の後即座に悟る無生法忍の位を別教の初地と見ている。

第二に、上品下生釈（同、二三八頁下～二三九頁上）に、義寂『無量寿経述義記』の説を批判している所がある。義寂は、上品下生人を十信位と判ずる。それは、三小劫を経て百法明門を得て歓喜地に住すると説かれる、その行位を初住と判じたためである。歓喜地に住すというのは、歓喜地を証するのではなく、歓喜地の境地を味わうことであり、それは初住位で体験できることだと言うのである。それに対して良源は、天台では歓喜地は別教では初地、円教では初住であるが、今は別教の立場で理解すべきであると述べている。

以上のことから良源は、『観無量寿経』の上品人を、往生によって別教の初地に至ることを目指す者と見ていることがわかる。

次いで『往生要集』がこの問題を取り上げている。大文第十「問答料簡」の第二「往生階位」である。そこに設けられた十三番の問答の中、三輩九品の行位に関する議論が展開されているのは、第四から第八問答である。

第四問答では、極楽に往生した者はみな不退転の菩薩だと説かれるので、極楽は凡夫の往生する処ではないのではないかという問いが発せられ、答えて、不退転には多義があると言い、「四不退」を説く『西方要決』（『大正蔵』四七、一〇七頁上～中）の文を挙げている。四不退とは、位不退・行不退・念不退・処不退を言い、位不退は輪回を脱した位、行不退は初地、念不退は第八地で得られる境地であるが、処不退は天上界においても得ることのできる、程度の低い不退であると言う。源信は、極楽で得られる不退転の位は、凡聖に通じていると考えていたことがうかがわれる。

第五問答では、三輩九品往生人の行位を判ずる諸説を列挙して、我らはどれに当たるのかと問いを発し、答えて、下品人あるいは十信以前の凡夫であると言う。列挙された諸説の典拠として諸先学は、浄影寺慧遠『観経義疏』末（『大正蔵』三七、一八二頁上～中）、懐感『群疑論』巻六（『大正蔵』四七、六七頁下）、龍興『観経記』巻下（古逸、前掲恵谷隆戒『浄土教の新研究』付録「唐竜興撰観無量寿経記の復元について」三八〇～三八二

頁、本項所引（308）等を指摘している。ただし源信が採用するのは、善導『観経疏』玄義分（『大正蔵』三七、二四七頁下～二四九頁中）に提示された、九品のすべてを凡夫位とする見解である。『往生要集』の中、善導『観経疏』への言及はここ一箇所のみで、源信が『観経疏』の本文を見ていたかどうかは疑わしいと言われる。しかし『観経疏』はすでに八世紀の南都に伝わっており、源信がその内容について何らかの情報を得、一定の理解をしていたことは確かである。

第六・第七問答では、往生の後、無生法忍を得るまでの時間について論じている。第六問答では、極楽は凡夫を無生法忍へと導く世界であることが強調され、第七問答では、経に説かれる無生法忍を得るまでの時間は、必ずしも厳密ではないと言う。

源信は、三輩九品往生人の行位について、浄影以来の諸説を踏まえて議論を展開しているが、特に不退転と無生法忍の行位に注目していること、九品の行位を良源よりも低く設定しようとしていることなどが知られる。

以上のような議論を承けて、『安養集』はここに「46 九品往生階級」「47 三輩九品階位」の二論題を立てているのである。

「46 九品往生階級」の項には、二文が挙げられている。

（298）智光『無量寿経論釈』巻三は、まず異説として三説を挙げる。第一に上品上生を三・四地とする、浄影に近い見解、第二に上品上生を十信～十回向と見る説、第三に『起信論』を用いて上品上生を初住と見る説である。それらを否定して智光は、上品上生を十回向、上品中生人を十住・十行、上品下生を十信とし、中品上生は前三果、中品中生は七方便、中品下生は世善の凡夫であるとし、下品三生は罪悪の凡夫であると言う。ここに見える異説の中、第二の『起信論』を用いた見解は、良源『九品往生義』に取り上げられ、「浄土論智光疏に云ふ」と、智光の説として引用されている（『仏全』二四、二三〇頁上）。『安養集』は、それが実は智光の否定した説であることを指摘する意図をもって、ここにこの文を掲げたのであろう。

（299）『群疑論』巻六は、諸説を分類整理するのみで、自分の見解は提示していない。まず大雑把な見解として、九品すべてを十信とする説、菩提心の大・小・無で三輩が分かれるとする説を挙げる。次に詳細な見解を列挙する。上輩については、上品上生を四・五・六地とする浄影の見解以下六つの説を挙げ、これらは無生法忍の行位をどこに設定するかによって立場が分かれると言う。次いで中輩について三つの見解を挙げ、持戒の浅深によって行位が想定されていると言い、下輩は罪の軽重によって三分されると言う。この文に列挙された諸説の中には、『往生要集』「往生階位」第五問答に挙げられた説に一致するものが多く、源信も自ら懐感の説を参照したと註記している。『安養集』はその出拠をここに指摘したのである。

「47 三輩九品階位」の項には、十一文が列挙されている。

（300）迦才『浄土論』巻上は、無生法忍の境地に浅深のあることを述べ、また『観無量寿経』上品上生所説の三心と『起信論』の三心とを対応させて、浄影の九品行位説の修正を試みた文である。無生法忍や『起信論』の三心から上品人の行位を求める議論は、隋唐以来頻出し、良源や源信も注目している。ことに『起信論』を用いた論説は、（298）智光『無量寿経論釈』に見え、それを良源『九品往生義』が誤って引用したことはすでに述べた通りである。『安養集』はそれら議論の源流の一つとして本文を掲げたと言えよう。

（301）善導『観経疏』玄義分は、浄影をはじめとする諸師の説を否定し、九品唯凡を説く文で、既述の通り源信が採用した見解である。源信はその原文を見ていなかったと推察される。『安養集』は、ここにその全貌を提示したのである。

（302）天台『観経疏』は、上品人を解行位あるいは道種位と見る立場で、後者の立場が良源『九品往生義』に採用されている。『往生要集』には言及されていないが、天台宗における論義の資料としては不可欠の文であろう。

（303）浄影『観経義疏』は、九品行位説の発端であり、以降この文がこの議論の基準となる。源信も『往生要集』「往生階位」第五問答の冒頭に略抄している。論義の場では最も重要な文である。

（304）善導『観経疏』散善義は、（301）玄義分の内容を要約した記述で、九品唯凡説が簡略に述べられている。（301）と同様、源信が採用した見解の出拠である。

（305）道綽『観経疏』巻下は、唯識学の立場で九品行位を論じている。良源や源信は言及しなかった説であるが、浄影説の修正を試みた論説の一つとして掲げられたものと思われる。

（306）憬興『無量寿経連義述文賛』巻下は、上品上生人を十信位と見る立場で、九品行位を低く判じた説の一つである。良源・源信ともに、憬興の九品行位説を直接引用することはない。しかし両者とも、『無量寿経連義述文賛』の見解には注目しており、良源は三法忍の行位を論ずるところに憬興の説を引用し（『仏全』二四、二四三頁上～下）、その議論は『往生要集』「往生階位」の第五問答において、無生法忍の行位を論ずる際に取り上げられている。また源信は、上品上生を十信位と見る説を挙げ、それを高く評価している。『安養集』はその説の出拠として、ここにこの文を掲げたものと思われる。

（307）義寂『無量寿経述義記』巻中は、『無量寿経』の上輩人を十解（十住）以上、中輩人を十信位、下輩人を十信の初心とし、『観無量寿経』九品については、上品上生人を四地以上とする浄影説、十回向位とする説、十信位と見る説を挙げてそのすべてを否定し、

私見として、上品上生人を十住の前六住、上品中・下生人を十信位、中品上生人を小乗の前三果、中品中生人を順決択分（四善根位）、中品下生人を順解脱分（三賢位）とし、下品人は悪業の軽重によって三分されるという見解を提示している。良源『九品往生義』には、その一部が引用されている（『仏全』二四、二三八頁下）。源信は直接引用してはいないが、「往生階位」第五問答に列挙する諸説の中に近似のものがある。『安養集』には、それらの出拠を指摘する意図があったのであろう。

（308）龍興『観経記』巻下には、浄影の説、力法師の説（上品上生を十行・十回向、上品中生を十住、上品下生を十信と見る）、基法師の説（上品上生を十回向、上品中生を十住・十行、上品下生を十信と見る）以下、合計八師の説を列挙する。その中、第七・第八師の説は、上品上生人を十信位とするもので、龍興はその二説を妥当であると言う。良源は龍興には言及していない。源信は、「往生階位」第五問答に、遠法師・力法師・基法師等の説を列挙し、末尾に龍興の記を見よと註記している。『安養集』はその指示に従って、源信の論述の典拠をここに提示しているのである。

（309）『平等覚経』巻三は、三輩段の文である。『平等覚経』は、中・下輩の中に疑惑胎生人のことを説いている。『無量寿経』は胎化得失を別に説いて、三輩の中には疑惑人を含めない。また『観無量寿経』には、下品人は往生の後、蓮華の中に久しく留め置かれると説かれる。それらの経説に関する議論は、すでに良源『九品往生義』（『仏全』二四、二五八頁下～二五九頁下）に見え、源信も大文第十「問答料簡」の第一「極楽依正」の第八問答に取り上げている。それを承けて『安養集』は、巻七に「66 四生分別」という論題を設けて要文を集めている。そこでは『平等覚経』の文は挙げられていない。本文は、本来そこに掲げられるべき文であろう。

（310）智光『無量寿経論釈』巻三は、九品段の概要を述べた後、そこに説かれる発菩提心が、初住位ではなく十信位で発せられるものであると述べている。『安養集』は、すでに前項（298）に、智光の九品行位についての論説を挙げているが、それに加えて、九品の行位を低く判ずる見解の一つとして、ここにこの文を付け加えたのであろう。

以上の二論題の十三文は、『九品往生義』『往生要集』の議論を継承し、特に源信の意図を汲んで収集されたものと言える。

以上で『安養集』巻四が終わる。奥書は各巻共通である。

安養集第五　南泉房大納言、延暦寺の阿闍梨数十人と集む

48　去此遠近

（311）観無量寿経に云う（『大正蔵』一二、三四一頁下）、「阿弥陀仏はここから遠くない所にいらっしゃる」と。

（312）同経疏天台に云う（『大正蔵』三七、一九一頁中）、「ここから遠くないと説かれているが、安養国はここから十万億の仏土を隔てた所だとも言う。なぜ遠くないと説かれるのか。思うに、仏力によって、見たいと思う者には即座に見せることができるからである。また光明の中に国土を示現し、仏頂に顕現させることができるからである。それがあっという間のことだから、遠くないと説かれるのだろう」（要約）と。

（313）同疏顕要記下に云ふ源清（古逸）、「小経および大本のごときは、みな十万億と云ふ。今、不遠と云ふに、二解ありとは、一に云ふ、仏力をもってとは、すなはち釈迦力なり。また慈善根力と感応道交してよく直見せしめ、遠を見ておのずから通ずるがゆゑに遠からずと言ふ。下の経に、〈わがごときは、今仏力をもってのゆゑに彼国等を見る〉と云ふがごとし。光中の所現にはあらず。二に云ふ、光中に現じて仏力（ママ）（力＝頂？）に示顕す。光中に現じて提希をして見せしめ、一念によく縁ずるがゆゑに遠からずと言ふ。或は謂く、一念によく縁ずるは仏にありと。今謂く、謬なり。仏においてなればすなはち遠延（ママ）（延＝近？）にあらず。あに縁を待（ママ）（待＝恃？）んで韋提をして繫念諦観せしめん」と。

【現代語訳】源清『観経疏顕要記』巻下に云う、「『阿弥陀経』『無量寿経』には十万億土を隔てると説かれ、『観無量寿経』には遠くないと言う。これについて二つの見解を挙げている。第一に、仏力によるとは、釈尊の力を指す。また仏力が衆生の慈善の根力と感応道交して、浄土を直に見せ、遠くを見ていても心が通じているから、遠くないと言うのである。『観無量寿経』において、後に韋提希が、〈私は今、仏の力によって彼の国土を見ることができました〉と言っている通りである。光の中に現されたものではない。第二には、仏が眉間白毫より光を放ち、仏頂に示現されたことを言う。光の中に示現して韋提希に見せ、あっという間に縁ずることができるから、遠くないと言うのである。一説には、あっという間に縁ずるのは仏の側からの働きかけであると言うが、それは間違いである。仏には遠近の観念はなく、また韋提希に浄土を諦観させるのに縁を恃む必要などないからである」と。

（314）同経義疏恵遠に云う（『大正蔵』三七、一七八頁中）、「阿弥陀仏はここから遠くない

所にいらっしゃるとは、十万億土を遠くないと言うのである」と。

(315) 同経序分義に云う善導（『大正蔵』三七、二五九頁上）、「阿弥陀仏は遠くないとは、観念の境地を明かし、そこに心に集中せよと説くのである。三段よりなる。第一に、浄土までの距離が遠くないことを言う。十万億仏土を過ぎると阿弥陀仏の国に到達できるということである。第二に、距離は遠いけれどもあっという間に到達できることを言う。第三に、韋提希や我らが心を傾けて観念すれば、おのずから現れ、常に見ることができることを言う。だから遠くないと言うのである」（要約）と。

(316) 同経疏上に云ふ闇（道闇『観経疏』巻上、古逸）、「〈阿弥陀仏はここを去ること遠からず〉とは、ここを去ること十万億仏刹なるをもってのゆゑに。二に、実に就いて遠からざることを明かす。十方浄土は、穢に即して浄を弁すること、自心と異ならざるをもってのゆゑに。舎利弗は二乗人なれば、丘陵処の螺髪梵王を見、初地已上の菩薩は自在のごとくなるを見る」と。

【現代語訳】道闇『観経疏』巻上に云う、「〈阿弥陀仏はここから遠くない所にいらっしゃる〉とは、第一に、ここから十万億仏土の所であることを言う。第二に、実感として遠くないと言う。十方浄土の様子は、穢になぞらえて浄が説かれる。それは行者が自分の心を観ずることにほかならないからである。小乗の行者である舎利弗が、丘の上に螺髪のバラモンがいると見ているようなことが、初地以上の菩薩の目をもってすれば、自在の境地を見ることができるのである」と。

(317) 同経記上興に云ふ（龍興『観経記』巻上、古逸）、「〈遠からず〉と言ふは、弥陀経の中には、〈十万億を過ぐ〉といひ、称讃経の中には、〈百千倶胝那庾多を過ぐ〉といふ。しかるに処は遠しといへども、作因は易性にして、弾指の頃のごとし。余の経は処に約し、この経は因に約するがゆゑに、相違せず。彼の二経の処里同じからざるは、未だ知らずいずれが正なるか。見聞同じからず。問ふ。処はすでに遠長にして無量の極微訖訖（ママ）。一刹那にすべからく一極微を過ぐるべし。因力は疾なりといへども、弾指にいずれに至る。答ふ。論に云ふ、八地の菩薩は心疾通なれば、一念の頃に万仏界に至ると。論の中にあるもの云ふ、疾なること神通力に勝ると。いはんや浄土に生ずるをや。強業中に多極微を過ぐること、何ぞさらに疑はんや。なほ利鈍の二刀糸を断ずるがごとし。彼に執するべからず。常法の相に任せては、業力に勝ること難し」と。

【現代語訳】龍興『観経記』巻上に云う、「『観無量寿経』には、〈遠くない〉と説くが、『阿弥陀経』には、〈十万億を過ぎる〉と説かれ、『称讃浄土経』には、〈百千倶胝那庾多を過ぎる〉と説かれる。距離は遠いけれども、往生の因は易しいので、あっという間に往くことができるということである。『阿弥陀経』『称讃浄土経』は距離のことを言い、『観無量寿経』は修因を考慮して説いているので、矛盾はない。ただし『阿弥陀経』と『称讃浄土経』の記述が異なっていることについては、どちらが正しいのはわからない。諸説あるようである。

問う。距離が遠いことは確かで、無限の極微を隔てた処である。一刹那に一極微を行くということを考えると、いかに修因の力がすぐれていようとも、弾指の間にどれほどの距離を行くことができると言うのか。答え。『論』（不詳）に、八地の菩薩の心は速疾に馳せるので、一念の間に万の仏国に行きわたると言う。また一説には、菩薩が心を馳せる速さは神通力に勝るとも言う。まして往生浄土の際には言うまでもない。修因の力が強ければ、一刹那に多くの極微を行けることには、疑いの余地がない。利・鈍の二刀をもって糸を切るようなものである。鈍刀のごとき教説に執着してはならない。通常の教えによっては、我らの罪業に打ち勝つことは困難である」と。

(318) 阿弥陀経に云う（『大正蔵』一二、三四六頁下）、「ここから西方、十万億の仏土を過ぎて、極楽という世界がある」と。『浄土論』中巻（『大正蔵』四七、九三頁中）所引の『称揚功徳経』これに同じ。

(319) 同経疏慈恩基師（『大正蔵』三七、三一九頁上）、「経の、〈過十万億仏土〉とは、次に第二に遠近を判定する。『観音授記経』には、〈過百千仏刹〉と言い、『平等覚経』には、〈過千億万須弥山仏国〉、『無量寿経』には、〈去此十万億刹〉と言う。言葉は異なるが大体同じである。『菩薩処胎経』には、〈ここから西方、十二万億那由他の所に懈慢国という世界がある。その快楽に溺れると、極楽を目指す心が失せてしまう。決してそこに留まってはならない〉と言う」（要約）と。

(320) 同経疏に云ふ（著者不明『阿弥陀経疏』、古逸）、「〈十万億仏土を過ぎて世界あり〉とは、遠近を示すなり。遠にまた遠近あり、近にも遠近あって、定義門なし。東西もまたおなじ。情、風雲を異にすればすなはち彼此隔てなし。心、水乳を同じくすればすなはち浄穢越えず。いやしくもよく心を十六種観に宅し、専ら三福の行業を行ずれば、恒沙の仏土も、なほ申手の間にあるがごとし。十万億刹を誰か長遠の路と曰はんや。唐本に、〈過百千倶胝那由多仏土〉と云ふは、これ翻者同じからざればなり」と。

【現代語訳】著者不明『阿弥陀経疏』に云う、「〈十万億仏土を過ぎて世界あり〉とは、遠近を示す。遠にまた遠近があり、近にもまた遠近があって、定まった基準はない。東西も同じである。心は風と雲とを別のものと認識するけれども、実は別のものではないのであり、心は水と乳とを同じものと認識するけれども、それは浄穢を区別できないのである。十六観に心を傾けて、三福の修行に専念するほどの者ならば、無量の仏土も手の中にあるようなものだろう。十万億刹が遠いとは言えない。唐訳『称讃浄土経』に、〈過百千倶胝

那由多仏土〉とあるのは、翻訳者が異なるからである」と。

(321) 称讃浄土経に云う（『大正蔵』一二、三四八頁下）、「ここから西方、百千倶胝那庾多の仏土を過ぎた所に、極楽という仏の世界がある」（要約）と。

(322) 同疏靖邁に云う（靖邁『称讃浄土経疏』、古逸）、「〈於是西方〉の下は、方に約してその里を定む。故三。〈有仏世界〉の下は、主に約して世界の名を弁ず。倶胝は唐には億なり」と。

【現代語訳】靖邁『称讃浄土経疏』に云う、「〈於是西方〉の下は、方角に着眼してその距離を定める。〈有仏世界〉の下は、仏に着眼して世界の名を言う。倶胝は中国語では億である」と。

(323) 無量寿経上に云う（『大正蔵』一二、二七〇頁上）、「法蔵菩薩はすでに成仏して、西方にまします。ここから十万億仏土を過ぎた安楽という世界である」（要約）と。

(324) 同経述義記中に云ふ寂法師（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「〈西方去此十万億刹〉とは、所在の方を顕す。〈成仏已来凡歴十劫〉とは、久近を顕すなり。清浄覚経に云ふ、〈無量清浄仏は、作仏已来おほよそ十八劫なり。所居の国土は、須摩提と名づく。正に西方にあり。この閻浮刹地界を去ること、千億万須弥山仏国なり〉と。阿弥陀経に云ふ、〈阿弥陀仏は、作仏已来おほよそ十小劫なり。所居の国土は、須摩提と名づく。正に西方にあり。この閻浮地界を去ること、千億万須弥山仏国なり〉と。彼の二経を案ずるに、成仏の久近はすなはち異なり、指方遐邇はすなはち同じ。或は謂く、八の字はまさに誤なるべし。余の文にはみな多く、十劫と云ふがゆゑに。未だ梵本を勘へざれば、敢へてすなはち定めず。遠近を顕す中に千億万といふは、謂く、千億の万に至る。これは一四天下の国土に就て説く。文に須弥山仏国と云ふがゆゑに。此の経に十万億と云ふは、謂く、億の十万に至る。此に億と言ふは、まさにこれ千万を億となすべし。すなはち倶胝の数に当たる。旧経論の中に、倶胝の数は多く翻じて億となす。三千大千世界のごときは、旧経には百億と云ひ、新訳には百倶胝と云ふ。ゆゑに知んぬ、此の億はすなはち倶胝に当たることを。落叉にあらざるなり。もし十万を億となさば、まさに億億と云ふべし。いかんが十万億と云ふ。観音授記経に云ふ、〈億百千とは、またこれ十万億なり〉と。何のゆゑにこの経は旧本と同じからざるかとなれば、億の数の中に、多少同じからざるをもってなり。或は十万をもって一億となし、或は百万をもって一億となし、或は千万をもって一億となす。言ふところの千億万とは、十万に依って一億となすなり。千億なるはすなはちこれ一亥なり。この亥の万に至るは、すなはちこれ十那由他なり。十万億と言ふは、千万に依って一億となすなり。すなはちこれ一経なり。万億はすなはちこれ一那由他なり。十万億はすなはちこれ十那由他なり。しかればすなはちこの瞻部州を去りて、安楽界に至るまで、十那由他の須弥山を過ぐるなり。一の三千大千界の中に、百倶胝の須弥山あり。十那由他の須弥山なれば、すなはちこれ十万三千界なり。称讃経に、〈この世界を去ること、百千倶胝那庾多仏土を過ぐ〉と言ふは、千倶胝となす。旧経と同じ。那庾多の言は、旧の諸本になし。一会すべからず」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「経の、〈西方去此十万億刹〉は、極楽の場所方角を明かし、〈成仏已来凡歴十劫〉は、時間の長短を明かす。『平等覚経』に、〈無量清浄仏は、仏となられてから約十八劫である。まします国土は須摩提と呼び、真西にある。この娑婆世界から千億万の須弥山仏国を隔てた所である〉と言い、『大阿弥陀経』には、〈阿弥陀仏は、仏となられてから約十小劫である。まします国土は須摩提と呼び、真西にある。この娑婆世界から千億万の須弥山仏国を隔てた所である〉と言う。二経を較べると、成仏からの時間が異なり、方角や遠近は同じである。一説には、八の字が誤りであろうと言う。他の経文にはみな十劫と説かれているからである。ただし梵本を見ていないので、ここでは断定しない。遠近を説く中に千億万とあるのは、千億の一万倍のことである。ここには一世界の幾つ分かということを説いている。経文に、須弥山仏国と言っている通りである。

『無量寿経』に十万億と言うのは、億の十万倍の意である。ここで億と言ふのは、一千万のことである。倶胝と同意である。旧経論では、倶胝は億と翻訳される。たとえば三千大千世界は、旧経では百億の世界を言い、新訳では百倶胝の世界であると言う。よって億と倶胝は同意である。落叉すなわち十万のことではなし。もし十万を億とするならば、億億と言わなければならない。どうして十万億と言うのかを考えてみよう。『観音授記経』に、〈億百千とは、十万億のことである〉と言う。なぜこの経が旧本と異なるのかと言うと、億の数え方に諸説あるからである。十万を一億としたり、百万を一億、あるいは千万を一億としたりする。千億万と言うのは、十万を一億とするのである。すると千億は一亥に当たる。その一亥を一万倍すれば十那由他となる。十万億と言いうのは、千万を一億とするのである。すると十万億は一経（けい）に当たり、万億は一那由他に当たる。よって十万億は十那由他である。そうすると、この娑婆世界から安楽世界までは、十那由他の須弥山仏国を隔てているということになる。一つの三千大千世界の中に、百倶胝の須弥山世界がある。十那由他の須弥山世界は、十万三千世界に当たる。『称讃浄土経』に、〈この世界から百千倶胝那庾多仏土を隔てている〉と言うのは、千倶胝に当たり、旧経と同じになる。那庾多という言葉は旧経諸本にないので、会通できない」と。

(325) 同経連義述文賛中に云う璟興（ママ）（憬興、『大正蔵』三七、一五五頁上）、「経の、〈西方去此〉より〈名曰安楽〉までは、第二に、変化土であることを掲げている。旧訳には、仏国

土を須摩題と言い、ここから真西に千億万須弥山仏国を隔てた所にあると説かれる。この経には十万億刹と説かれる、その矛盾についてはすでに釈した通りである」（要約）と。

(326) 無量寿論釈第二智光に云ふ（智光『無量寿経論釈』巻二、古逸）、「この経に説くがごとし、〈仏阿難に告ぐ、法蔵菩薩は今成仏して現に西方にあり。ここを去ること十万億刹なり。その仏の世界を名づけて安楽と曰ふ〉と。乃至 また契経に言ふ、〈その時世尊、舎利子に告ぐ、汝今知るやいなや、ここより西方、この世界を去ること百千倶胝那庾多仏土を過ぎて仏の世界あり、名づけて極楽と曰ふ〉と。乃至 倶胝と言ふは、ここには億となすなり。那庾多は、これはこれ数の名なり。此間の欸数に当たるなり。世俗の言のごときは、十千を万と曰ひ、十万を億と曰ひ、十億を兆と曰ひ、十兆を経と曰ひ、十経を欸と名づく。欸はなほこれ千倶胝すなはち十万億なり。十万を一と為して億数に至る。億に四の位あり。一には十万、二には百万、三には千万、四には万万なり。今、億と言ふは、すなはちこれ万万なり。この義を顕はさんがために、那庾多を挙ぐ」と。

【現代語訳】智光『無量寿経論釈』巻二に云う、「この『無量寿経』には、〈仏が阿難に告げられた、法蔵菩薩は今成仏して現に西方にまします。ここから十万億刹を隔てた所である。その仏の世界を安楽と言う〉と言う。…中略… また契経（『称讃浄土経』、『大正蔵』一二、三四八頁下）に、〈その時世尊が舎利子に告げられた、あなたは知っているか、ここから西方、百千倶胝那庾多仏土を隔てた所に仏の世界がある。極楽と言う〉と説かれる。…中略… 倶胝とは、億の意である。那庾多も数の単位で、欸に当たる。通常は、十千を万、十万を億、十億を兆、十兆を経、十経を欸と言う。欸は千倶胝つまり十万億に当たる。十万の一億倍ということである。億には四つの位がある。一には十万、二には百万、三には千万、四には万万である。ここで億と言うのは、万万のことである。このことを明確にするために、那庾多という言葉を用いるのである」と。

(327) 群疑論第六懐感に云う（『大正蔵』四七、六五頁下～六六頁上）、「問う。『称讃浄土経』には、極楽は百千倶胝那庾多の仏土を隔てた所にあると説かれ、『観無量寿経』には、ここから遠くない所にあると言う、この相違について教えてほしい。答え。思うに、極楽は百千倶胝那庾多の仏土を隔てた所にある、とても遠い世界である。『観無量寿経』に遠からずと説かれるについては、特別の理由が十種ばかりある。第一に、仏力によって極楽世界を見ることができるから、遠からずと説かれる。第二には、特別の方法（十三観あるいは十六観）を説いて韋提希に見せられたから。第三には、阿弥陀仏が空中に応現住立されるから。第四には、行者が仏を想うと、仏が心に現れてくださるから。第五には、仏が守護してくださるから。第六には、有縁の衆生はみな見ることができるから。第七には、本願力によって想念を成就してくださるから。第八には、来迎してくださるから。第九には、あっという間に往生できるから。第十には、行者が怠け心を起こさなければ、仏が近くに寄り添ってくださるからである。以上の十義によって、遠からずと説かれるのである」（要約）と。

(328) 平等覚経上に云う（巻一、『大正蔵』一二、二八二頁下～二八三頁上）、「無量清浄仏は、須摩題にまします。閻浮提の真西、千億万須弥山仏国を隔てた所である」（要約）と。

(329) 大阿弥陀経上に云う、（『大正蔵』一二、三〇三頁中）、「阿弥陀仏は、須摩題にます。閻浮提の真西、千億万須弥山仏国を隔てた所である」（要約）と。

(330) 宝積経第十七無量寿会の一に云う（無量寿如来会、『大正蔵』一一、九五頁下）、「ここから西方、十万億仏刹を隔てた所に、極楽という世界がある」（要約）と。

(331) 般舟三昧経上に云う（三巻本、『大正蔵』一三、九〇五頁上）、「出家の行者、在家の信者が戒めを守り、心を傾けて、西方の阿弥陀仏を念ぜよ。彼の仏は現在、ここから千億万仏刹を隔てた須摩提という国にましまして、菩薩衆に説法されている」（要約）と。

(332) 浄土論加才中に大集経を引いて云う（迦才『浄土論』巻中、『大正蔵』四七、九三頁下～九四頁上）、「阿弥陀仏は今、ここから西方、百千億諸仏国土を隔てた、安楽という世界にまします」（要約）と。

【考察】

『安養集』巻五～巻九には、七門の第五依報・第六正報に属する四十論題が列挙されている。その中、巻五・六・七が第五依報、巻八・九が第六正報を扱う。

ただし巻七末尾の「67漏尽通」だけは第六正報に属する。「67漏尽通」は、巻九の82「神通」の前後にあるべき論題であるが、本来の位置から離脱して巻七末尾に混入したものと思われる。

第五依報の内容を概観すると、巻五には極楽の位置、大きさ、構造、名称、種類、他仏国土との比較などの問題を扱い、巻六では浄土成就の因と法報応三土の判別、巻七には、『阿弥陀経』を主たる出拠とする国土の荘厳相に関する論題が並んでいる。

思うに『往生要集』は往生の修因としての念仏の教理を組織することに意を注いだ書であり、仏土に関する議論は特に手薄である。『安養集』巻五～七、第五依報の諸論題は、それを補う意図をもって設けられたものである。

巻五冒頭の「48 去此遠近」には、極楽の位置に関する二十二の要文が挙げられている。前半の七文には、『観無量寿経』序分の、「阿弥陀仏、去此不遠（阿弥陀仏はここを去ること遠からず）」という教説に注目し、『阿弥陀経』『無量寿経』の、極楽は十万億仏土を隔てた所にあるという教説との会通に関連する要文が集められ、後半十五文には、その『阿

弥陀経』『無量寿経』諸本における数量を表す「億」「倶胝」「那由他」などの用語に関連する要文が集められている。

前半の「去此不遠」の議論は、『往生要集』には見えない。この問題を取り上げたのは、日本では『安養集』が最初である。

『安養集』は、まずこの問題の出拠として（311）『観無量寿経』より「阿弥陀仏、去此不遠」の文を掲げ、次いでそれに対する（312）天台『観経疏』の文と、天台疏を註釈した（313）源清『観経疏顕要記』の文とを挙げる。（312）には、仏力によって即座に示現されるから「不遠」と説かれると言い、（313）にはそれを釈して、仏力と衆生の善根力とが感応道交する等と述べている。

（314）浄影『観経疏』には、十万億土を「不遠」と言うのであると述べられている。（315）善導『観経疏』序分義では、浄影の見解に加えて、即座に到達できるから、観念によって見ることができるからという理由を挙げている。（316）道間『観経疏』には、行者が自らの心に現れた境界を観ずるから「不遠」であると言い、（317）龍興『観経記』には、易く往生できるから「不遠」であると言う。

この問題は『安養集』以降、しばしば議論されるようになる。早期の例としては、天台本覚思想に依拠して観心念仏を説く文献の中に散見する。それも『観心略要集』『真如観』には見えず、十一世紀末～十二世紀初の成立と目される『妙行心要集』『自行念仏問答』に登場する。

『妙行心要集』巻中之本には、次のような記述がある。

経に云ふ、「阿弥陀仏はここを去ること遠からず」已上。これに三解あり。一には、仏眼の及ぶ所は無数世界十万億なり。これを敢へて遠しとなさず。二には、仏の境界は機感なき時は見えず、遠きに似たり。もし機感あらばすなはち見る、近きに似たり。三には、仏心と己心と心性一念なり。一念に隔てなし。これ不遠の義なり。初・二は有相に約し、後一は無相に約す。心性常に絶待にしてただ弥陀の法界なり。我身すなはちこれ法界唯心・唯仏・唯生なれば、すなはち空・仮・中なり。有相と無想は一念の作意なり。行坐思惟も法爾空中なり。（『恵心僧都全集』二、三四七頁）

『自行念仏問答』（『恵心僧都全集』一、五五六頁）には、観念が成就すれば娑婆即極楽であるということを主張する根拠として、「観経に云ふ、阿弥陀仏の国はここを去ること遠からず」と述べている。

『妙行心要集』に挙げる三解の中、第一・第二解は、『安養集』が挙げた要文の論述の範疇におさまるものと言える。

『妙行心要集』の第三解と『自行念仏問答』の説とは、天台本覚思想に基づく見解で、観心念仏の成就によって仮諦即法界の境地に達すれば、本来弥陀・浄土は己心中にあり、衆生即仏、娑婆即浄土であることを知ると主張するものである。（316）道間『観経疏』の見解にも近いが、思想的には『観心略要集』以来の立場を継承するものと言えよう。娑婆即浄土を主張する際に、「去此不遠」の教説は格好の文証であると言えるが、『観心略要集』『真如観』には言及されず、『妙行心要集』『自行念仏問答』に至って初めて取り上げられたのは、あるいは『安養集』が関与しているかもしれない。

次に「48 去此遠近」の後半、（318）以降の十五文の意図をうかがいたい。

この問題は、すでに『往生要集』大文第十「問答料簡」の第一「極楽依正」の第十二・十三問答に扱われている。第十二問答には、娑婆と極楽との距離を問い、答えて、羅什訳『阿弥陀経』の「過十万億仏土」という説と、玄奘訳『称讃浄土経』の「過百千倶胝那由他仏土」という説とを挙げる。次いで第十三問答に、両経の相違の理由を問い、智光『無量寿経論釈』より、「『阿弥陀経』の億は万万の意であり、十万億は百千倶胝に当たる。『称讃浄土経』に那由他という言葉が用いられているのは、倶胝が万万すなわち那由他の意であることを言うために併記したのである」という説を挙げている。

それを承けて『安養集』は、まずこの問題の出拠である（318）『阿弥陀経』の文を掲げ、それに対する釈文として、（319）伝基『阿弥陀経疏』と（320）著者不明『阿弥陀経疏』の文とを挙げている。次いでもう一方の出拠として（321）『称讃浄土経』の文を掲げ、それに対する釈文として（322）靖邁『称讃浄土経疏』の文を挙げる。加えて（323）『無量寿経』より「去此十万億刹」と説く文を掲げて、それに対する（324）義寂『無量寿経連義述文賛』と（325）憬興『無量寿経連義述文賛』の釈文を挙げる。さらにこの問題を論じた（326）智光『無量寿経論釈』と（327）懐感『群疑論』とを挙げ、また『無量寿経』の異訳である（328）『平等覚経』（329）『大阿弥陀経』（330）『大宝積経』無量寿如来会の文や、（331）『般舟三昧経』の文、（332）迦才『浄土論』より『大集経』の教説を紹介する文を挙げている。

源信が採用した智光『無量寿経論釈』の説を含め、この問題を論ずるためのあらゆる資料が収集されたと言える。

娑婆と極楽との距離に関する問題は、『往生要集』の記述をきっかけとして、当時盛んに議論されていたのであろう。『安養集』はそれに対処するため、『往生要集』「極楽依正」の論述を補足する資料を列挙すると共に、新たに「去此不遠」という『観無量寿経』の教説を出拠とする問題を提起し、議論の深化をはかっているのである。

49 国土寛狭

（333）無量寿経上に云う（『大正蔵』一二、二七〇頁上）、「阿弥陀仏の国土は七宝が自然に合わさってできており、どこまでも広々と限りがない」（要約）と。

（334）同経述義記中に云ふ（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「量成と言ふは、謂く、〈恢廓曠蕩にして限極すべからず〉と。恢廓とは、諸の山陵の障蔽をなすことなきがゆゑに。広（広＝曠？）蕩とは、諸方を弥綸して色容多きがゆゑに。不可限極とは、八方上下に世間踰繕那等の量の分斉を出過するがゆゑに。仏地論に云ふ、〈周円際なく、その量測りがたし〉と。謂く、東方等の分斉なきがゆゑに、長短等の相、測量すべきこと難し。その義相、論の偈に、〈究竟して虚空のごとく、広大にして辺際なし〉と云ふがごときに似たるゆゑに。問ふ。ここに説くところの無辺際とは、二文（文＝受？）用の中、いずれの土に依って説くや。答ふ。仏地論の中に、量円満を弁ずるに、それ三説あり。ある義には、如来の受用身土は、所化の生の宜しき所に随って現はる。或は大に或は小に、その量定まることなし。広大を現すといへども、また辺際あり。しかれども地前の菩薩の智等に就いて、説いて無量難測と言ふと。ある義には、如来の受用土は、無数劫所修の無辺の善根の所感にして、法界に周遍す。地上の菩薩および諸如来も、またその量の辺際を測ることあたはず。無をもってのゆゑに始時なしと。如実の義は、受用身土に、略して二種あり。一に自受用。謂く、諸の如来、三無数劫所修の無辺の善根の所感にして、法界に周遍す。自のために大法楽を受用するがゆゑに、初めて仏を得るより、未来際を尽くして、相続すること無間なり。諸功徳の諸大菩薩もまた見ることあたはず、ただ聞くことを得べきがごとし。かくのごとき浄土は、無量をもってのゆゑに、諸仏、見るといへども、またその量の辺際を測ることあたはず。二に他受用。諸謂（ママ）（諸謂＝謂く諸）の如来、地上の諸菩薩衆をして大乗法楽を受けて、修行を進修せしめんがために、宜に随いて現ず。或は勝に或は劣に、身は或は大に或は小に、改転して定まらざること変化土のごときし。かくのごとき浄土は、有辺なるをもってのゆゑに、地上の菩薩および諸如来も、みなその量を測る。倶に地前に就いては測ることあたはずと言ふ。この二種の差別によるがゆゑに、〈周円際なく、その量測りがたし〉と言ふ。彼の論の如実の義に准依すれば、まさに知るべし、この中にまた二義を合することを。恢廓広大にして量極すべからざること、その次第のごとく、二の差不（不＝異？）を顕はす」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「大きさについては、〈どこまでも広々と限りがない〉と言う。恢廓とは、山や丘が邪魔しないことを言う。曠蕩とは、あらゆる方向に無限に充ち満ちていることを言う。不可限極とは、あらゆる方角への広がりを世間の尺度で量ることができないことを言う。『仏地経論』（『大正蔵』二六、二九二頁中）には、〈どこまでも無限に広がり、その大きさを量ることができない〉と言う。東西南北等の方角の区別もできず、長短を量ることもできないと言うのである。その様子は、『浄土論』の偈に、〈虚空のようにどこまでも　無限の彼方に行きわたる〉と説かれるのと同様である。

問う。ここに説かれる無辺際とは、二種の受用土の中、どちらの土のことを言うのか。答え。『仏地経論』の〈量円満〉の意をうかがうに当たって、三つの説がある。第一の義によると、如来の受用身土は、導かれる衆生の優劣に応じて示現される。大小は不定である。広大であるとは言っても、やはり限りがある。けれども地前の菩薩の智恵で量れないので、無量難測と説かれるのであると言う。第二の義によると、如来の受用土は、無限の時間をかけて修めた無量の善根によって感得され、一切の世界に偏在する。よって地上の菩薩や諸の如来といえども、その量を測ることはできない。無だから始めもないと言う。第三の義が真実義である。それによると、受用身土には二種ある。一には自受用土である。それは諸の如来が三無数劫の間に修めた無辺の善根によって感得するところであり、一切世界に偏在する。自身のために大法楽を受用する世界である。初めて成仏して以来、未来の果てまでも無限に相続される。功徳を積んだ大菩薩といえども見ることはできない。ただ聞くことだけができるのである。そのような浄土は、無限の広がりを持ち、諸仏は見ることはできても、その大きさを量ることはできない。二には他受用土である。それは諸の如来が、地上の諸菩薩衆に大乗法楽を受けさせ、修行を進めさせてやろうとして、菩薩の能力に応じて示現された浄土である。勝劣や大小は不定である点では、変化土と同様である。この他受用土は、限りがあって、地上の菩薩も諸の如来も、みなその大きさを量ることができる。しかし地前の菩薩には量り知ることができない。この二種の受用土について、〈どこまでも無限に広がり、その大きさを量ることができない〉と説かれるのである。『仏地経論』の真実義によって、ここには二つの義が合わさっていることがわかるであろう。恢廓広大にして量ることはできないという教説は、二種の受用土について説かれているのである」と。

（335）同経義疏法位上に云ふ（法位『無量寿経義疏』巻上、古逸）、「〈恢廓〉の下は、界に斉限なし」と。

【現代語訳】（法位『無量寿経義疏』巻上に云う、「〈恢廓〉以下には、極楽の広さが無限であることを説く」と。

（336）無量寿論釈智光二に云ふ（智光『無量寿経論釈』巻二、古逸）、「論に曰く、〈荘厳量功徳成就とは、偈に、《究竟して虚空のごとく、広大にして辺際なし》と言ふがゆゑに〉と。釈して曰く、第二の成就なり。いかんがこれはこれ不可思議なる。彼の国の人天、もし意に宮殿楼閣を得んと欲さば、もしは広さ百里、もしは百由旬あり、もしは千由旬、千間万

間、心に随って成ずるところなり。人おのおのかくのごとし。また十方世界の無量の有情、往くを願はば、もしはすでに生じ、もしは今に生じ、もしはまさに生ずべし。一日一時の頃に、算数して知ることあたはざるところなり。しかも彼の世界は、つねに虚空のごとく、迫迮の相なし。彼の中の有情、かくのごとき量の中に住み、志願広大なることまたかくのごとく、また虚空のごとく限量あることなし。彼の土の量は、よく有情の心行の量となる。たれか思議すべけんや」と。

【現代語訳】智光『無量寿経論釈』巻二に云う、「『浄土論』に、〈荘厳量功徳成就とは、偈に、《虚空のようにどこまでも　無限の彼方に行きわたる》と説くところである〉と言う。註釈する。これは国土荘厳功徳成就の第二である。なぜこれが不可思議であるかというと、極楽の人々が、宮殿楼閣が欲しいと思えば、広さ百里のものであれ、あるいは百由旬、千由旬であれ、千間・万間であれ、心のままに作り出すことができるからである。すべての者がそうできるのである。また、あらゆる世界の無量の人々が、往生を願うならば、過去に生まれ、現在に生まれ、また未来にも生まれるであろう。その人数は、ほんのわずかの期間に限定したとしても、到底数え尽くすことはできない。しかも極楽は、いつも虚空のように広々として、窮屈なことはない。極楽の人々は、このような世界に住み、その志の大きさもまた虚空のように無限である。極楽の大きさは、そこに住む人々の心のはたらきの大きさに応ずるのである。とても量り知ることはできない」と。

(337) 同第一に云ふ〈智光『無量寿経論釈』巻一、古逸〉、「論に曰く、〈究竟して虚空のごとく、広大にして辺際なし〉と。釈して曰く、これは第二に、荘厳量功徳成就と名づく。しかるゆゑんは、仏、三界を見るに、人天昇降し、苦楽処を異にす。山河障隔、土田狭小、宮室迫迮す。かくのごとき等の種々の艱難あり。ゆゑにこの願を興す、〈願はくは、わが国土なほ虚空のごとく広大にして無際ならん〉と。〈如虚空〉とは、謂く、来生の衆、また無量なりといへども、なほ無なるがごとく、不増不減なること、虚空と同じきがゆゑに。〈広大無際〉とは、上の〈如虚空〉の義を証す。何のゆゑに〈如虚空〉と言ふかとなれば、広大にして際なきをもってのゆゑに。もし十方の衆多の有情ありて、往生を願はば、もしはこれすでに生じ、もしはこれ今に生じ、もしはこれまさに生ずべし。また無量無辺無際なりといへども、まさに畢竟してつねに如（如―?）虚空のごとく、広大にして際なく、つひに満つる時なかるべし」と。報化二土の封疆（ママ）の有無は、浄土論上巻にあり。土体の中にこれを抄す。

【現代語訳】智光『無量寿経論釈』巻一に云う、「『浄土論』に、〈虚空のようにどこまでも無限の彼方に行きわたる〉と言う。註釈する。これは国土荘厳の第二、荘厳量功徳成就と呼ぶ。仏がこのような荘厳を成就しようとされた理由は、仏が三界を眺められた際、人々の盛衰や苦楽がまちまちで、山河が道を遮り、土地は狭く、住居も窮屈そうであった。そのような種々の苦難をご覧になり、〈わが国土は、虚空のように無限の広さであるように〉と願われたのである。〈如虚空〉とは、極楽に来生する者が無量であっても、まるで誰も居ないように、国土は虚空のように増えも減りもしないことを言う。〈広大無際〉とは、〈如虚空〉の理由である。なぜ〈如虚空〉であるかというと、広大なること無限だからである。もしあらゆる世界の多くの人々が、往生を願うならば、過去に生まれ、現在に生まれ、また未来にも生まれるであろう。その人数は無限大であるけれども、国土はどこまでも虚空のように限りなく広大であり、いつまでも満杯になることがないだろう」と。報土と化土の境界の有無については、迦才『浄土論』巻上（『大正蔵』四七、八四頁上～八五頁中）に述べられている。58「国土」の項、(423) に引用している。

(338) 平等覚経上に云う（巻一、『大正蔵』一二、三〇三頁上）、「広大にして極まりない」と。大阿弥陀も全くこれと同じ（『大阿弥陀経』巻上、『大正蔵』一二、三〇三頁中）。

(339) 大阿弥陀経上に云う（『大正蔵』一二、三〇一頁中）、「第三願。私が仏となった時には、わが国土が七宝よりなり、その広さは無限でありますように」（要約）と。

(340) 無量寿論釈第一に云ふ〈智光『無量寿経論釈』巻一、古逸〉、「論に曰く、〈世尊、我一心に、尽十方無礙光如来に帰命し、安楽国に生ぜんと願ず〉と。釈して曰く、乃至（ママ）もし一仏は三千大千世界を主領すと説かば、これ小乗の義なり。もし諸仏あまねく十方無量無辺世界を領すと説かば、これ大乗の義なり。世親菩薩、今、〈尽十方無碍光如来〉と言ふは、すなはちこれ従（ママ）（従＝彼）の如来の名号による。彼の如来の光明の智相のごとく、自ら一心をもって帰命礼拝す。〈願生安楽国〉とは、世親菩薩の帰命の意なり。彼土に往生せんと欲せんがためのゆゑに」と。

【現代語訳】智光『無量寿経論釈』巻一に云う、「『浄土論』に、〈世尊よ我は一心に　尽十方無礙光の　如来に帰命したてまつり　往生安楽願います〉と言う。註釈する。…中略…一仏の活動が三千大千世界に及ぶという教説は、小乗の義である。諸仏の活動が十方無量無辺世界に及ぶという教説は、大乗の義である。今、世親菩薩は、〈尽十方無碍光如来〉と言っている。これは彼の如来の名号の通りに、彼の如来の光明すなわち智慧のはたらきが無限であるという意義を信受して、みずから一心に仏に帰依し礼拝しているのである。〈願生安楽国〉とは、世親菩薩の帰依の心の内容を表す。極楽に往生したいと願っているのである」と。

(341) 註無量寿論上に云う曇鸞（『論註』巻上、『大正蔵』四〇、八二八頁中）、「〈虚空のようにどこまでも　無限の彼方に行きわたる〉。この二句を、荘厳量功徳成就と呼ぶ。仏がこのような荘厳を成就しようとされた理由は、仏が三界を眺められた際、山や谷が道を遮り、土地は狭く、住居も窮屈そうであった。それで、〈わが国土は、虚空のように広大で

あるように〉と願われたのである。〈如虚空〉とは、来生者が多くても、誰も居ないようであることを言う。〈広大無辺際〉は、〈如虚空〉の理由である。広大無限だから虚空のようだということである。〈成就〉とは、十方世界からの往生者が、過去・現在・未来に無限にいても、国土は常に虚空のように広大で、いつまでも満杯になることがないことを言う。

問う。維摩居士の方丈は、狭いけれども容量が大きい。とするならば、無限であることがすなわち広大であるとは言えないだろう。答え。『浄土論』に言う広大とは、面積がどれほどかというようなことではない。虚空のようだと言うのである。方丈に擬えることはできない。維摩の方丈は、面積は狭くて容量が大きい。極楽は仏の悟りの境界であり、面積も広く、容量も大きいのである」（要約）と。

【考察】

本項「49 国土寛狭」には、極楽の広さに関連する要文が集められている。

『往生要集』には、この問題が特に議論された形跡はない。しかし大文第二「欣求浄土」の第四「五妙境界」の項に、極楽が広大なる世界であることを説いた箇所があり、その中に、「恢廓曠蕩にして辺際あることなし」という文言が見える。これは、『無量寿経』の「恢廓曠蕩にして限極すべからず」という文と、『浄土論』の「究竟して虚空のごとし。広大にして辺際なし」という文とを合わせたものである。この経・論の文について論じた要文を集めて、『安養集』がここに「国土寛狭」という論題を設けたのは、『往生要集』「五妙境界」の記述がきっかけとなったと考えられよう。

『安養集』は、まず出拠の経文として（333）『無量寿経』の文を掲げ、また旧訳の文を（338）『平等覚経』から引用する。そしてその釈文として、（334）義寂『無量寿経述義記』と（335）法位『無量寿経義疏』とを挙げている。（334）には、『無量寿経』の「恢廓曠蕩不可限極」と、『浄土論』の「究竟如虚空広大無辺際」は、共に極楽の量功徳を説くものであると述べられている。そこで次に（336）（337）に智光『無量寿経論釈』より、さらには（341）に曇鸞『往生論註』より、量功徳を説く偈文の釈を引用している。加えて（339）『大阿弥陀経』より国土曠蕩を誓う第三願の文と、（340）智光『無量寿経論釈』より「無礙」の語義を説く文を引用している。

以上本項には、総じて極楽の広さは無限大であると説く要文が集められている。

50 世界安立

（342）平等覚経上に云う（巻一、『大正蔵』一二、二八三頁上）、「極楽の地は、白銀・黄金・水精・琉璃・珊瑚・虎珀・車渠の七宝できている。その広さは無限である。七宝はそれぞれが光り輝き、この上なく美しい。欲界の最高所である第六他化自在天のようである。極楽には須弥山はなく、日月や星、四天王天や忉利天などの諸天は空中にある。地面は平坦で、海や河、山や谷もない。地獄・餓鬼・畜生もなく、阿修羅や龍鬼神もいない。雨も降らず、四季もない」（要約）と。大阿弥陀経もこれと同じ（巻上、『大正蔵』一二、三〇三頁中～下）。

（343）大宝積経無量寿会下巻に云ふ（無量寿如来会、『大正蔵』一一、九六頁下）、「釈尊が、〈極楽には山はない〉と説かれると、阿難は、〈では四天王天などの地居天はどのようにして存在するのですか〉と問うた。すると釈尊は、〈では夜摩天以上の空中の諸天はどのように存在するのか〉と問われた。阿難は、〈不可思議の業力によります〉と答えた。すると釈尊は、〈極楽の諸仏や衆生は善根業力によって存在する〉と説かれた。続いて釈尊は、〈極楽には海はないが、河はある。幅十由旬深さ十二由旬ほどのものから、千由旬に達するものもある〉と説かれた」（要約）と。

（344）無量寿経上に云う（『大正蔵』一二、二七〇頁上）、「阿弥陀仏の国土は七宝が自然に合わさってできており、どこまでも広々と限りがない。七宝はそれぞれが光り輝き、この上なく美しい。他化自在天の宝のようである。極楽には須弥山などの山はなく、海や谷もない。しかし見たいと思えば、仏が神通力によって見せてくださる。地獄・餓鬼・畜生はなく、四季もない。常に快適な世界である。阿難が、〈須弥山がないのなら、四天王などはどのように存在するのですか〉と問うと、釈尊は、〈では、夜摩天などの空中の諸天はどのように存在するのか〉と問われた。阿難は、〈行業の果報は不可思議です〉と答えた。すると釈尊は、〈行業の果報は不可思議であり、仏の世界もまた不可思議である。極楽の衆生は、功徳の力によって存在するのであるから、山は不要なのである〉と説かれた」（要約）と。

（345）同経述義記中に云ふ（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「経の、〈其仏国土自然七宝〉より〈不可限極〉に至る。述して曰く、この下は観なり。この中に三あり、一には彼の仏土の荘厳功徳を観察し、二には阿弥陀仏の荘厳功徳を観察し、三には彼の諸菩薩の荘厳功徳を観察す。いかんが彼の仏国土の荘厳功徳を観察するかとなれば、不可思議力を成就するがゆゑに、彼の摩尼如意宝珠のごとくなるがゆゑに、相似相対の法なるがゆゑに。今この文中に、十七功徳を具す。しかるにその次第は論と少しく別なり。観を説法する次第の異なるがゆゑに。論の中に列するところの十七功徳の次第は、一には荘厳清浄功徳成就、二には荘厳無量功徳成就、三には荘厳性功徳成就、四には荘厳形相功徳成就、五には荘厳種種事功徳成就、六には荘厳妙色功徳成就、乃至十七には荘厳一切所求満足功徳成就

なり。この中には、第一に、第二量功徳を顕示す。中に二あり、一には体成を顕し、二には量成を顕す。体成と言ふは、謂く、〈彼は自然七宝合成して地となす〉と。乃至 量成と言ふは、謂く、〈恢廓曠蕩にして限極すべからず〉と。〈恢廓〉とは、諸の山陵の障蔽をなすことなきがゆゑに。〈曠蕩〉とは、諸方を弥綸して色容多きがゆゑに。〈不可限極〉とは、八方上下に世間踰繕那等の量の分斉を出過するがゆゑに。乃至 経の、〈悉相雑厠〉より〈微妙綺麗〉に至る。述して曰く、これすなはち第二に、第四形相功徳を顕す。謂く、彼土の中、衆宝間錯し、浄光あひ照らす。偈に、〈浄光明の満足せること、鏡と日月輪とのごとし〉と云ふがごときゆゑに。〈悉相雑厠〉とは、謂く、金銀等の衆、雑厠するなり。〈転相入間〉とは、謂く、衆宝の光、さらにあひ間入して映飾するなり。観経に云ふがごとし、〈瑠璃の色中に、金色の光を出し、頗梨の色中に紅色の光を出し、乃至 珊瑚虎魄、一切の衆宝をもって映飾とす〉と。〈光赫焜耀にして微妙奇麗なり〉とは、すなはち諸（ママ）（諸―？）これなり。華厳経に云ふ、〈諸世界海に種種の形あり。或は方、或は円、或は方円にあらず。或は水回復するがごとく、或はまた華形のごとく、或は種種の衆生の形なり〉と。この安楽界は論に准ずれば、まさにこれ円形相なるべし。乃至 経の、〈清浄荘厳〉より〈第六天宝〉に至る。述して曰く、これすなはち第三に、第五種種事功徳を顕示す。種種事とは、謂く衆等なり。謂（ママ）（謂―？）論の偈に、〈もろもろの珍宝の性を備へて、妙荘厳を具足す〉と云ふがごときゆゑに。しかるに荘厳の土にまた多種あり。この中に、しばらく事相荘厳を説く。若（ママ）（若＝華？）厳経に云ふ、〈世界海微塵等荘厳あり。謂ふべし、一切境界種種雲荘厳、一切世界衆生行業荘厳、三世諸仏および普賢菩薩願力荘厳なり。かくのごとき等の塵数の荘厳あり〉と。〈所定（ママ）（所定＝その宝？）なほ第六天の宝のごとし〉とは、しばらく世間欲界中の勝を挙ぐ。浄土の宝は、ただ彼のごときにはあらず。ゆゑに下の文に云ふ、〈たとひ第六天王を無量寿仏国の菩薩声聞に比ぶるに、光顔容色あひおよばざること百千万億不可計倍なり〉と。正報はさらにあひ比べず。まさに知るべし、依果またしかり。経の、〈又其国土無須弥山〉より〈常和調適〉に至る。述して曰く、これはすなはち第四に、第一清浄功徳を顕示す。清浄と言ふは、謂く三界を出づ。論の偈に、〈彼の世界の相を観ずるに、三界道に勝過す〉と云ふがごときゆゑに。三界とは、謂く欲・色等なり。言ふところの道とは、謂く地獄等の三悪趣なり。今この文中には、麁に就いてしばらく無悪趣と説く。また別して諸の難趣と、言また抄す。北州無想天等の諸難処なり。また彼土の中、三種の穢なし。ゆゑに清浄と名づく。一には器穢、須弥山等なきがゆゑに。二には趣穢、地等の趣なきがゆゑに。三には時節穢なし。春秋等の節および異なきがゆゑに。華厳経に云ふ、〈世界海塵数の清浄あり。いはゆる菩薩、善知識に親近し、諸善根を成就す。等しく一切衆生を利し、一切の諸波羅蜜を満たし、一切行地に安住す。かくのごとき等の世界塵数の清浄者あり〉と。これ能清浄の因に就いて説くなり。経の、〈爾時阿難白（＋仏？）世尊〉より〈故問斯義〉に至る。述して曰く、これすなはち第五に、第三性功徳を顕示す。この中、性とは、すなはち所依の住因なり。上に無須弥等と説く。これ不所依住の因を顕す。偈に、〈正道の大慈悲、出世の善根より生ず〉と云ふがごときゆゑに。乃至 華厳経に云ふ、乃至〈一一世界海所依の住は、世界微（＋塵？）数のごとし。いはゆる一切荘厳に依って住し、或は虚空に依って住し、或は一切宝によって住し、或は仏光明に依って住し、或は行業に依って住し、或は摩訶那伽金剛力士の掌中に依って住し。或は普賢の願力に依って住す〉と。この中、さらに空居の諸天を例す。まさに此土は虚空によって住すと言ふべし。しかるに観経に云ふ、〈下に金剛七宝の金の幢ありて瑠璃地を擎ぐ〉と。彼には化土を説くがゆゑに相違なし。また彼の経の中には、ただ瑠璃地と云ひ、この経の中には、七宝合成すと説く。ゆゑに知んぬ、二経の所説の土は異なることを」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「経の、〈其仏国土自然七宝〉より〈不可限極〉までは、観察の対象を明かす。三段よりなる。第一に極楽国土の荘厳功徳を観察し、第二に阿弥陀仏の荘厳功徳を観察し、第三に極楽の諸菩薩の荘厳功徳を観察する。なぜ極楽国土の荘厳功徳を観察するのかというと、仏の不可思議力を成就された世界であるからであり、摩尼如意宝珠のような世界であるからであり、また宝珠のような自在のはたらきがあるからである。この『無量寿経』の文中にも十七種の功徳が備わっているが、その順番は『浄土論』とは少し異なる。説法の順序が異なるからである。『浄土論』に列挙される十七種功徳の順序は、第一に荘厳清浄功徳成就、第二に荘厳無量功徳成就、第三に荘厳性功徳成就、第四に荘厳形相功徳成就、第五に荘厳種種事功徳成就、第六に荘厳妙色功徳成就、…中略… 第十七に荘厳一切所求満足功徳成就である。『無量寿経』では、第一に、第二量功徳を明かしている。二段よりなる。第一には構成要素を示し、第二には大きさを示す。構成要素については、〈阿弥陀仏の国土は七宝が自然に合わさってできている〉と言う。…中略… 大きさについては、〈どこまでも広々と限りがない〉と言う。〈恢廓〉とは、山や丘が邪魔しないことを言う。〈曠蕩〉とは、あらゆる方向に無限に充ち満ちていることを言う。〈不可限極〉とは、あらゆる方角への広がりを世間の尺度で量ることができないことを言う。…中略…

経の、〈悉相雑厠〉より〈微妙綺麗〉までは、第二に、第四形相功徳を明かす。極楽では様々な宝玉が入り交じり、互いに清らかな光に照らされていることを言うのである。『浄土論』の偈に、〈光り溢れて清らかに　鏡に映る月日のよう〉と説かれる通りである。〈悉相雑厠〉とは、金銀等の宝玉が入り交じることを言う。〈転相入間〉とは、種種の宝玉の放つ光が、互いを照らし合って美しく輝くことを言う。『観無量寿経』に、〈瑠璃の中から金色

の光が放たれ、頗梨の中から紅色の光が放たれ、…中略… 珊瑚や虎魄など、あらゆる宝玉の光に照らされて輝いている〉と説かれる通りである。本経に、〈まばゆいばかりに輝いて、この上なく美しい〉と言うのは、このことである。『華厳経』（六十巻本、巻三、『大正蔵』九、四一〇頁下）に、〈仏の世界は多種多様である。方形であったり、円形であったり、また方形でも円形でもなかったりする。水に囲まれていたり、花の形をしていたり、また様々な生きものの形をしていたりする〉と言う。『浄土論』によると、この極楽世界は、円形だという。…中略…

経の、〈清浄荘厳〉より〈第六天宝〉までは、第三に、第五種種事功徳を明かす。種種事とは、たくさんということである。『浄土論』には、〈浄土を飾る宝玉は 悟りの功徳を備えてる〉と説かれる。浄土の荘厳には多種あるが、ここには具体的な相（すがた）を捉えることのできる荘厳を説く。『華厳経』（六十巻本、巻三、『大正蔵』九、四一一頁中）に、〈仏の世界には微細等の荘厳がある。ある世界はそのすべてが種種の雲によって飾られ、あるいは衆生の行為によって飾られ、三世の諸仏や普賢菩薩の願力によって飾られるなど、無数の荘厳がある〉と言う。〈その宝は第六天の宝のようである〉とは、ひとまず我らの住む欲界の中での最勝を挙げているのであるが、浄土の宝は、そんな程度のものではない。よって下の文には、〈第六天の王といえども、その姿を無量寿仏国の菩薩・声聞と比べるならば、まったく足元にも及ぶものではない〉と説かれている。仏・菩薩の姿については比較されていない。国土に準じて推量せよ。

経の、〈又其国土無須弥山〉より〈常和調適〉までは、第四に、第一清浄功徳を明かす。清浄とは、三界を出過していることを言う。『浄土論』の偈に、〈極楽世界を観ずれば 三界穢土を超えている〉と言う通りである。三界とは、欲界・色界・無色界を言う。道とは、地獄等の三悪趣の世界を言う。本経では簡略に、〈地獄・餓鬼・畜生はない〉と説き、さらに種種の難趣がない、と省略して言う。これは北州無想天等の種種の難処のことを言うのである。また極楽には三種の穢がない。だから清浄と言うのである。三種の穢とは、一には器穢がない。須弥山等がないからである。二には趣穢がない。地獄等の趣がないからである。三には時節穢がない。春秋等の季節や天災がないからである。『華厳経』（六十巻本、巻三、『大正蔵』九、四一一頁中）に、〈仏の世界には無数の清浄がある。菩薩や善知識に接し、種種の善根を成就するとか、等しく一切衆生を利益して、すべての修行を完成し、悟りの境地に安住するなどである。このような無数の清浄なる者がある〉と言う。これは仏国土を清める修行について説かれている。

経の、〈爾時阿難白仏世尊〉より〈故問斯義〉までは、第五に、第三性功徳を明かす。ここに言う性とは、依って住するところの国土の因を説くのである。すでに〈須弥山はない〉と説かれていた。これは依って立つところの地面がないということである。『浄土論』の偈に、〈仏の国土は大慈悲と さとりの智慧とでできている〉と説かれる通りである。…中略…『華厳経』（六十巻本、巻三、『大正蔵』九、四一〇上）に、〈…中略… 仏の世界が何によって住するのかは、実に様々である。荘厳に依っているとか、虚空に依っているとか、また宝玉によっている、仏の光明に依っている、衆生の行為に依っている、大龍金剛力士の掌中に依っている、普賢菩薩の願力に依っているなど、様々である〉と言う。この中に空居の諸天を例に挙げている。極楽は虚空に依って住する言えよう。ところが『観無量寿経』には、〈地下に金剛七宝でできた金の柱があって、瑠璃の地面を支えている〉と言う。『観無量寿経』には化土を説くと考えれば矛盾はない。また『観無量寿経』には、ただ瑠璃地とだけ言い、本経『無量寿経』には、七宝が合わさっていると言う。よってこの二経に説く所は、別の浄土であるということがわかる」と。

(346) 十往生経に云う（『山海慧菩薩経』、『大正蔵』八五、一四〇八頁上）、「山海恵菩薩が世尊に、〈皆が阿弥陀仏の国土に往生することを願うのは、どのような妙楽があるからなのですか〉と問うと、世尊は、〈立ち上がって合掌し、まっすぐ西方を向いて、阿弥陀仏国を観じ、阿弥陀仏を拝見したいと願え〉と仰せられた。その時、阿弥陀仏が光明を放って山海恵の身を照らされたので、山海恵は即座に阿弥陀仏の国土の荘厳を見ることができた。その世界は、すべてが七宝で飾られ光っている。七宝の山・地面・樹木・花・塔・坊舎・池、八功徳の水、六味の食、七宝の鉢があり、日月の輝く天からは七宝の花や衣が降り注ぎ、天人が音楽を演奏している。地面には黄金の網が敷きつめられ、宝樹が立ち並ぶ、すばらしい光景であった」（要約）と。

(347) 後出阿弥陀偈に云う（『大正蔵』一二、三四六頁中）、「極楽世界に山はなく 海もなければ河もない なのにきよらに水ながれ そのせせらぎが法を説く」と。

(348) 無量乗（ママ）経述義記下に云ふ（義寂『無量寿経述義記』巻下、古逸）、「経の、〈爾時阿難即見無量寿仏〉より〈亦皆自然〉に至る。述して曰く、この下は第五に、所見を審定す。文に三段あり。一に所見を審定し、二に化胎生の別を弁じ、三に諸方往生を顕す。初の中に四の問答あり。初の一問答は、その所見の天地諸物を定む。彼の国中に、地居の者あり、空居の者あり。空居の中に、四王天乃至浄居あり。これすなはち余方に因順して、天人の差別を施設するなり。しかるにその果報は、実に勝劣なし。また人天交接して、両（たが）ひにあひ見るを得る。此土の上下あひ隔てあるがごときにはあらず。清浄覚経に云ふ、〈第一四天王諸天人、第二忉利天上諸天人、第三天上諸天人、第四天上諸天人、上は第十六天上諸天人に至るまで、上は三十六天上諸天人に至るまで、みな天上の万種自然の物を持ち、百種雑色の繒綵、劫波育の畳衣、萬種の伎樂、転倍（うたた）た好くあひ勝れ、衆（衆―?）おのおの

持ち来たり下りて礼を作し、無量清浄仏および菩薩阿羅漢を供養す〉と。この文に准ずれば、みな上下欲色の諸天あり。何等をか名づけて三十六天となす。楼炭経に准ずれば、欲天に六あり、色界天に二十二あり、無色天に四あり。上下を幷合して三十二あり。未だ知らず、如何が三十六となす。阿弥陀経に云ふ、〈すなはち彼の国中、第（十一？）四天より上は三十二天に至る〉と。この文はすなはち楼炭経とその数当たるなり。もし無色界を凡・聖におのおの分くれば、また三十六と云ふを得べきなり。文に別して列することなし。すなはち定むべからず。問ふ。彼にすでに三十六天ありと云ふ。いかんが此の中には、ただ上は浄居天に至るまでを見るのみなるや。答ふ。無色天は細にして、麁色なきがゆゑに、仏光を蒙るといへども、多分は見えず。また浄居天にはまた無色の四天を摂すと言ふべし。これ浄業の者の所居の処なるがゆゑに。問ふ。彼土の浄天は、また定性たりて、還生せざるや。答ふ。五浄居に依らば、回趣する者なきも、許すもまた失なし。また穢土浄居にて、なほ回心する者なしと言ふべからず。いかにいはんや浄土をや。不空羂索経に、彼の天を教化して発心せしむるをもってのゆゑに。また瓔珞経等には、彼の諸天に菩薩の記を授くるがゆゑに。もししからば、何のゆゑに成唯識に云ふ、〈しかるに五浄居には回心するものなし。経には彼にて菩提を発すと説かざるがゆゑに〉と。この文を回して釈するに、般若経の文は、彼の天には先（先―？）に回心するものなしと謂ふにあらず。もって大般若の多処の文に云ふ、〈下の諸天等は、みな般若波羅蜜多の経巻処の中に来たりて、礼拝・供養・発心して去る〉と。ただ五浄居は発心すとは言はず。このゆゑに論主、彼の言を釈して云ふ、〈色界なりといへども（原文は「離色界故」となっているが、『成唯識論』の文意に則し「雖色界」の誤りと考えて読み替える……筆者註）、第八無漏、みな現在することを容す。しかるに五浄居は回心する者なし。般若経に、彼の天は菩提を発すと説かざるによるがゆゑに〉と。般若に彼の発を説かざるは、菩薩、初分の経をもって、法華の前にあり、未だすでに正位に入る声聞の大心を発すとは説かざるがゆゑに。ゆゑに彼の経に云ふ、〈汝等諸天、まさに発心すべし〉と。もし声聞の正性離生に入れば、終に大菩提心を発すことあたはず。生死の流においてすでに界を経るがゆゑに。五浄居天は純にこれ発心して来たると説かず。下の諸天の中には、来たりて未だ位に入らざるものあり。このゆゑに説いて、発心して来たると言ふ。下の文に、不定の者ありて、すでに坐すといへども、よく発心す、とは謂ふにあらず。浄居はただ趣寂あるのみ。このゆゑに発心回趣することあたはず。もししからざれば、何の道理によって、同じくこれ上生不還の中、五浄居に生ぜば、ただこれ趣寂するのみにして、下の生般等はすはなちしからざるや。このゆゑに、まさに般若等の味回（ママ）（味回＝未会？）乗経に依らば、一切すでにまさに性離生に入らば、回心して菩薩に趣向すと言はずと言ふべし。ただ五浄居に生ずる者のみにあらず。法華等の已会乗経に依らば、乃至趣寂まで、みなよく回心す。もし深密等の分別了義教に依らば、趣寂の種姓は、たとひ未だ坐に入らざれども、大菩提心を発すことあたはず。不定種姓は、誤ってすでに果を得れば、みなよく回心して菩薩に趣向す。諸（これ）この理に依って、経文を会釈す。彼の文を引いて、回心することなきを論ずるにはあらず。しばらく心に剰論して、還って本界を釈さん。彼の浄土の中の浄居天等は、ただ余方に因順して、上下の異名あり。業力によって種姓異なるにあらず。このゆゑに一切はよく大行を修す」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻下に云う、「経の、〈爾時阿難即見無量寿仏〉より〈亦皆自然〉までは、第五に、阿難・弥勒が見た極楽の情景を仏が確認される場面である。三段よりなる。第一に見たものを確認し、第二に化生・胎生の区別を論じ、第三に他方仏国から往生する者のことを言う。第一段の中に四番の問答がある。第一問答は、阿難・弥勒が見た極楽の天地や物を確認する。極楽には地上で暮らす者があり、また天上で暮らす者もある。天上の諸天に、四天王天から浄居天までがあると言う。これは他の世界に準じて、地上の者を人と言い、天上の者を神と説くだけであって、実際には人と神との間に勝劣はない。神と人とは交流し、互いの存在を知っている。娑婆のように天上界と地上とが隔絶しているのではない。『平等覚経』（巻二、『大正蔵』一二、二八七頁下）には、〈第一四天王諸天人、第二忉利天上諸天人、第三天上諸天人、第四天上諸天人より、上は第十六天上諸天人に至るまで、あるいは三十六天上諸天人に至るまで、みな生まれながらに天上界の種々の物を持ち、美しい絹や綿の衣を身につけ、種々の楽器を用いて美しい音楽をかなでながら、天より舞い降りて礼拝し、阿弥陀仏や諸菩薩阿羅漢に敬いの意を捧げる〉と説かれる。この文によると、欲界・色界に上下の諸天があるということである。三十六天とは何を指すのか。『大楼炭経』によると、欲界には六つの天があり、色界には二十二天、無色界には四天があると言う。すべて合わせて三十二になる。なぜ三十六天と言うのか。『大阿弥陀経』（巻上、『大正蔵』一二、三〇七頁中）には、〈極楽世界には、第一四天王天より上は三十二天に至るまで〉とあって、『大楼炭経』の教説と符合する。無色界の四天を、それぞれ凡夫の世界と聖者の世界とに分ければ、合わせて三十六天とすることができるが、経にはそのようなことは述べられていない。安易に断定してはならない。

問う。『平等覚経』には三十六天があると説かれるのに、本経では、浄居天までを見るだけであると述べられているのはなぜか。答え。無色界の諸天は微細であって、物質として捉えがたいので、仏の光に照らされても、ほとんど見えないからである。あるいは浄居天の中に無色界の四天を含んでいると見ることもできる。いずれも清らかな行いの者が住む世界だからである。

問う。極楽の浄居天は、一旦生まれたら、二度と生まれかわることはないのか。答え。色界の五浄居天は確かにそうなのだが、生まれかわると考えても間違いではない。穢土の浄居天においてすら、回心して菩薩道を目指す者がいる可能性がある。まして浄土においてはなおさらである。『不空羂索経』には、神々を教化して菩提心を発させる場面があり、また『瓔珞経』等には、天上界の神々に菩薩の印可を授ける場面があるからである。だとするとなぜ、『成唯識論』（巻七、『大正蔵』三一、四〇頁中）に、〈五浄居天には回心する者はない。それは、経には五浄居天において菩提心を発すとは説かれないからである〉と言われるのか。この論の文を検討してみよう。『般若経』には、諸天には回心する者はいないとは説かれていない。『大般若経』には所々に（たとえば巻百二十九、『大正蔵』五、六九三頁上）、〈五浄居天よりも下の諸天の神々は、みな般若波羅蜜多経の経巻を納めた所にやって来て、礼拝・供養・発心して帰る〉等と説かれている。ただ五浄居だけは発心するとは言わない。そのために『成唯識論』には、〈色界であっても、声聞の第八識の無漏は存在することができる。ただし五浄居天には回心する者はない。『般若経』に、五浄居天において菩提心を発すとは説かれていないからである〉と言うのである。『般若経』に五浄居天の発心を説かないのは、大乗初分の経だからである。『法華経』よりも前に説かれた経なので、すでに聖位に達した声聞が菩提心を発すとは説かれないのである。よって『大般若経』（巻七十七、『大正蔵』五、四三二頁上等）には、〈諸天の神々よ、菩提心を発しなさい〉と言うけれども、声聞の正性離生すなわち見道に達した聖者は、もはや菩提心を発すことはできない。生死流転の世界を断ち切っているからである。よって五浄居天の神々は菩提心を発して極楽にやってくるとは説かれない。それよりも下の諸天から極楽に来生する者の中には、未だ見道に達していない者もある。だから菩提心を発して来生すると説かれるのである。声聞乗か菩薩乗か未だ定まらない者が、すでに聖者の位に坐して、後に菩提心を発すなどとは説かれないのである。浄居天の者はただ小乗の無余涅槃に入るのみである。よって菩提心を発して菩薩乗に回入することはできないと説かれるのである。そうでなければ、一体どういうわけで、色界の天に生まれて不還の果を得た者の中、五浄居天に生まれた者は小乗の無余涅槃に入るのみであり、それよりも下の諸天に生まれて涅槃に入る者はそうではないなどと説かれるのか、理解できないだろう。

だから『般若経』等、小乗の救いが説かれない経では、見道の聖者が回心して菩薩道に入るとは説かれないのである。五浄居天に生まれた者だけではない。『法華経』等の小乗の救いを説く教えによると、小乗の無余涅槃に入った者でも、みな回心して大乗に趣入すると説かれるのである。『解深密経』などの分別了義経では、小乗の無余涅槃を目指す者は、たとえ聖者の位に達する前であっても、大乗の菩提心を発すことはできない。大乗か小乗か未だ定まらない者は、誤って涅槃を得たのであるから、みな回心して菩薩道に趣入することができると説かれる。ここでは、この道理に随って経文を会通解釈する。経文を引用して、回心せずということを議論することはしない。

そのことはしばらく心に留めておいて、本題の極楽のことに話をもどそう。極楽浄土の中の浄居天等は、ただ他の世界に準じて、仮に上下の天の名を挙げているだけである。そこにいる神々の善悪の行為によって、成仏の能力に差別を設けているわけではない。よってすべての者は、大乗の行を修することができるのである」と。

(349) 同経連義述文賛下に云う（憬興、『大正蔵』三七、一六八頁下～一六九頁上）、「経の、〈爾時仏告〉より〈対曰已見〉までは、第五に、浄土において得べきものと捨てるべきものとを説く。ここではまず、三番の問答を設けて、得べきものを得よと説く。浄土には天地の差別はないと説かれることが多いが、本経では、地居より浄居天まであると言う。帛延訳『平等覚経』には、第一四天王天より三十六天に至るまで、菩薩・阿羅漢・天人が虚空の中で美しい音楽を奏でると言い、支謙訳『大阿弥陀経』では、第一四天王天より三十二天に至るまで、阿弥陀仏の教えを聞いて歓喜し、仏や諸菩薩阿羅漢に敬いの意を捧げると説かれている。『密厳経』には二十六天を説き、『本業経』には二十八天、『華厳経』には三十二天があると言う。『華厳経』と『大阿弥陀経』とは同じである。『平等覚経』は誤りであろう。ところで本経には、浄居天があると説かれるが、不還果を得た定性声聞の聖者は、浄土には往生できないはずである。しかし『密厳経』には、欲界・色界・無色界の諸天を次第に上って行きながら、さらに密厳浄土に来生すれば、そこは十地の菩薩の世界であると説かれる。よって矛盾はない。『密厳経』（巻中、『大正蔵』一六、七三二頁上）には、〈浄居諸天と阿迦尼吒螺髻梵王とが一処に会し、密厳浄土の仏・菩薩はみな希有の心を生じた〉と説かれる。よって浄居天人は密厳浄土に生まれて、大菩薩となることが知られよう」（要約）と。

(350) 観無量寿経に云う（『大正蔵』一二、三四二頁上）、「かの観想が成就したならば、次に極楽世界の瑠璃の大地が透きとおって映りあう様子を見よ。地下には七宝で飾られた八角形の金の柱があって瑠璃の大地を支えている。宝玉は千の光を放ち、その光の一々に八万四千の色があって瑠璃の大地に映える様は、眩しくてはっきりとは見えない。また瑠璃の大地は、黄金の縄と七宝で区画整理されている」（要約）と。

【考察】

本項「50 世界安立」には、極楽の構造に関説する要文が集められている。

『往生要集』には、この問題が特に議論された形跡はない。ただし大文第二「欣求浄土」

の第四「五妙境界」の項に、次のような記述が見える。

彼の世界は琉璃をもって地となし、金縄その道を界す。坦然平正にして高下あることなく、恢廓曠蕩にして辺際あることなし。晃耀微妙にして奇麗清浄なり。

その根拠となったのは、『観無量寿経』（『大正蔵』一二、三四二頁上）水想観の、「瑠璃地上に黄金の縄をもって雑厠間錯し、七宝をもって界し分斉分明なり」や、『無量寿経』巻上（『大正蔵』一二、二七〇頁上）の、「その仏国土は、自然の七宝、金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・車渠・碼瑙合成して地となる。恢廓曠蕩にして限極すべからず。ことごとくあひ雑厠し、うたたあひ入間す。光赫焜耀にして微妙奇麗なり。清浄に荘厳して十方一切の世界に超踰す。衆宝のなかの精なり。その宝、なほ第六天の宝のごとし。またその国土には、須弥山および金剛鉄囲、一切の諸山なし。また大海・小海・渓渠・井谷なし」等の教説である。この中『無量寿経』の文は、前項「国土寛狭」の議論の出拠となったものである。

『往生要集』「五妙境界」の論述によると、源信は極楽の国土は平坦であることを強調しているように見受けられる。

ところが、『無量寿経』には、続いて、「阿難、仏に白して言はく、〈世尊、もしかの国土に須弥山なくは、その四天王および忉利天は何によりてか住する〉と。仏、阿難に語る、〈第三の焔天、乃至、色究竟天、みな何によりてか住する〉と。阿難、仏に白す、〈行業の果報は不可思議なり〉と。仏、阿難に語る、〈行業の果報不可思議ならば、諸仏世界もまた不可思議なり。そのもろもろの衆生、功徳善力をもつて行業の地に住す。ゆゑによくしかるのみ〉」と、諸天が不可思議の果報によって住することを説いている。また、『無量寿経』巻下（『大正蔵』一二、二七八頁上）には、「その時仏、阿難および慈氏菩薩に告ぐ、〈なんぢ彼の国を見るに、地より以上浄居天に至るまで、その中のあらゆる微妙厳浄なる自然のもの、ことごとく見るとせんやいなや〉と。阿難対へて曰く、〈やや然り。すでに見る〉と」等と、極楽に地居天や浄居天等の諸天があることを説いている。

極楽に諸天が存在するということは、平坦であるということと矛盾するようにも思われる。『安養集』は、その問題を論じた要文を本項に集めて、『無量寿経』の教説を理解するために必要な資料を提示したのである。よって本項は、前項「国土寛狭」に引き続き、『往生要集』「五妙境界」の論述をきっかけとして設けられた論題であると言えよう。

『安養集』「50 世界安立」には、(342)〜(350) の九文が掲げられている。

冒頭の三文が出拠の経文である。(342)『平等覚経』巻上および (344)『無量寿経』巻上の前半部分には、極楽が広大にして平坦な世界であることを説く。『往生要集』「五妙境界」の記述の根拠となった文であり、また前項「国土寛狭」の問題の出拠でもある。それに加えて、(342) の後半部分には、娑婆では須弥山中にあると説かれる諸天も、極楽では虚空中にあると言い、(344) の後半部分には、極楽には須弥山等の諸山はないけれども、四天王天や忉利天、さらには焔天から色究竟天に至る諸天は、不可思議の果報によって住すると説かれている。(343)『大宝積経』無量寿如来会の文は、(344)『無量寿経』巻上の文の後半部分とほぼ同意である。

(345)『無量寿経述義記』は、(344)『無量寿経』巻上の文の註釈である。前項「国土寛狭」の項に掲げられた (334) の文と一部重なるが、前項では広大無辺を論じた部分を中心に提示し、本項ではその部分を省略して、極楽の荘厳が欲界第六天の荘厳に擬えられている所や、諸天のあり方について論じた所を中心に引用している。義寂の釈は、『無量寿経』弥陀果徳の文を、『浄土論』の二十九功徳に配当するところに特徴がある。『浄土論』は、極楽を三界を超過した処と見ているので、義寂もその立場に沿って註釈を施している。極楽には三界諸天はないけれども、娑婆の衆生が理解できるよう、それらの世界を例に挙げているだけだと言うのである。また義寂は、『無量寿経』には受用土の荘厳を説き、『観無量寿経』には変化土の荘厳を説くと言う。

(346)『十往生経』は、山海慧菩薩が仏の神通力に極楽の情景を見たことを説く一段である。あらゆるものが七宝で荘厳され、また黄金の羅網がかかっていると言う。この文は、『往生要集』大文第二「欣求浄土」の第五「快楽無退」の項にわずかに言及されている。『安養集』はその全貌を提示したと言える。

(347)『後出阿弥陀仏偈』の文は、極楽が平坦であることを言うもので、『往生要集』「五妙境界」の立場に等しい。ところで『後出阿弥陀仏偈』は、『往生要集』には用いられなかった文献であり、『安養集』には五箇所に引用されている。

(348)『無量寿経述義記』は、先述した『無量寿経』巻下の、極楽に地居天や浄居天などの諸天があることを説く文に対する註釈である。(345) にも述べられていたように、義寂は、『無量寿経』所説の極楽を、勝過三界の受用土と見るので、三界諸天を実在のものとは考えていない。『無量寿経』巻上（『大正蔵』一二、二七一頁下）に見える、「余方に因順するがゆゑに、天人の名あり」という文言によって、諸天のあり方を捉えている。さらに義寂は、色界の最高処である五浄居天は、不還果を得た声聞聖者の生処であるから、ここの聖者は大乗に回入できず、したがって極楽には往生できないのではないかという疑問を呈する。『成唯識論』などを用いて様々に議論を展開するが、結局は大乗究竟の教えによれば、みな往生することができると述べている。

(349)『無量寿経連義述文賛』も、(348) と同じく、『無量寿経』巻下の文の註釈である。憬興は、『密厳経』の教説を用いて、極楽の諸天のあり方を理解している。

(350)『観無量寿経』は、『往生要集』「五妙境界」の論述の根拠となった水想観の文である。

以上九文の中、(344)『無量寿経』と(350)『観無量寿経』とには、『往生要集』「五妙境界」の記述の根拠となった箇所を含んでいる。本項「50 世界安立」には、これらの文をきっかけとして見出された、極楽の構造や諸天のあり方という、『往生要集』には扱われなかった問題を論ずるための資料が列挙されているのである。

51 国土名号

(351) 阿弥陀経に云う(『大正蔵』一二、三四六頁下)、「ここから西方、十万億仏土を過ぎた所に極楽という世界がある」(要約)と。

(352) 同経義記天台に云う(『大正蔵』三七、三〇六頁下)、「極楽とは言うけれども、賢首仏の世界に較べると程度は低い。娑婆よりもましだというだけである。極楽は苦がないという意味であり、安養はそのはたらきによって付けられた名称、無量寿はそこにまします仏によって名づけられたものである」(要約)と。

(353) 同経疏基に云う(『大正蔵』三七、三一九頁上)、「経の、〈有世界名曰極楽〉は、第三に、国土の名号を挙げている。十八円浄の処円浄に当たる。『無量寿経』では安楽、古訳では須摩提と言う。『鼓音声王経』では安楽世界と言い、如来が生まれた国を清泰と呼ぶ。そこには転輪聖王が住み、十千由旬四方の城内には貴族ばかりがいると言う。国名のことは後に解説する」(要約)と。

(354) 同経にまた云う(『阿弥陀経』、『大正蔵』一二、三四六頁下)、「なぜ極楽と呼ぶのか。それは彼の国の衆生には苦がなく、ただ楽のみを受けるからである」(要約)と。

(355) 同経疏基に云う(『大正蔵』三七、三一九頁中)、「苦がないとは、『無量寿経』では、〈三悪道の苦難がなく、ただ快楽のみがある〉と言われる。『央掘摩羅経』(巻四、『大正蔵』二、五四三頁上?)では、〈少しの苦もなく、快楽のみあるので極楽と言う〉と説かれる。また八苦がないことを言う。蓮華化生だから生苦がない。老病がないので、老苦・病苦がない。十方浄土に意のままに往生できるので死苦がない。平等心を得ているので怨憎会苦がない。去留はあっても愛別離苦はない。欲するものは意のままなので、求不得苦がない。神通自在なので五盛陰苦がない。仏の姿を見、意のままに天楽を聞くので、極楽と言うのである」(要約)と。

(356) 同経略記に云う(源信『阿弥陀経略記』、『大正蔵』五七、六七四頁下〜六七五頁上)、「苦がないとは、八苦がないことを言う。蓮華化生には生苦がない。常に若いので老苦がない。四大調和を保っているので病苦がない。寿命無量なので死苦がない。死を選ぶことがあっても、生死は意のままになるので、死を苦としないのである。愛着の心もなく、離別ということもないので、愛別離苦がない。怨みの心もなく、敵もいないので怨憎会苦がない。何でも意のままになるので、求不得苦がない。地獄や餓鬼・畜生の責め苦がないので、五陰盛苦がない。本経は〈苦・楽・不苦不楽〉の三受によって説かれるので、身心を合わせて〈苦楽〉と言うが、『称讃浄土経』は〈憂・喜・苦・楽・捨〉の五受によって説かれるので、身の苦楽、心の憂喜を言う。『称讃浄土経』には、〈身心に一切の憂苦なく、ただ無量清浄の喜楽あり〉と言う。林・池・宮殿は眼の楽を生じ、諸天の伎楽や鳥・樹の音は耳の楽、妙香・飯食・宝衣・経行などは、鼻・舌・身の楽を生ずる。宝地柔軟等もまた身の楽を生ずる。仏法僧を念ずる等の功徳によって意の楽を生ずる」(要約)と。

(357) 称讃浄土経に云う(『大正蔵』一二、三四八頁下〜三四九頁下)、「彼の世界の有情は、身に一切の憂苦なく、ただ無量の喜楽のみあるので、極楽世界と名づけるのである。…中略…極楽に生まれた者はみな、不退転に住し、悪趣に堕することがない。常に諸仏の国土を行き来して、修行を重ね、かならず無上の悟りを得るだろう。だから極楽世界と名づけるのである」(要約)と。この経の、〈唯有無量清浄喜楽〉より〈生彼土者皆不退転〉に至るまで、おおよそ十三番、極楽の名を釈す。具に尽くすことあたはず。(この経の、〈唯有無量清浄喜楽〉から〈生彼土者皆不退転〉まで、十三番にわたって極楽の名を釈している。すべてを引用することはできない)。

(358) 無量寿経上に云う(『大正蔵』一二、二七一頁中)、「地獄・餓鬼・畜生の苦難については、それを耳にすることさえなく、ただ心地よい音が聞こえてくるのみである。よってこの国を安楽と名づける」と。

(359) 同経述義記中に云ふ(義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸)、「経の、〈無有三途苦難之名〉より〈名曰安楽〉に至る。述して曰く、これすなはち第十一に、第十五無諸難功徳を顕す。謂く、彼土の中には、三悪趣なし。このゆゑに快楽常に無間なり。論の偈に、〈永く身心の悩を離れ、楽を受くること常に無間なり〉と云ふがごときゆゑに。転識の中、多分楽にして、ともに苦・捨なきがゆゑに、楽無間なり」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「経の〈無有三途苦難之名〉より〈名曰安楽〉までは、第十一に、第十五無諸難功徳を明かす。極楽には地獄・餓鬼・畜生の三悪趣がない。よって快楽が途絶えない。『浄土論』の偈には、〈身心の苦悩永久になく 快楽は常に途絶えない〉と説かれている。心の表面に現れる感覚のほとんどが楽であって、苦や不苦不楽の感覚がないから、快楽が途絶えないと説かれるのである」と。

(360) 観経疏闇上に云ふ(道闇『観経疏』巻上、古逸)、「第一に名とは、もし受用の者に就いて名を立つれば、すなはち極楽世界また安楽と名づく。能縁生の楽受の中、最勝なる

をもってのゆゑに、極楽と名づく。この楽は退することなきがゆゑに安楽と名づく。これすなはち能受用の心に従って名を立つ。もし阿弥陀仏国と名づくるは、すなはち化主に縦（ママ）（縦＝従？）って名を立つるなり。もし通相に就かば、すなはち位（ママ）（位＝？）浄土と名づく。この世界には五濁未（ママ）（未＝？）あることなきを明かすがゆゑに浄と称す。この世界はこれ衆生所居の処なり。ゆゑに名づけて土となし、また国と名づけ、また仏刹と名づく。並びに文に約して弁ずれば、また名づけて園となす。浄土の中には多く宝樹・宝林等の前成するがゆゑに、名づけて園となす」と。

【現代語訳】道闇『観経疏』巻上に云う、「第一に国土の名について。受益者の側から名づければ、極楽世界あるいは安楽と名づけられる。縁によって生ずる快楽の中、最も勝れた楽であるから、極楽と名づけられるのである。この快楽はなくなる心配がないので、安楽と名づけられる。受益者の心情による命名である。阿弥陀仏国という名は、教化の主による命名である。すべての仏に共通する名としては、浄土と呼ばれる。五濁がないので浄と言い、衆生が居住するので土あるいは国と名づけ、また仏刹と言う。文意に即して論ずるならば、園と名づけることもできる。浄土の中には宝樹・宝林などがあらかじめ用意されているので、園と言うのである」と。

（361）群疑論六に云う（『大正蔵』四七、六五頁中～下）、「問う。『阿弥陀経』に、〈極楽の衆生には苦なく、楽だけを受ける〉と言うが、その受楽と相応するのは八識の中のどれか。答え。他所と同様、極楽においても、第七・第八の識はただ捨受のみと相応する。他の六転識は喜・楽・捨の三受と相応する。第六意識は喜・楽受と相応し、前五識は楽受と相応する。『称讃浄土経』には、〈一切の身心に憂・苦なく、ただ清浄の喜・楽のみあるので、極楽世界と名づける〉と説かれている。浄土では六識の中に憂・苦がないということであり、捨受があることは否定されていない。喜・楽の心が静まると、心は捨受と相応するのである。極楽の衆生が禅定を修する時、四静慮の初禅の準備段階から第四禅以上の境地に至れば、必ず捨受と相応することになろう。極楽といえども捨受とは相応するのである」（要約）と。

（362）同論六に云う（『群疑論』巻六、『大正蔵』四七、六四頁下～六五頁中）、「問う。浄土には苦がないと言うが、三苦・八苦の中、どの苦がないと言うのか。答え。小乗の『婆沙論』等によれば、仏身にも三苦があり、また八苦の中、生・老・病・死・五取蘊苦の五苦がある。愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦だけがない。大乗では、仏においては五蘊・十二処・十八界がみな無漏であると説かれるから、仏身には苦がない。凡聖の菩薩においては、二説がある。第一説によると、三苦の中では行苦と壊苦とがあり、苦苦はないと言う。八苦の中では五取蘊苦だけがある。菩薩は有漏の変易・分段の報を受けるからである。極楽には身心を逼迫する憂苦がないので、苦苦はないのである。また往生には生苦がなく、無量寿なので死苦がなく、四大安穏なので病苦がなく、身体の衰えがないので老苦もない。勝友が常に居て愛別離苦がなく、悪人がないので怨憎会苦がなく、常に豊かなので求不得苦もない。第二説によると、八苦については第一説と同じであるが、三苦の中では行苦のみがあると言う。分段・変易の報を受けるけれども、楽受が相続して途絶えることなく、ついには寂滅の楽を受けるので、壊苦はないと言うのである。

問う。行苦があるのになぜ極楽と名づけることができるのか。（以下答えの文が欠落しているので、小字で補っておきたい……筆者註）答え。三苦の中の一苦、八苦の中の一苦だけなので、苦がないと言ってもよい。身心に逼迫の憂苦がないから、極楽と名づけるのである。

問う。『観無量寿経』に、〈分身の化仏・化菩薩が極楽世界に集まって苦の衆生を度す〉と言うが、極楽には苦の衆生はないのではないか。答え。極楽の衆生には苦はないけれども、分段・変易生死の行苦がある。そのために妙法を説いて二種生死を脱せしめ、法身を成就させるのである。また他方国土の衆生に対しては、命終に来迎して極楽に往生させたり、還来して利益したりする。あるいは度苦衆生とは、極楽の菩薩に大悲心を起こさせ、極楽を捨てて他方国土に生まれ、有縁の衆生を教化させることを言うのである」（要約）と。

（363）同論四に云う（『群疑論』巻四、『大正蔵』四七、五六頁中～下）、「問う。過去世に重罪を造る者は、たとえ聖果を得ても、なお悪業の定報を受けると説かれる。（聖果を得た後に投獄された）離越阿羅漢のように（『雑宝蔵経』巻二、『大正蔵』四、四五七頁中）。重罪を造った者が極楽に往生した場合、彼は苦を受けるのか否か。答え。穢土において聖果を得たとしても、穢土の身は苦身であるので、苦果を受けることもある。一方、たとえ聖果を得られなくても、極楽の身は浄身である。仏を見、法を聞いて大乗を修行し、仏の本願に守られているので、苦報を受けることはない。浄土に往生すれば、凡夫であっても悪報を受けることはない。阿闍世王が苦を受けなかったように」（要約）と。

（364）無量寿経下に云う（『大正蔵』一二、二七八頁中）、「仏智を疑ったために七宝の宮殿の中に生れ、何の罰もなく、いやな思いをすることもないが、五百年間三宝に遇うことができず、仏を供養したり善を行ったりすることもできない。それが苦なのである」（要約）と。前後の文は具には胎生の中に尽くすがごとし（前後の文は、巻七「66 四生分別」（500）に全文を引用する）。

（365）大阿弥陀経下（『大正蔵』一二、三一〇頁中）、「疑城の中は忉利天のように快適であるが、そこから脱出することはできず、阿弥陀仏を見ることもできない。ただ光明を見て後悔し、歓喜するのみで、経を聞くことも、極楽の聖衆や菩薩、阿羅漢の姿を見ることもできない。そのようなことが苦しみなのであり、むしろやや快適であるとさえ言える」（要

約）と。前後の文は具には胎生の中のごとし（前後の文は、巻七「66 四生分別」（498）に引用する）。

（366）後出阿弥陀仏偈に云う（『大正蔵』一二、三六四頁中）、「その世界の名は清浄　仏は無量と名のられる　国土は平らにして安穏　法楽の尊者満ちている」と。

（367）無量寿経下に云う（『大正蔵』一二、二七三頁上）、「諸仏は菩薩に告げたまう　安養の仏を仰ぎ見よ　教えを聞いて修行して　はやく浄土に往生せよ」と。

（368）また云う（『無量寿経』巻下、『大正蔵』一二、二七三頁上）、「あらゆる世界に趣いて　億の如来に給仕して　恭敬歓喜したのちに　安養国に帰還する」と。

（369）宝積経第十八に云う（無量寿如来会、『大正蔵』一一、九七頁上）、「極楽世界には悪趣の名さえなく、煩悩という言葉さえもない。地獄・餓鬼・畜生、八難、苦受・不苦不楽受もない。概念さえもないので、まして現実の苦などない。よって極楽と名づけるのである」（要約）と。

【考察】

本項「51 国土名号」には、極楽の名義に関説する要文が集められている。

『往生要集』には、この問題が特に議論された形跡はない。ただし大文第二「欣求浄土」には、極楽の特徴が「十楽」として示されていて、その一々が極楽の名義であると考えられよう。ことに第五「五妙境界」の項に見える、「三塗苦難の名あることなくして、ただ自然快楽の音のみあり」や、第六「快楽無退」の項に見える、「処はこれ不退なれば、永く三途・八難の畏れを免れ、寿もまた無量なれば、つひに生老病死の苦なし。心・事相応すれば愛別離苦なく、慈眼をって等しく視れば怨憎会苦もなし。白業の報なれば求不得苦なく、金剛の身なれば五盛陰苦もなし。一たび七宝荘厳の台に託しぬれば、長く三界苦輪の海と別れぬ。もし別願あれば、他方に生ずといへども、これ自在の生滅にして、業報の生滅にはあらず。なほ不苦・不楽の名すらなし。いかにいはんやもろもろの苦をや」等の論述は、極楽という名称の所以を説くものと言えよう。これらの記述の出拠を求め、さらに議論を深めるために、『安養集』はここに「51 国土名号」という論題を立てたものと思われる。

本項には十九の要文が掲げられている。冒頭（351）『阿弥陀経』は、「極楽」という名称を掲げた文であり、（352）天台『阿弥陀経義記』と（353）伝基『阿弥陀経疏』はその釈文である。

（354）『阿弥陀経』は、無苦のゆえにという極楽の名義を説く文であり、（355）伝基『阿弥陀経疏』と（356）源信『阿弥陀経略記』はその釈文である。それらの文には、四苦八苦の有無や、憂・喜・苦・楽・捨の五受の有無などが議論されていて、『往生要集』「五妙境界」「快楽無退」の記述の拠り所となったものと考えられる。

（357）『称讃浄土経』は不退転のゆえに悪趣に堕ちる苦難がないということをもって極楽の名義とする文、（358）『無量寿経』は三途苦難の名さえないことを言う文であり、（359）義寂『無量寿経述義記』は、その釈文である。これらは、『往生要集』「五妙境界」の記述の拠り所と言える。

（360）道鬫『観経疏』には、阿弥陀仏国の種々の名称の由来が述べられている。極楽の名義を論ずる際の基本情報を提示した要文であると言えよう。

（361）『群疑論』は、喜・楽・捨の三受と八識との相応関係を論ずる文、（362）『群疑論』は、三苦・八苦の有無を論ずる文であり、共に『往生要集』「快楽無退」の議論を深める意図で挙げられたものと思われる。

（363）『群疑論』は、穢土の聖者は苦報を受けることもあるが、浄土の凡夫は苦報を受けないことを主張する文で、『往生要集』には見られなかった視点である。

（364）『無量寿経』（365）『大阿弥陀経』は、疑城の胎宮で受ける苦について説かれた文である。『安養集』はこの問題を巻七「四生分別」の項において本格的に取り上げているが、本項でも苦受の有無という観点から、出拠の経文の一部を掲示しているのである。

（366）『後出阿弥陀仏偈』は、「清浄」という名称を挙げた文、（367）（368）『無量寿経』は、「安養」という名称を挙げた文である。（369）『大宝積経』無量寿如来会は、三途や八難などがないことを説く文であるが、『無量寿経』の諸訳の中「極楽」という名称をあげた唯一の経であることを示す意図で挙げられたものと思われる。

52　極楽清泰同異

（370）群疑論六に云う（『大正蔵』四七、六三頁下～六四頁中）、「問う。極楽には女人はいないと説かれる。ところが『鼓音声王経』（『大正蔵』一二、三五二頁中）には、〈阿弥陀仏の国を清泰と言う。聖王の住む世界で十千由旬四方の広さである。仏の父は月上転輪聖王、母は殊勝妙顔という名である〉等と言う。女人のいない世界に母がいるのはなぜか。答え。三説ある。第一に、『観無量寿経』には受用身の仏を示されるので父母はない。それに対し『鼓音声王経』には変化身の仏が示される。分段生死の者を教化するため、父母より生まれる胎生の仏身を現されたのであると言う。第二に、父母や城邑は仏の功徳を表す譬喩表現である。『維摩経』（巻中、『大正蔵』一四、五四九頁下）に、〈智度は菩薩の母、方便をもって父となす〉と言うようなものである。清泰とは清浄の法界を、城の広さ十千由旬とは仏の大円鏡智の功徳を表している。月上は金剛三昧、殊勝妙顔は般若殊勝を意味

する。阿弥陀仏に胎生の父母があるのではない。第三に、『悲華経』等によると、菩薩が生まれた国で修行して等正覚を成就した時、その世界は何ら変化せず、世界の名も時間も何も変わらないということもあるが、世界は変化しないけれども、名と時間とは別のものになったり、世界が変化して以前より勝れたものになり、名も時間もがらっと変わったりすることもある。あるいは、生まれた世界と等正覚を成就する世界とが別であるということもある。それは菩薩の発願の内容によって生ずる違いである。『法華経』によると、龍女は娑婆の畜生道に生まれ、南方無垢世界で等正覚を成就した。また華光如来は胎生で生まれ、浄土で等正覚を成就した。『鼓音声王経』の阿弥陀仏も同様である。清泰国で胎生の身を受け、極楽で等正覚を成就したのである」（要約）と。

無量寿経連義述文賛中に云ふ、女人有無の中にこれを抄す。

【現代語訳】憬興『無量寿経連義述文賛』巻中に云う、「86 女人有無」の項（655）に抄出している。

浄土論上加才に云ふ、土体相の中にこれを抄するがごとし。

【現代語訳】迦才『浄土論』巻上に云う、「58 国土」の項（423）に抄出している。

観経記上興に云ふ、女人有無の中にこれを抄するがごとし。

【現代語訳】龍興『観経記』巻上に云う、「86 女人有無」の項（670）に抄出している。

安楽集上道に云ふ、土体相の中にこれを抄するがごとし。

【現代語訳】道綽『安楽集』巻上に云う、「58 国土」の項（417）に抄出している。

阿弥陀経疏基に云ふ、体相の中にこれを抄するがごとし。

【現代語訳】伝基『阿弥陀経疏』に云う、「58 国土」の項（419）に抄出している。

【考察】

本項「52 極楽清泰同異」には、『鼓音声王経』所説の清泰国と極楽との相違に関する問題が取り上げられている。

『往生要集』では、この問題は大文第十「問答料簡」の第一「極楽依正」の第十四・十五・十六・十七問答に扱われている。まず第十四問答に、阿弥陀仏に極楽以外の国土があるのかと問いを発し、答えて、浄土と穢土とがあるという『大智度論』巻三十二（『大正蔵』二五、三〇二頁下）の説を挙げる。次いで第十五問答で、その穢土とは『鼓音声王経』所説の清泰国であるとする道綽『安楽集』巻上（『大正蔵』四七、六上）の文を紹介する。次いで源信は第十六問答を設け、極楽・清泰以外にも阿弥陀仏の国はあるのかと問い、答えて、菩薩・如来は一切処に遍満するので、その国土も無限であると説く『華厳経』の偈を二つ（八十巻本の巻七・五、『大正蔵』一〇、三五頁中・二二頁中）引用する。さらに第十七問答には、如来が世界中に遍満するのは衆生無辺のゆえであると述べ、その根拠として『華厳経』の偈（八十巻本の巻五、『大正蔵』一〇、二五頁上）をもう一つ引用している。

この議論を承けて『安養集』はここに「52 極楽清泰同異」という論題を掲げたものと思われる。

（370）『群疑論』は、この問題に対する三つの観点を提示している。第一は、極楽を受用土・清泰を変化土と見る立場、第二は、清泰国に説かれる父母等を比喩的な表現と見る立場、第三は、阿弥陀仏は清泰国で胎生の身を受けた後、極楽において成仏したとする立場である。『往生要集』所掲の『安楽集』の見解を補う論述であると言える。

『安養集』が要文を提示するのはこの一文のみであるが、続いて五つの書名を挙げて、本書中の他所の参照を求めている。

その第一は、「86 女人有無」の項に引用された（655）憬興『無量寿経連義述文賛』巻中（『大正蔵』三七、一五二頁下～一五三頁上）の文で、そこには（370）『群疑論』とほぼ同様の論述がなされている。第二の、「58 国土」の項に引用された（423）迦才『浄土論』巻上（『大正蔵』四七、八四頁上～八五頁中）では、変化土の例として清泰国を挙げている。第三の、「86 女人有無」の項に引用された（670）龍興『観経記』巻上（古逸）には、清泰国は阿弥陀仏の穢土であると言う。第四の、「58 国土」の項に引用された（417）道綽『安楽集』巻上（『大正蔵』四七、五頁下～六頁中）は、『往生要集』「極楽依正」第十五問答に源信が引用した箇所を含む長文である。第五の、「58 国土」の項に引用された（419）伝基『阿弥陀経疏』（『大正蔵』三七、三一一頁中～三一二頁上）では、清泰国を化土と見ている。

（370）『群疑論』の引用に続いて、右の五つの書名を列挙することにより、この問題に触れた諸文献を認知させ、議論の展開を把握させようとしたものと思われる。『安養集』の指示に従って諸文献の記述を参照すると、（370）『群疑論』が、この問題に関する最も詳細な議論であることがわかる。『往生要集』に挙げられた『安楽集』は、この問題に触れた最初の文献であり、『群疑論』がその後の議論を集成し整理したことが知られるのである。

53　上下分別

（371）観無量寿経疏天台に云う（『大正蔵』三七、一八八頁中）、「娑婆は不浄に満ちた凡聖同居穢土である。安養は清浄であり、涅槃に向かう正定聚の菩薩の住処で、凡聖同居の上品浄土である」（要約）と。

（372）同経顕要記上に云ふ（源清『観経疏顕要記』巻上、古逸）、「上品とは、しばらく彼に諸悪なきに約し、娑婆に望むをもって、上と云ふのみ」と。

【現代語訳】源清『観経疏顕要記』巻上に云う、「上品浄土とは、極楽には諸悪なく、また

娑婆に較べればということで上品と言うだけである。」

(373) 阿弥陀経義記天台（『大正蔵』三七、三〇六頁下）、「依報について、まず遠近を明かして、〈ここより西方、十万億仏土を過ぎて、極楽という国がある〉と言う。賢首世界に較べれば下品であるが、娑婆に較べて極楽と言うのである」（要約）と。

(374) 同経略記に云う（源信『阿弥陀経略記』、『大正蔵』五七、六七九頁下～六八〇頁上）、「問う。諸仏浄土の中では極楽は下位だと言われるのに、専ら極楽への往生を勧めるのはなぜか。答え。極楽にはあらゆる浄土の荘厳が備わっている。決して下位ではない。

問う。『華厳経』寿量品（八十巻本巻四十五、『大正蔵』一〇、二四一頁上～中）には、〈娑婆の一劫は極楽の一日、極楽の一劫は袈裟幢世界の一日に当たり、乃至最後世界の一劫が勝蓮華世界の一日に当たる〉と言う。これによって極楽が下品世界ではることは明白である。答え。勝蓮華世界以下の諸国に較べればその通りであるが、すべての国土の中ではそうではない。天台の義記にも、賢首世界に較べれば下品であるが、娑婆に較べて極楽と言うと述べられている賢首は勝蓮華国の仏である」（要約）と。

(375) 無量寿経上に法蔵比丘の願を説く中に云う（讃仏偈、『大正蔵』一二、二六七頁中）、「恒河沙ほどの仏国を　残らず照らし尽くしたい　成仏とげたその時は　最高の国を建立し　すべての人を摂め取り　清浄安穏与えたい」（要約）と。

(376) 同経述義記中に云ふ寂法師（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「浄土を求むる中、二頌には多仏国を挙げ、三頌には自土の勝なるを願ふ。身を求むる中には、余仏と斉しきを願ふ、土を求むる中には、余土に勝るを願ふ。身の中には、実徳に約するがゆゑに余聖と斉しきを求め、土の中には、化の宜しきに拠るがゆゑに、余土に勝るを求む。これ互に倚って義顕はるも、理はすなはち斉しきなり」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「法蔵菩薩が浄土建立の願いを立てる中、第二頌には多仏国を挙げ、第三頌には自らの国土の勝を願われる。仏身を求めるに当たっては、諸仏と等しい身を願い、仏土を求めるに当たっては、諸仏国土よりも勝れた世界を願われる。仏身は、真実功徳という観点から諸仏と等しい身を求め、仏土は、衆生教化を自在に行うことができるようにという観点から諸仏国土よりも勝れた機能を求められたのである。身と土とは異なるけれども、道理は一貫している」と。

(377) 同経連義述文賛中に云う擾興（憬興、『大正蔵』三七、一四九頁上）、「経の、〈譬如恒沙〉より〈威神難量〉までは、第二に浄土の果を明かす、三段の初段に当たり、諸仏の国土を讃えている。…中略…経の、〈令我作仏〉より〈而無等雙〉までは、第二段に当たり、浄土の建立を願っている。極楽の衆・座・快楽が第一であるようにということである。第一とは、極楽よりも劣った世界に対する表現である。そうでなければ『華厳経』の教説に違うことになる」（要約）と。

(378) 平等覚経上に言う（巻一、『大正蔵』一二、二八〇頁中～下）、「恒河沙ほどの仏国を残らず照らし尽くしたい　成仏とげたその時は　最高の国を建立せん」（要約）と。

(379) 宝積経第十七無量寿会の一に云う（無量寿如来会、『大正蔵』一一、九三頁上）、「大光明の徳を得て　恒沙の仏国照らしだし　勝進力を傾けて　無双の浄土を建立せん」（要約）と。

(380) 大阿弥陀（＋経上に云う?、『大正蔵』一二、三〇八頁上）、「阿弥陀仏の国は、諸仏の国のどこよりも勝れている。それは因位の時の立てられた誓願がすばらしく、また精進邁進して功徳をかさねてこられたからである」（要約）と。

(381) 平等覚経上に云う（巻二、『大正蔵』一二、二八九頁下）、「無量清浄仏の国は、諸仏の国のどこよりも勝れている。それは因位の時の立てられた誓願がすばらしく、また精進邁進して功徳をかさねてこられたからである」（要約）と。

(382) 無量寿経上に云う（『大正蔵』一二、二七〇頁上）、「阿弥陀仏の国土は、七宝が自然に合わさってできており、どこまでも広々と限りがない。第六天上の宝玉のように、清らかに輝く荘厳は、他のどの世界よりも勝れている」（要約）と。

(383) 同経義疏法位上に云ふ（法位『無量寿経義疏』巻上、古逸）、「〈清浄〉の下は、諸方に比ぶるものなし」と。

【現代語訳】法位『無量寿経義疏』巻上に云う、「〈清浄〉以下は、どこよりも勝れていることを言う」

(384) 同経述義記寂法師中に云ふ（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「悲華経に説く、〈観世音菩薩、発願して言はく、乃至宝蔵如来、すなはち授記して云ふ、無量寿仏、般涅槃しをはりて、第二の恒河沙等阿僧祇劫の後分の、初夜分の中に、正法滅尽す。後夜分の中に、土、転じて一切珍宝所成就世界と名づけ、所有の種々の荘厳、無量無辺なり。安楽世界も及ばざるところなり。汝、後夜に金剛座に坐し、一念の中に、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、遍出一切光明功徳山王如来と号す〉と。また云ふ。問ふ。もし法蔵比丘、その時すでに証発心を発さば、何のゆゑに論に、〈法積比丘は功徳力薄く、上妙の国土を見ることあたはず。このゆゑに阿弥陀国は華積世界にしかず〉と云ふや。答ふ。国土の勝劣は、その義不定なり。彼は上位の所見に望む。このゆゑに華積世界にしかず。その時はじめて初地の位に登らざるがゆゑに。また先づために二百一十億の土を説く、この時、いまだ初地の位に登らざるがゆゑに」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「『悲華経』に説く（巻三、『大正蔵』三、一八六頁上）、〈観世音菩薩が発願して言う、…中略…宝蔵如来が授記しておっしゃった、

無量寿仏が般涅槃されてから、第二の恒河沙等阿僧祇劫を過ぎた後、初夜の時に正法が滅尽し、後夜の時には、国土が変化して、一切珍宝所成就世界となる。その荘厳のすばらしさは、安楽世界も及ばないほどである。汝はその後夜の時に金剛座に坐して、あっという間に無上の悟りを成就し、遍出一切光明功徳山王如来と名のるであろう〉と。

また云う。問う。もし法蔵比丘がこの時すでに証発心を発しているとすると、論（『大智度論』巻十、『大正蔵』二五、一三四頁中）にはなぜ、〈法積比丘は功徳力が薄く、上妙の国土を見ることができない。よって阿弥陀の国は華積世界に及ばない〉と説かれるのか。答え。国土の勝劣は、相対的なものである。『大智度論』では上位の菩薩が見る世界のことが論ぜられているので、華積世界には及ばないと説かれるのである。その時、法蔵比丘が初めて初地位に到達したからである。また『無量寿経』では、あらかじめ如来が法蔵比丘に二百一十億の仏土のことを説かれている。その時には法蔵比丘は、初地位に到達していなかったのである」と。

(385) 阿弥陀経疏基に云う（『大正蔵』三七、三一一頁下）、「『華厳経』に、〈娑婆の一劫は極楽の一日、極楽の一劫は袈裟幢世界の一日に当たる〉と言う。『首楞厳経』には、〈文殊は未来に南方で成仏して普現色身と名のる。その国土は阿弥陀の国よりも勝れている〉と言う。『観音授記経』には、〈金光師子遊戯仏の国土や観世音が未来に成仏する国土は、阿弥陀仏の国土よりもずっと勝れている〉と云う」（要約）と。

(386) 観無量寿経に云う（『大正蔵』一二、三四一頁中～下）、「その時世尊は、眉間より光を放たれた。その光は十方世界を隈なく照らして世尊の頭上にとどまり、須弥山の形をした黄金の光の台を現出した。世尊は、その光台の上にすべての仏国土を現して、韋提希に見せられた。それを見た韋提希が、〈この中、私は極楽世界の阿弥陀仏の所に生まれたいと思いますので、その方法をお教えください〉と言った」（要約）と。

(387) 同経義疏に云う恵遠（浄影『観経義疏』本、『大正蔵』三七、一七八頁上）、「問う。釈尊はなぜ極楽だけを現出されなかったのか。答え。すべての国土を現さなければ、極楽が最勝であることを知らせることができず、甚深の願いを起こさせることができなかったからである」（要約）と闇疏これと同じ（道間『観経疏』、古逸）。

(388) 観無量寿経序分義に云う善導（『大正蔵』三七、二五八頁中）、「以下は、韋提希が見た十方仏国の中、極楽荘厳が最高であったことを明かす。だから極楽に生まれたいと言ったのである。

問う。十方諸仏国は、同じく浄土であるのに、なぜこのような優劣があるのか。答え。浄土の優劣は凡夫には判断できない。ただ仏は、我らの機根に応じて利益を施すために、極楽が勝れていることだけを顕わされたのであろう」（要約）と。

(389) また同経義疏に云う恵遠（浄影『観経義疏』末、『大正蔵』三七、一八二頁下）、「仏国土には麁妙の差別がある。麁処には小乗が雑し、分段生死の凡夫もいる。妙処は大乗のみで、変易生死の聖人だけがいる。極楽は浄土の中では麁処である。もっと上がある。この経には説かれないが、『花厳』には詳しく示されている」（要約）と。

(390) 浄土論上に云う加才（迦才、『大正蔵』四七、八六頁上～中）、「東方妙喜世界などは下の浄土で男女が混在している。西方極楽世界は中の浄土で、二乗が混在している。上方衆香世界は上の浄土で、二乗はいない。これら三段階の浄土はみな欲界の中にある。人・天別住の処があるからである。色界だと天のみで人はないし、三界の外だと人天の住処はないはずだからである。浄土に三段階あるように、穢土にも三段階がある。斯訶は中の穢土で、三角の沙石ばかりで、雨は年に二度しか降らない。草を食い樹皮を着て、生きることも死ぬこともままならない。下の穢土は、善悪の区別なく虎狼毒蛇に食われる。娑婆は、仏が世に出で、菩提心を発す人もある。地より作物が生じ、人には礼儀がある、上の穢土である」（要約）と。

【考察】

本項「53 上下分別」には、十方諸仏国土の中での極楽浄土の位置について議論するための要文が集められている。

本項に扱うのはいわゆる三身三土の判別に関する議論ではない。三身三土の判別は、『安養集』巻六「58 国土」および巻八「71 三身分別」の項に扱われている。『観無量寿経』『無量寿経』等に説く阿弥陀仏や極楽浄土が法・報・応の三身三土のいずれであるかを論ずるものである。その議論は、『往生要集』では、大文第十「問答料簡」の第一「極楽依正」の第一問答に取り上げられ、源信は、天台や浄影の応身応土説と、道綽の報身報土説とを挙げている。

『安養集』が本項「53 上下分別」に取り上げたのは、それとは異なり、極楽は十方諸仏の国土と較べて、上位に位置するのか、あるいは下位なのかという問題である。

『往生要集』では、大文第三「極楽証拠」の第一「対十方」において、諸仏の浄土には優劣の差別がないと説かれるのに、なぜひたすら極楽のみを誉め讃え、往生極楽だけを勧めるのかと問いを発し、答えて、どこも同じだが、心を一点に集中させるために極楽一つだけを選ぶのであると言い、加えて、阿弥陀仏と娑婆の衆生とは特に縁が深いということを主張している。その文証として、第一に『十疑論』より、本願による救済（『無量寿経』）と光明摂取（『観無量寿経』）、および法滅後の留経（『無量寿経』）を説く文を引用し、第二に『西方要決』より、重ねて法滅後の留経（『無量寿経』）を説く文、第三に『群疑論』

より、阿弥陀仏が娑婆の衆生と縁が深いので名を称えて念ずれば三昧の境地に入ることができる（『般舟三昧経』）ことを説く文を引用し、最後に、観音・勢至はもと娑婆で修行したという説（『無量寿経』）を紹介している。これ以外に極楽と十方との対比を述べた箇所はない。『往生要集』では、極楽と十方諸仏国土との優劣は明示されなかったのである。

但し源信は、晩年に顕わした『阿弥陀経略記』にこの問題を取り上げていて、その文は『安養集』が本項に引用している。

本項所引の（374）『阿弥陀経略記』には、諸仏浄土の中では極楽は下位だと言われるのに、なぜ専ら極楽への往生を勧めるのかと問い、『華厳経』寿量品の文を挙げて、勝蓮華世界以下の諸国に較べれば下品であるが、すべての仏国土の中では決して下位ではないと答えている。

この文をきっかけとして、『安養集』はここに「上下分別」という論題を立てたと言えよう。

（371）天台『観経疏』には、極楽は凡聖同居上品浄土であると説かれる。天台浄土教の基本的立場を示す文であり、三身三土義でも出拠の要文として用いられる。（372）源清『観経疏顕要記』は（371）の釈文で、上品とは娑婆に較べて上品と言うのみであると説かれる。これは（374）源信『阿弥陀経略記』と同じ立場で、源信の論述の拠り所として挙げられたものと言える。

（373）天台『阿弥陀経義記』には、極楽は賢首世界に較べれば下品だが、娑婆に較べて極楽と言うのであると述べられている。（374）源信『阿弥陀経略記』は、その釈文である。以上の四文は、源信の見解およびその拠り所となった要文である。

次いで（375）以降には、源信が言及しなかった『無量寿経』の教説と、その関連の要文が並んでいる。（375）『無量寿経』は讃仏偈の一節で、極楽が諸仏国中第一であることを説く部分である。（376）義寂『無量寿経述義記』と（377）憬興『無量寿経連義述文賛』は、その釈文で、共に極楽の優位を主張している。ただし憬興は『華厳経』の文に触れて、極楽が最高ではないことを付言している。（378）『平等覚経』（379）『大宝積経』無量寿如来会は、讃仏偈の異訳である。（380）『大阿弥陀経』（381）『平等覚経』（382）『無量寿経』には、極楽が諸仏国土よりも勝れていることが説かれている。（383）法位『無量寿経義疏』は（382）の釈文である。以上九文は、『無量寿経』によって極楽の優位を主張する要文である。

次の（384）義寂『無量寿経述義記』は、右の九文とは違った観点を示す文で、『悲華経』や『大智度論』によって、極楽世界が最高ではないことを説いている。（385）伝基『阿弥陀経疏』も、『華厳経』や『観音授記経』によって、極楽よりも上位の仏土があることを説く。就中『華厳経』の文は、極楽を低く評価する際の典拠として、隋唐以来しばしば取り上げられていて、源信『阿弥陀経略記』にも言及されている。よって（384）（385）は、源信の論述の源流を示し、さらにそれを補佐する要文であると言える。

（386）『観無量寿経』は、釈尊が光台に現出した諸仏国の中から、韋提希が極楽を選び取ったことを説く文である。（387）浄影『観経義疏』（388）善導『観経疏』はその釈文で、釈尊が意図的に極楽を選ばせたことを主張している。

（389）浄影『観経義疏』は、麁妙に約して、極楽が諸仏浄土の中では下位であることを説き、（390）迦才『浄土論』は、極楽は三界内の中浄土、娑婆は上穢土で、互いに近接していることを説いている。いずれも極楽が下位の浄土であることを主張している。

以上二十文を概観すると、（371）～（374）は、源信『阿弥陀経略記』に関連する文で、源信の論述とその拠り所である。（375）～（383）は『無量寿経』によって極楽の優位を説く要文で、これは源信が扱わなかった論点である。（384）（385）は極楽が諸仏浄土の中では下位にあることを説く文で、これらは源信の論述と関連する。（386）～（388）は『観無量寿経』によって極楽の優位を説く要文で、これは源信が扱わなかった論点である。（389）（390）は極楽の下位を主張する要文で、やはり源信が扱わなかった論点である。

54　三界摂不摂

（391）安楽集上道綽に云う（『大正蔵』四七、七頁上～中）、「第九に、阿弥陀仏の浄土は、三界の中に摂まるのか否かを明かす。問う。極楽は三界の中、どの世界に摂まるのか。答え。極楽は勝れた世界である。それに対して三界は、生死を繰り返す凡夫の世界で、苦しみ多く、厭うべき世界である。よって浄土は三界には摂まらない。『大智度論』（巻三十八、『大正蔵』二五、三四〇頁上）には、〈浄土の果報には、欲がないから欲界ではない。地上に住するので色界ではない。形があるから無色界ではない〉と言う。地上に住するとは言っても、絶妙の所である。それゆえ『浄土論』には、「極楽世界を観ずれば　三界穢土を超えている　虚空のようにどこまでも　無限の彼方に行きわたる」と説かれ、『讃阿弥陀仏偈』には、「広大無辺の極楽の　自然の七宝荘厳は　本願力によって立つ　救いの仏を礼拝す　光溢れる世界には　季節の別なく穏やかで　自利利他の徳円満す　荘厳功徳を頂礼す」と歌われているのである」（要約）と。

(391) 観経記興に云ふ（龍興『観経記』巻上、古逸）、「問ふ。智度論に云ふ、〈地居のゆゑに色界にあらず〉と。今何ぞ空に在りと言ふや。答ふ。もし浄土を論ずるに、地によって成ぜらるといはば、なほ穢土のごとし。欲界の上天は、空にありといへども、地界によって摂せらるるがゆゑに。弥陀仏は地によりて安座し、諸の往生の輩は品に随って仏に近づ

く。ここをもって空にあって近く慈顔を見るなり。また云ふ、すでに段食あり。欲界の繋なるやいなや。答ふ。その義不定なり。安恵等の宗には、土は定んで繋せず、その往生者は義に随って不定なり。余の論師の宗には、土もまた不定なり。もし皆、順対治して回向発願し浄土に生ずることを得ることあらば、また印（印＝既に？）発業・潤生あるにはあらざること、定義のごときをもってのゆゑに、三界の摂にあらず。ゆゑに智度論に、〈かくのごとき浄土は、三界の摂にあらず。欲なきがゆゑに欲界にあらず、地居のゆゑに色界にあらず、形色あるがゆゑに無色界にあらず〉と。また瑜伽論に、〈清浄世界には、欲界・色界・無色界なし〉と。もし三界の外には衆生なしの義によらば、また三界の摂なり。仁王経のごときは、〈一切衆生の煩悩は三界を出でず。一切衆生の果報の二十二（十根？）も三界を出でず。諸仏の応化の法身もまた三界を出でず。このゆゑに我は言ふ、三界の外に別に衆生ありとは、外道の大有経の中の説にして、七仏の所説にあらず。大王よ、一切衆生、三界の煩悩の果報を断じ尽くす者を名づけて仏となす〉と。三無漏根および仏の三身を案ずるに、界の繋にあらずといへども、依身および所顕の処によるがゆゑに、出でずと言ふ。金剛以降は、修断の惑および二種の習あれば、体はまた有漏にしてこれ三界の摂なり。しかるに余の経論に、十解の第四に三界を出づといふは、伏位に仏性の証あるに約すればなり。三界の外に三種の聖人あり。智度論に、〈妙（十浄土あり？）、三界を困（困＝出過し？）、羅漢生ず〉等といふ。繋界に約すとは、何となれば、界に繋すれば自・他に調を受け、我・我所に執を受く。己（己＝已に？）三界に繋すと名づくることあらば、浄土たるやいなや。その義は上に説くがごとし。問ふ。体はすでに有漏なり。これ繋ならざるや。答ふ。これ有漏なりといへども、三界にあらず。未だ煩悩を離れざれば、皆有漏と名づくるも、五趣の所摂にして、はじめて三界と名づく。清（十浄？）土は趣にあらざること、土非趣（土非趣＝？）、上に分別するがごとし」と。

【現代語訳】龍興『観経記』巻上に云う、「問う。『大智度論』に、〈地上に住するので色界ではない〉と言われるのに、この経にはなぜ空中に住すると説かれるのか。答え。浄土を論ずる際に、大地の束縛を受けていると考えてはならない。それでは穢土と同じことである。欲界の天上界は、空中にあるけれでも、大地の束縛を受けているのである。阿弥陀仏は地上に安座し、諸の往生人はその機根に応じて仏を拝する。その際、空中にあれば仏の慈顔を近くで拝むことができるということである。

問う。食事をすると説かれているのは、欲界に繋がれていることにはならないか。答え。諸説ある。安恵等の見解によると、浄土は三界の繋を離れているが、往生者は不定であると言う。その他の論師の見解によると、浄土もまた不定であると言う。もし皆が煩悩を滅し回向発願して浄土に往生することができるのであれば、すでに発業惑も潤生惑も滅しているということは間違いないから、浄土は三界を越えていることになる。よって『大智度論』には、〈このような浄土は、三界には摂まらない。欲がないから欲界ではない。地上に住するので色界ではない。形があるから無色界ではない〉と言い、また『瑜伽師地論』（巻七十九、『大正蔵』三〇、七三六頁下）には、〈清浄世界には、欲界・色界・無色界がない〉と説かれる。一方、三界の外には衆生はないという見地によるならば、浄土も三界に摂まることになる。『仁王般若経』（巻上、『大正蔵』八、八二七頁上）には、〈一切衆生の煩悩は三界を出ることはない。一切衆生の果報である二十二根も三界を出ることはない。諸仏の応化身もまた三界を出ることはない。だから私は、三界の外に別に衆生があるという考えは、実体に執着する外道の教説であって、七仏の教えではないと言うのである。大王よ、一切衆生が三界の煩悩の果報を断じ尽くせば、それを仏と名づけるのである〉と説かれる。二十二根の中、三無漏根や、仏の三身などは、三界の繋を離れているけれども、それらが出現する場所のことを考えて、三界を出ないと言うのである。そもそも金剛地以前の菩薩には、修断の惑や二種の薫習が残っているので、その本体は有漏であり、三界の所摂である。にもかかわらずその他の経論に、十住の第四心において三界を出ると説かれるのは、伏忍の位で、仏性を一分悟るという立場によるものである。三界の外に三種の聖人があるということを、『大智度論』（不詳、『大乗義章』巻十九に言及、『大正蔵』四四、八三四頁下）に、〈妙浄の国土あって、三界を超出し、そこに阿羅漢が生まれる〉等と説かれる通りである。三界に繋がれるとは、迷いの世界の中で自他ともに束縛を受け、我と我がものとに執着するということである。三界に繋がれていて、浄土と言えるのか。その議論はすでに示した通りである。

問う。体はすでに有漏だと言うのであれば、三界に繋がれているのではないか。答え。体は有漏でも、三界には繋がれていない。煩悩を離れることができなければ、皆有漏と言われるけれども、地獄・餓鬼・畜生・人・天の五道に繋がれてはじめて三界の所摂となるのである。浄土が五道ではないことは、すでに述べた通りである」と。

(393) 安楽土義に云う羅什（曇鸞『略論安楽浄土義』、『大正蔵』四七、一頁上）、「問う。極楽は三界の中どこに摂まるか。答え。『大智度論』に言う、〈このような浄土は、三界には摂まらない。欲がないから欲界ではない。地上に住するので色界ではない。形があるから無色界ではない〉と。『無量寿経』には、法蔵比丘が世自在王仏から二百一十億の諸仏浄土の行を示され、それに基づいて浄土建立の大願を発し、無量阿僧祇劫にわたって諸行を修め、無常の悟りを完成されたと説かれる。よって極楽は、独自の修行によって成就した世界なので、三界には摂まらない」（要約）と。

(394) 浄土論上に云う加才（迦才、『大正蔵』四七、八五頁中～八六頁上）、「第二に極楽が

三界に摂まるか否かを明かす。問う。報土が三界を出過した世界であることは理解できるが、化土は地前凡夫の世界なので、三界に摂まるのではないか。答え。仏が三界を脱した存在であることは自明であるが、衆生については二つの見方ができる。ここではまず第一に、三界に摂まるという見解を紹介する。凡夫や小乗の行者が往生することから見て、極楽は三界に摂まると言える。彼らは三界の束縛を離れていないからである。『無量寿経』には、極楽では四天王天や忉利天が業力によって住すると説かれる。四天王天があるということは欲界があるということである。さらに『無量寿経』には、地居天から浄居天まであると説かれるので、欲界・色界があるということになろう。無色界もあるはずであるが、この経は、浄土の妙色すなわち目に見える荘厳を讃嘆して衆生に往生を勧めることに主眼を置くために、無色界のことは説かれていないだけである。極楽は、娑婆と同じく欲界であるが、極楽では貪欲が顕現することがないので、善心のみがある。『摂大乗論』十八円浄の中に、〈浄土には楽受のみあって、苦受・捨受はない〉と説かれている。『大法鼓経』も同様である。『無量寿経』には、極楽には微塵の悪も造られないと説かれる。よって娑婆と極楽とは異なるのである。三界に摂まると説かれるのは、三界の惑を断ずることのできない衆生のための教説である。極楽が三界にあれば、往生は易く、またそこでは貪欲が顕現しないので、三界の中にありながら不退転の位が得られるのである。以上は、三界内の衆生を救うため、三界の中にある浄土、すなわち化土について述べた。報土は三界の外の衆生を救うため、三界の外にある。浄土には三土の優劣があるのである」（要約）と。

(395) また云う（迦才『浄土論』巻上、『大正蔵』四七、八六頁中）、「次いで第二に、極楽は三界に摂まらないという見解を紹介する。初地以上の菩薩や阿羅漢・辟支仏は、三界には摂まらない。すでに煩悩の主体を断じているので、三界を超えている。『大智度論』に、〈妙浄土があって、三界を超えている。阿羅漢がそこに生まれる〉と言う。阿羅漢に達しない行者は、三界の中にあるのである」（要約）と。

(396) 無量寿経義疏上に云ふ法位（法位『無量寿経義疏』巻上、古逸）、「問ひて曰く、彼の国は三界道を出過すといふは、界外にして菩薩あるによるか。答へて曰く、彼に出過三界と云ふは、色あるによって無色界にあらず、地居のゆゑに色界にあらざればなり。純（ママ）（純＝能く）女人を化生せしむるがゆゑに、これ断惑に約して三界を出づるを明かすにはあらず。第二に、理に約さば、常に心性空を観ずるがゆゑに、文に云ふ、〈その心は寂静にして志は所着なし〉と。また法華経に云ふ、〈また仏子あり、心に所着なし。この妙恵をもって無常道を求む〉と。これらは十方浄土の因に通ずるなり」と。

【現代語訳】法位『無量寿経義疏』巻上に云う、「問う。極楽は三界道を出過するとは、三界を超えた菩薩の住処であることを言うのか。答え。〈出過三界〉と言うのは、物質があるから無色界ではなく、地上に住するから色界ではないという意味である。女人が生まれることのできる世界なので、煩悩を断じて三界を出過することを言うのではない。第二に、道理から考えて、法蔵比丘が常に心性空を観じて建立された浄土だから、出過三界と説かれるのである。『無量寿経』には、〈法蔵比丘の心は寂静であり、執着を離れている〉と言い、『法華経』（巻一、『大正蔵』九、三頁中）には、〈執着はなれた仏弟子が、仏道めざして智慧みがく〉と言う。これらは十方浄土建立の通因である」と。

(397) 同疏下に云ふ（法位『無量寿経義疏』巻下、古逸）、「出三界と言ふは、彼には欲なきがゆゑに欲界にあらず、地によるがゆゑに色界にあらず、色形あるがゆゑに無色界にあらず。ゆゑに出三界と云ふ。惑を除いて三界を出で、変易身を受くるを謂ふにはあらず。彼には分段身あるがゆゑに」と。

【現代語訳】法位『無量寿経義疏』巻下に云う、「出三界と説かれるのは、浄土には、欲がないから欲界ではない、地上に住するので色界ではない、形があるから無色界ではないという意味である。だから出三界と言うのであって、惑を除いて三界を出過し、変易身を受けることを言うのではない。極楽には分段身を受ける者があるからである」と。

(398) 阿弥陀経疏基に云う（『大正蔵』三七、三二一頁上～中）、「問う。極楽は三界に摂まるのか否か。須弥山はないけれども、六欲天等があると言うので、欲界に摂まるだろう。ではなぜ実の畜生はなく、化の畜生だと言われるのか。答え。『無量寿経』では欲界に摂まるようでもあるが、『大智度論』には、〈他方仏土の中、雑悪不浄の所は欲界の摂である。清浄の所は三界の摂ではない。形があるから無色界ではない。地上に住するから色界ではない。欲がないから欲界ではない〉と言う。よって極楽は欲界のようであるが、欲界ではない。三界の摂ではないから実の畜生はいないのである。また『正法念処経』には、〈四天王天以上には実の畜生はいない〉と言う。極楽の諸鳥も、宝玉や光明と同じく、阿弥陀仏が作り出したものである」（要約）と。

(399) 無量寿論釈第一に云ふ（智光『無量寿経論釈』巻一、古逸）、「論に曰く、〈彼の世界の相を観ずるに、三界道に勝過せり〉と。釈して曰く、自下第三に、経によって惣説す乃至仏、三界を見るに、これ虚偽の相、これ輪転の相、これ無窮の相なり。有情の三界垢穢不浄倒の処に漂流するを哀愍して、不虚偽・不輪転・不無窮にして畢竟安楽大清浄の処に安置せんと欲す。このゆゑにこの清浄功徳を起こす。成就と言ふは、これ清浄にして、染汚すべからず、破壊すべからざるがごとし。三界の、これ染汚の相、これ破壊の相なるがごときにはあらず。観とは観察なり。彼とは安楽国なり。世界相とは、安楽世界の清浄の相なり。勝過三界道の、道とは謂く通なり。かくのごときの因をもって、かくのごときの果を感じ、かくのごときの因に応ず。因に通じて果に通（ママ）（通＝至る?）。果に通じて因

に酬ゆ。このゆゑに道と名づく。その三界とは、一にはこれ欲界、謂く六欲天・四洲・三途なり。二にはこれ色界、謂く四静慮なり。三にはこれ無色界、謂く四空処天なり。かくのごとき三界は、愚夫の宅にしてみなこれ有漏なり。流転際なく、幻のごとし。因果相続して断ぜず。しかるに安楽国は、慈悲・正観のよって生ずるところにして、如来の神力本願の建立するところなり。四生の感報はこれによって遠離し、煩悩の業繫はこれによって永く断つ。それ往生するものあらば、道を修め行を積み、正定聚に入りて、かつて退転なし、このゆゑに勝過三界と言ふ」と。

【現代語訳】智光『無量寿経論釈』巻一に云う、「『浄土論』に、〈極楽世界を観ずれば　三界穢土を超えている〉と言う。註釈する。以下は第三に、経によって総説する。…中略…仏が三界をご覧になったところ、それは真実が皆無で、果てしなく迷いの世界に繫ぎ止められた者どもの世界であった。三界の汚らわしい苦しい世界を漂っている者どもを憐れみ、それらを真実にして迷いのない、永遠の安楽と清浄の世界に導いてやろうと思われた。だからこの清浄功徳を起こされたのである。成就とは、清浄にして汚れのない、決して壊れることのない世界を成就することを言う。汚れ壊れた三界の姿とは逆のことを言うのである。〈観〉とは観察、〈彼〉とは極楽を言う。〈世界相〉とは、極楽の清浄の相である。〈勝過三界道〉の〈道〉は、通ずるという意味である。これこれの因によってこれこれの果を得、これこれの因に報いる。因に通じて果に至り、果に通じて因に酬いる。だから道と言うのである。〈三界〉とは、一に欲界。六欲天・四洲・三途を言う。二に色界。四静慮天を言う。三に無色界。四空処天を言う。これら三界は、愚人の住みかであり、みな煩悩に汚されている。迷いの世界を果てしなくさまようこと、幻のようである。苦しみの因と果とが永遠に続くのである。ところが極楽は、法蔵比丘の慈悲と正観とによって出現し、如来の不可思議誓願力によって建立された世界である。迷いの生存を離れ、煩悩の束縛を永遠に断ち切った世界である。極楽に往生する者は、仏道を修め、修行を積んで、正定聚に住して退転することがない。だから〈勝過三界〉と言うのである」と。

【考察】

本項「54 三界摂不摂」には、極楽が三界の内か外かという問題に関連する要文が集められている。

この問題に対する『往生要集』の立場を求めると、たとえば大文第二「欣求浄土」の第四「五妙境界」の項には、世親『浄土論』の、「彼の世界の相を観ずるに、三界の道に勝過す……」という偈文が挙げられ、第五「快楽無退」の項には、「一たび七宝荘厳の台に託さば、長く三界苦輪の海と別かる」という文言が見える。また第七「聖衆倶会」の項には、龍樹『十住毘婆沙論』易行品より、「彼土の諸菩薩は、諸の相好を具足して、皆自ら身を荘厳す、われ今帰命礼す、三界の獄を超出し、目は蓮華葉のごとし……」という偈文が引用されていうる。さらに大文第十「問答料簡」の第五「臨終念相」の項では、「問ふ。生れてよりこのかた、諸の悪を作りて一善をも修せざる者、命終の時に臨みてわづかに十声念ずるに、何ぞよく罪を滅して、永く三界を出でて、すなはち浄土に生れん」という問いを発している。これらの記述から、源信は極楽を三界の外と見ていることがわかる。

ところが天台教学では、極楽は凡聖同居浄土であり、三界内の応土であると見るのが一般的である。

源信は、『往生要集』大文第十「問答料簡」の第一「極楽依正」の冒頭にこの問題に触れ、「問ふ。阿弥陀仏の極楽浄土はこれいづれの身、いづれの土なるや。答ふ。天台の云ふ、〈応身の仏、同居の土なり〉」と言い、続いて浄影の応身応土説、道綽の報身報土説を挙げるが、それについての私見は提示していない。いわゆる三身三土の判別に関する詳細な議論や、極楽の三界摂・不摂の議論はなされなかったのである。

その後、天台浄土教において、これは大問題となったようで、『安養集』に続いて編纂された『安養抄』では、巻一冒頭に「安養浄土は四種仏土中何なるか」という論題を掲げて、実に九十四の要文を列挙している。

『安養集』にもその問題意識があったことは明白である。国土の判別に関する要文は、巻六の大半を占める58「国土」の項に列挙され、本項「三界摂不摂」では、極楽の三界摂・不摂の問題を論ずるための要文が集められている。

(391)『安楽集』は、極楽は三界に摂まらないと主張する。その根拠として、『大智度論』の、「欲なきがゆゑに欲界にあらず……」という説と、『浄土論』の「彼の世界の相を観ずるに、三界の道に勝過し……」とを挙げている。後者は上掲『往生要集』にも言及された文である。

(392) 龍興『観経記』は、三界摂・不摂の両説を挙げ、不摂の方に賛同するが、極楽は有漏の世界であると言う。

(393) 曇鸞『略論安楽浄土義』は、三界不摂を主張する。その根拠として、道綽も用いる『大智度論』のほかに、『無量寿経』によって、法蔵比丘が別行によって成就した世界であるからという見解を提示している。

(394)(395) 迦才『浄土論』は、いわゆる通報化説に依拠して、報土は出三界、化土は三界内と主張する。

(396) 法位『無量寿経義疏』は、三界不摂だが煩悩は断じ尽くしていないという説と、法蔵比丘が心性空を観じて成就した世界だから三界不摂であるという説とを挙げる。前者

は（391）龍興『観経記』に近く、後者は（393）曇鸞『略論安楽浄土義』に近い。
（397）法位『無量寿経義疏』は、（396）所掲の二説の中、前者の立場と等しい。
（398）伝基『阿弥陀経疏』は、欲界のようではあるけれども三界には摂まらないと言う。
（399）智光『無量寿経論釈』は、曇鸞『往生論註』の記述とほぼ同文で、『浄土論』の「勝過三界道」を釈して、極楽の三界不摂を主張する文である。

以上九文には、天台宗の典籍が含まれていない。四土説に基づいて極楽を三界の内と見る天台宗の見解を提示するための要文は、ここに改めて挙げる必要はないと判断したからであろう。『安養集』は、本項に主として三界不摂を主張する要文を集めている。そこには、『往生要集』から読み取ることのできる源信の立場を補佐しようとする意図が看取されるのである。

55　五趣無有

（400）阿弥陀経に云う（『大正蔵』一二、三四七頁上）、「極楽国土には三悪道の名さえない」と。
（401）無量寿経に云う（『大正蔵』一二、二六七頁下）、「もしも私が仏の悟りを完成することができたとしても、その時、私の国に地獄・餓鬼・畜生の者がいたならば、私は決して仏の位には就かない」と。平等覚経（巻一、『大正蔵』一二、二八一頁上）、大阿弥陀経（巻上、『大正蔵』一二、三〇一頁上）、宝積経無量寿会（巻十七、無量寿如来会、『大正蔵』一一、九三頁中）の意これと同じ。
（402）同経述義記寂法師中に云ふ（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「第一、令国無悪趣の願。理として実には浄土には五趣ともになし。経に、横截五悪趣といふがゆゑに。論に、勝過三界道と言ふがゆゑに。しかるに天・人の両趣は、余方に因りて名あり。地獄等の三は、名・体悪にしてともに絶す。（十天？）人の両趣の余は、一向になきによるがゆゑに、ただ三言（ママ）（言―？）と説く」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中に云う、「第一に、令国無悪趣の願。道理としては、浄土には五趣はすべてない。本経に、〈横さまに五悪趣を断ち切っている〉と言い、『浄土論』には、〈三界道に勝過する〉と言う通りである。ただし天と人とは、余方に順じて、すなわち他方世界での呼び名を用いて表現するので、人天の名称だけはある。地獄・餓鬼・畜生の三つは、名称も本体も悪であり、ともにない。天・人の両趣以外は、まったくないので、無三悪道と説かれるのである」と。
（403）同経上に云う（『無量寿経』巻上、『大正蔵』一二、二七〇頁上）、「また地獄・餓鬼・畜生、諸難の趣はいない」と。平等覚経（巻一、『大正蔵』一二、二八三頁上）、大阿弥陀経（巻上、『大正蔵』一二、三〇三頁下）等の言、これと同じ。
（404）また云う（『無量寿経』巻上、『大正蔵』一二、二七一頁下）、「極楽の声聞・菩薩・天・人は、みな智慧・神通力・容姿に何ら変わるところがない。ただ余方に因順して、すなわち他方世界での呼び名を用いて表現するので、人・天の名称だけがある。皆自然に虚無の身、無極の体すなわち悟りの身体を得ているのである」（要約）と。
（405）同経述義記中に云ふ（義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「一に、形状一類のゆゑに譏嫌なし。謂く、男女人天等の別なし。問ふ。人天、別なしといへども、余方に因るがゆゑにあり。またいっつべし、男女、異なしといへども、余方に因るがゆゑにまたありと。答ふ。女はかならず穢の器たり。五礙のゆゑに彼にはなし。人天はさらに互に勝なれば、余に因りて彼にはならびにあり。因順余方にそれ二義あり。一に本業に随ふ。謂く、往生者に、或は人業を資として生ずるものあり、或は天業を資として生ずるものあり。彼に生ずる時には、形に異状なしといへども、本業に因順して、人・天の名あり。二に居処に因る。謂く、彼土の中には、或は地に依りて居るものあり、或は空に在りて居るものあり。彼の果報、形に異状なしといへども、所在の処に随ひて、人・天の名あり。ゆゑに旧本に云ふ、〈その国中に、須弥山あることなく、その日・月・星辰・第一四天王・第二忉利天、皆虚空中にあり〉と。二に、根欠の陋なきがゆゑに譏嫌（ママ）（嫌―？）嫌なし。謂く、〈顔貌端政なること超世希有なり〉等と。〈天にあらず人にあらず〉とは、穢土の人天の報と同じからざるなり。〈みな自然虚無の身無極の体を受く〉とは、胎蔵の生育する所にあらざるがゆゑに自然なり。飲食の長養する所にあらざるがゆゑに虚無なり。老死の殞没する所にあらざるがゆゑに無極なり。念念の滅哉ありといへども、これ尽終なきがゆゑに。またこの身に即して成仏に至るがゆゑに」と。

【現代語訳】義寂『無量寿経述義記』巻中、古逸）、「第一に、形状が一類なので、譏嫌がないと言う。男女や人天の差別がないということである。

問う。人天の差別はないけれども、他方世界に準じてその名称があると言うのならば、同じように、男女の差異はないけれども、他方世界に準じてその名称はあると言えるのではないか。答え。女は穢の器であり、五障の存在なので、極楽には存在しない。人・天はやや勝れた存在なので、他方世界に準じて存在する。〈因順余方〉には二義ある。一つには因業による。往生人には、人業によって往生した者と、天業によって往生した者とがある。往生の後は、その形状に差別はないけれども、因業によって人・天の名称が付される。二つには居処による。極楽には、地上に居る者と虚空に在る者とがある。往生の後は、その形状に差別はないけれども、所在の場所によって、人・天の名称が付される。だから

旧本（『平等覚経』）に云う、〈極楽には、須弥山はない。よって日・月・星辰や第一四天王・第二忉利天は皆、虚空にある〉と。

第二に、身体的欠陥がないから譏嫌がないと言う。よって往生人は、その顔貌の端正なこと世にもまれであると説かれるのである。〈天にあらず、人にあらず〉とは、穢土の人天とは同じではないことを言う。〈みな自然虚無の身無極の体を受く〉とは、母胎によって生育される身ではないので、自然と言う。飲食によって長養される身ではないので、虚無と言う。老死によって滅びる身ではないので、無極と言う。一念一念に生滅するけれども、終わり尽きるということがないからである。この身のままで成仏に至るからである」と。

（406）同経連義述賛璟興中に云う、（憬興『無量寿経連義述文賛』巻中、『大正蔵』三七、一五七頁中）、「一説によると、経に、〈天にあらず、人にあらず〉とあるのだから、極楽に生まれた者は、凡夫といえども人天趣ではない。よって浄土は三界には摂まらない。『大智度論』に、〈欲がないから、地上に住するから、物質があるから、欲界・色界・無色界ではない〉と説かれる通りであると言う。しかしこの説は誤りである。本願には三途がないと言うのみであり、人天なしとは誓われていない。三界の外に衆生があるというのは仏説ではない。ここでは、人天はあってもその差別がないと言うのである。ただ穢土の業によって人と天とに分けられる。だから余方に因順して人天の名のみがあると説かれるのである。諸天は皆虚空にある。帛延訳『平等覚経』に、〈四天王天・忉利天が虚空に住止する〉と説かれる通りである」（要約）と。

（407）平等覚経上に云う（巻一、『大正蔵』一二、二八四頁上）、「往生人の身体は、人間のものでも天上のものでもない。積み重ねた徳によってもたらされた、自然虚無の身体で、この上なくすばらしい」（要約）と。

（408）観経記興上に云ふ（龍興『観経記』巻上、古逸）、「平等経のごときには、〈その身体は世間人の身体にあらず、また天人の身体にもあらず、皆自然虚無の体を受く〉といふ。また文の終には、〈天にあらず、人にあらず〉といふ。ゆゑに両巻に、〈余方に因順するがゆゑに人天の名あり。超世希有にして、天にあらず、人にあらず、皆自然虚無の身、無極の体を受く〉と云ふ。問ふ。もし天人にあらずと云はば、何のゆゑに経に、〈阿難、仏に白す、《須弥山なくば、その四天王天および忉利天は、何によって住するや》と。仏、第三炎天、色究竟天を挙げて通ず〉と云ふや。また後の文に、〈仏、阿難に告ぐ、《なんぢ彼の国を見るに、地より已上浄居天まで、その中の所有の微妙厳浄自然の物、悉く見るとなすやいなや》〉と云ふや。かくのごとき等の文、いかんが通ずべき。答ふ。かくのごとき疑のためのゆゑに、宗を立てて、〈余方に因順するがゆゑに人天の名あり〉と言ふ。すでに宗を聞きて、重ねて疑ふべからず。また大集に云ふ、〈浄光仏国の人は、天と差別あることなく、地に在らば人となし、虚空を天となす〉と。今ここに引く所、ただこれ解すべし」と。

【現代語訳】龍興『観経記』巻上に云う、「『平等覚経』には、〈その身体は、人間の身体でも天人の身体でもない、皆自然に実体を離れた身体を受けている〉と言い、また文末に、〈天にあらず、人にあらず〉と言う。よって『無量寿経』には、〈余方に因順して人天の名だけがあるが、世間とはかけ離れて素晴らしく、天でもなく、人でもない。皆自然に実体を離れた悟りの身体を受けている〉と言うのである。

問う。もし天人ではないと言うのならば、なぜ『無量寿経』に、阿難が仏に、〈須弥山がないのならば、四天王天や忉利天は何によって住するのですか〉と問い、仏は、第三炎天や色究竟天を引き合いに出して会通されたのか。あるいは巻下では、仏が阿難に、〈地居天から浄居天までの微妙厳浄の自然の荘厳がすべて見えるか〉と問われのはなぜか。これらの文をどのように会通すべきか。答え。このような疑問に答えるため、『無量寿経』に宗要を示して、〈余方に因順して人天の名だけがある〉と説かれたのである。宗要を聞いた上は、疑いを重ねてはならない。『大集経』（巻四、『大正蔵』一三、二五頁中）には、〈浄光仏国の人は、天と差別がない。地上にあれば人と呼び、虚空にあれば天と呼ぶのである〉と言う。『無量寿経』の文もこのように理解せよ」と。

（409）同経疏闇下に云ふ（道闇『観経疏』巻下、古逸）、「或は浄土あり、二乗および天人の名あり。妙喜世界等のごとし。或は浄土あり、二乗あるも人なし。極楽世界のごとし。乃至 ゆゑに無量寿経に云ふ、〈その諸の声聞・菩薩・人天は、智恵高明にして神通洞達す。みな同じく一類にして、形に異状なし。ただ余方に順ずるがゆゑに、天人の名あり〉とは、その義なり」と。

【現代語訳】道闇『観経疏』巻下に云う、「二乗および天人の名がある浄土として、妙喜世界等がある。また二乗はあるが人はない浄土としては、極楽世界がある。…中略…『無量寿経』に、〈極楽の声聞・菩薩・人天は、智恵や神通力が並外れてすぐれている。すべて形状は同じである。ただ余方に因順して天人の名だけがある〉と説かれるのは、そういうことである」と。

（410）群疑論六に云う（『大正蔵』四七、六五頁下）、「問う。『大智度論』には、分段生死の身を虫身肉身と言い、『大品般若経』には、不退転の菩薩の身中には八万の虫はいないと言う。極楽では分段生死の身を受けるのだから、虫身があるはずである。なのに『阿弥陀経』には極楽には三悪趣なしと言う。どう解釈するべきか。答え、極楽では分段の身を受けるけれども、八万の虫はない。『大智度論』や『大品般若経』に言うのは穢土のことである。穢土でも、色界の諸天には八万の虫はない。壊劫の末には三災が起こってまず三

悪趣が滅びるので、その時には人間の身にすら八万の虫はいない。まして浄土の清浄の身体においてはなおさらである」（要約）と。

【考察】

本項「55 五趣無有」には、極楽に五趣があるかいなか、特に人・天二趣のあり方について論ずるための要文が集められている。

『阿弥陀経』や『無量寿経』は、極楽には地獄・餓鬼・畜生の三悪趣は、その名さえ存在しないと説かれる。しかし「国中人天」等という文言があって、人・天の二趣は存在するようであり、そのあり方が問われるのである。前項の三界摂不論から派生する問題であり、したがって『往生要集』には取り上げられていない。

ただし前項に述べたように、源信は極楽を三界の外と見ているので、極楽に三界六道の人・天が存在するとは考えていないことは明白である。『往生要集』大文第一「厭離穢土」は、六道の苦相を説く章であり、人道・天道の項においても、その穢相を示すことに専念していて、それが善趣であるなどということは一切述べていない。

それを十分に承知した上で、『安養集』はここに「55 五趣無有」という論題を設けているのである。

（400）（401）（403）は、無三悪趣を説く『阿弥陀経』『無量寿経』の経文、（402）義寂『無量寿経述義記』は『無量寿経』第一願の釈である。

それに対し、（404）『無量寿経』には、「余方に因順して人天の名あり」と説かれ、以下その「因順余方」を根拠として極楽の人天のあり方を理解しようとする要文が列挙されている。

（405）義寂『無量寿経述義記』は、「因順余方」に、因業によると形状によるとの二つの意義を挙げ、浄土の人天は穢土の人天とは異なることを言う。

（406）憬興『無量寿経連義述文賛』は、極楽はあくまでも三界内の浄土であるという立場から、穢土とは異なるけれども浄土にも人天があることを主張している。

（407）『平等覚経』は、（404）『無量寿経』と同一箇所の異訳である。それを用いて、（408）龍興『観経記』には、往生人の身体は、穢土の身体とは全く異なるものであることを言い、『大集経』を用いて、地上の者を人と呼び、虚空の者を天と呼ぶだけであるという説を提示している。

（409）道闇『観経疏』は、極楽には二乗はあるけれども人趣はないと言う。

（410）『群疑論』は、極楽では分段身は受けるけれども、穢土の虫身を受けることはないと言う。

前項「三界摂不摂」の項には、三界不摂を主張する文ばかりが集められていたが、本項では、（406）憬興『無量寿経連義述文賛』（409）道闇『観経疏』等、極楽を三界内とする見地から人天のあり方を論じた文が挙げられている所に、議論を深化させようとする意図が看取されよう。

56 雑浄穢同処異処

（411）群疑論懐感一に云う（懐感、『大正蔵』四七、三四頁中～三五頁中）、「問う。極楽には穢土はあるのかいなか。答え。二説ある。第一に、極楽はただ浄土のみで、穢土はないとする。浄と穢とは同処同時には並立しないとする立場である。第二に、浄土と穢土とが同処同時に並立するという立場である。盧舎那仏の蓮華座に穢土の相があるように、浄穢は互いに障礙せず、所見に応じて浄穢不同と見るのが大乗の立場である。『摂大乗論』等に説かれる。ただし西方極楽浄土は、ただ浄のみにして穢相はない。

問う。道安の『浄土論』に、浄と穢とは、一質すなわち本体は一つのものであるけれども、見る者によって変わるのか、それとも異質すなわち本体が別々のものであり、且つ見た目も異なるのか、それとも無質すなわち本体がないものが、見えているだけのか、と問い、次のように答えている。〈一質ではないから、浄穢に満ち欠けがある。異質ではないからその根元を探ると一つになる。無質ではないから因縁によって種々に変化する〉と。この文義を説明してほしい。答え。浄土と穢土とは、浄業と穢業とによって自心を変化させ、浄穢の相を描き出すことによって現れるものである。心が浄ならば土は浄であり、心が穢ならば土も穢である。だから一質ではないから浄穢に満ち欠けがあると言うのである。『維摩経』（巻上、『大正蔵』一四、五三八頁下）に、仏が足で地面を踏まれると、浄が満ちて穢が欠けると説かれている通りである。また浄穢の両心が浄穢の二土を現ずるのだから、浄穢は同処同時に現われるということである。よって異質ではないからその根元を探ると一つになると言うのである。無質ではないから因縁によって種々に変化するとは、浄土と穢土とは、同処に現れるけれどもその相が異なっている、浄業と穢業の違いによって種々に変現するのである。それは因縁所生の依他起性として土の相が現れるということである。遍計所執性によって本体のない物を見ているのではない。だから無質ではないから因縁によって種々に変化すると言うのである。

問う。浄穢二土が同処ならば、同所同時に異質の物が存在することになるのではないか。答え。極微の実体においては同所同時に二つの物が存在できないというのは、説一切有部の見解で、大乗とは立場が異なる。大乗では、時間や空間は不定である。心によって浄穢

が現れるという、唯識の妙旨をもってすれば、物質的な障礙はないのである。

問う。穢心が現ずる世界は、穢土であろう。どうして穢心が浄土の相を現ずることができよう。答え。本体が浄にして穢相を現ずることもできるし、その逆も可能である。一心の上に浄穢の相を現ずるのである。また仏の本願によって衆生に浄土の相を現じさせるという場合は、有漏の凡夫が清浄の仏土を現ずることができる。他力を増上縁とすることによって、有漏の心に浄土を現じさせるのである。また仏には大神力があるので、浄・穢の相を自在に示現することができるのである。こたび浄土に往生することは、諸仏の力によるのであるから、凡夫の浅智恵によって疑難をなしてはならない。教えの通りに修行せよ」（要約）と。

安養集巻第五

右は宝園院本をもってこれを書写せしむるものなり

明暦二丙申歳九月吉日　　江州栗太郡芦浦観音寺舜興蔵　印

【考察】

本項には、『群疑論』巻一の文が一文のみ引用されている。『群疑論』巻一には、冒頭から仏土論が展開され、三身三土義、三界摂不等が議論され、最後に浄穢同異の問題が扱われている。『安養集』は、そのすべてを三つに分割して引用している。巻六「58 国土」（424）に三身三土と極楽報化の判別、（430）に三界摂不の文が掲げられ、本項（411）には、最後の浄穢同異を論じた箇所が引用されている。極楽は浄土と穢土とが相雑した世界であるという見地から、その浄穢の関係を論ずる問答である。懐感は法相教学に依拠して、浄穢は心の所現であるという見解を述べている。

この問題は、『往生要集』には扱われていない。『安養集』がここに『群疑論』によって一論題を立てたのは、法相宗との対論を想定したためと考えられよう。

以上で巻五が終わる。奥書は各巻共通である。